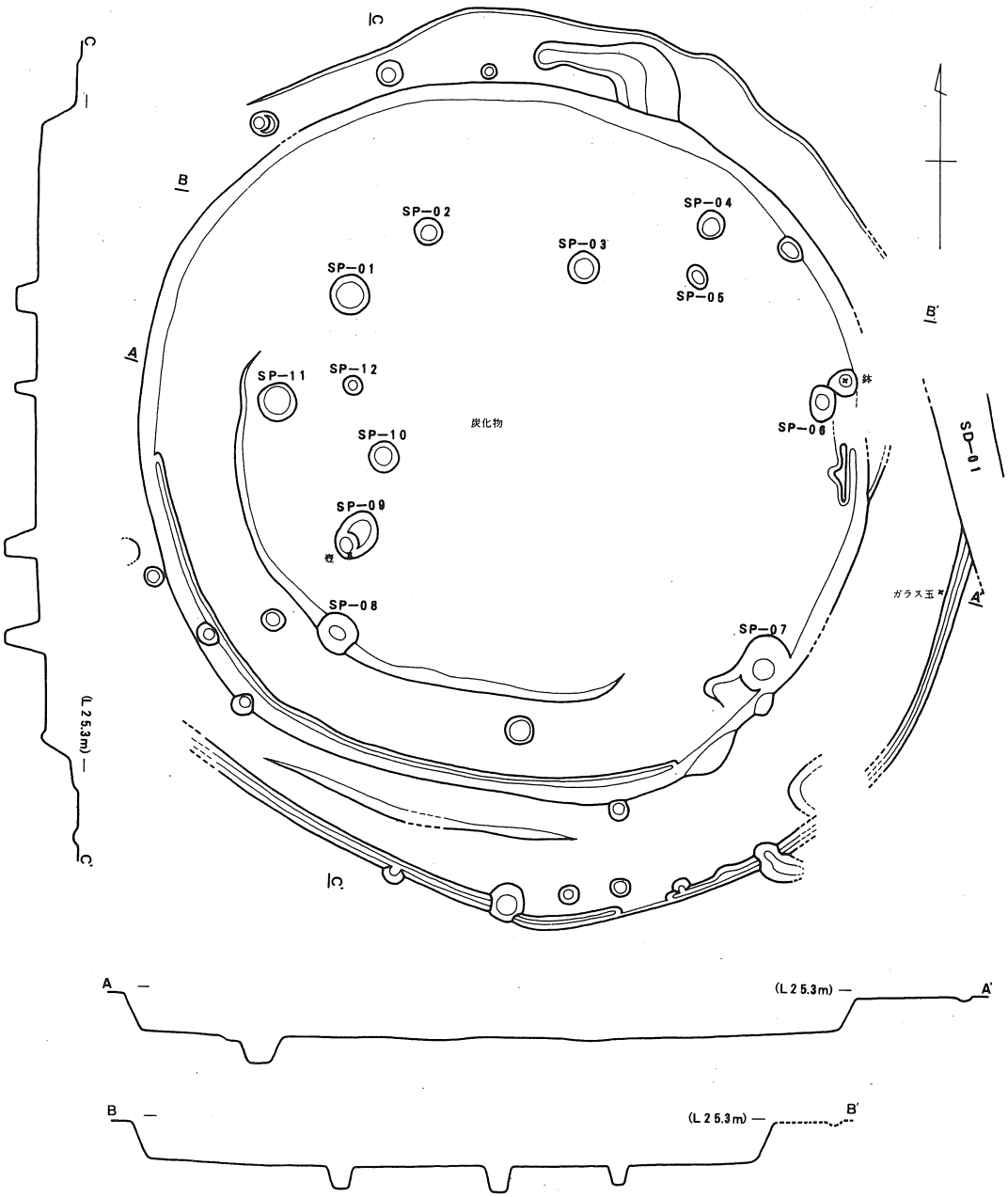


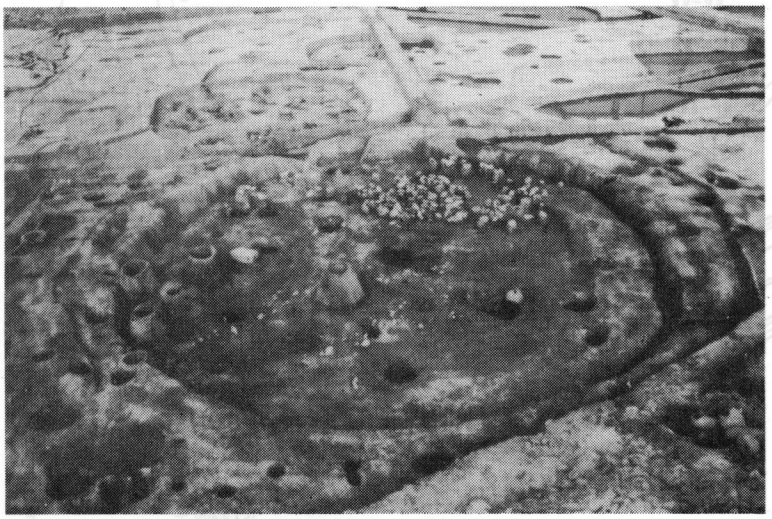
第85図　ＳＴ−20 平・断面図

ＳＴ−20

ＳＴ−20は最大径が約９ｍの不整円形を呈する大型の竪穴住居で、中央部に直径が７ｍ程のほぼ円形の床面がある。周囲には幅50〜120cm・床面との比高差35〜37cmのベッド状遺構がめぐらされており、床面の南西部分にも幅70〜80cm・床面との比高差10cm程の段状の遺構が認められる。検出された遺構面から床面までの深さは44cm・床面の平均レベルは24.86

m・住居の面積は約58㎡で、東端を一部古墳時代の溝・ＳＤ－01に切られている他は、別の住居などとの切り合いはなく、良好な遺存状況であった。また、床面で検出された多数のピットのうち、大きさや深さからみて、この住居の柱穴に相当するものとしてはＳＰ－01～11の11個が挙げられるが、その配置は極めて不規則である。

ＳＴ－20の埋土は弥生土器の小片と小礫を多く含む黒褐色土のみであり、層序は認められなかった。しかしながら、埋土中からは床面より浮いた状態で比較的残りの良い弥生土器が数点・住居の南東部では床面から５～20㎝浮いたところで10～30㎝の大きさの河原石や弥生土器が、投げ込まれたような状態で集中し多量に出土している。床面直上からはＳＰ－06わきの小土坑から作りの丁寧な小さな鉢と、ＳＰ－09上から壺が出土しただけであったが、埋土中でみられた残りの良い遺物と床面直上の遺物との時期差は認められず、礫群の中には砥石・砥石用石材・火に接して赤黒く変色した石などが多く見られたことなどから、こ



第86図

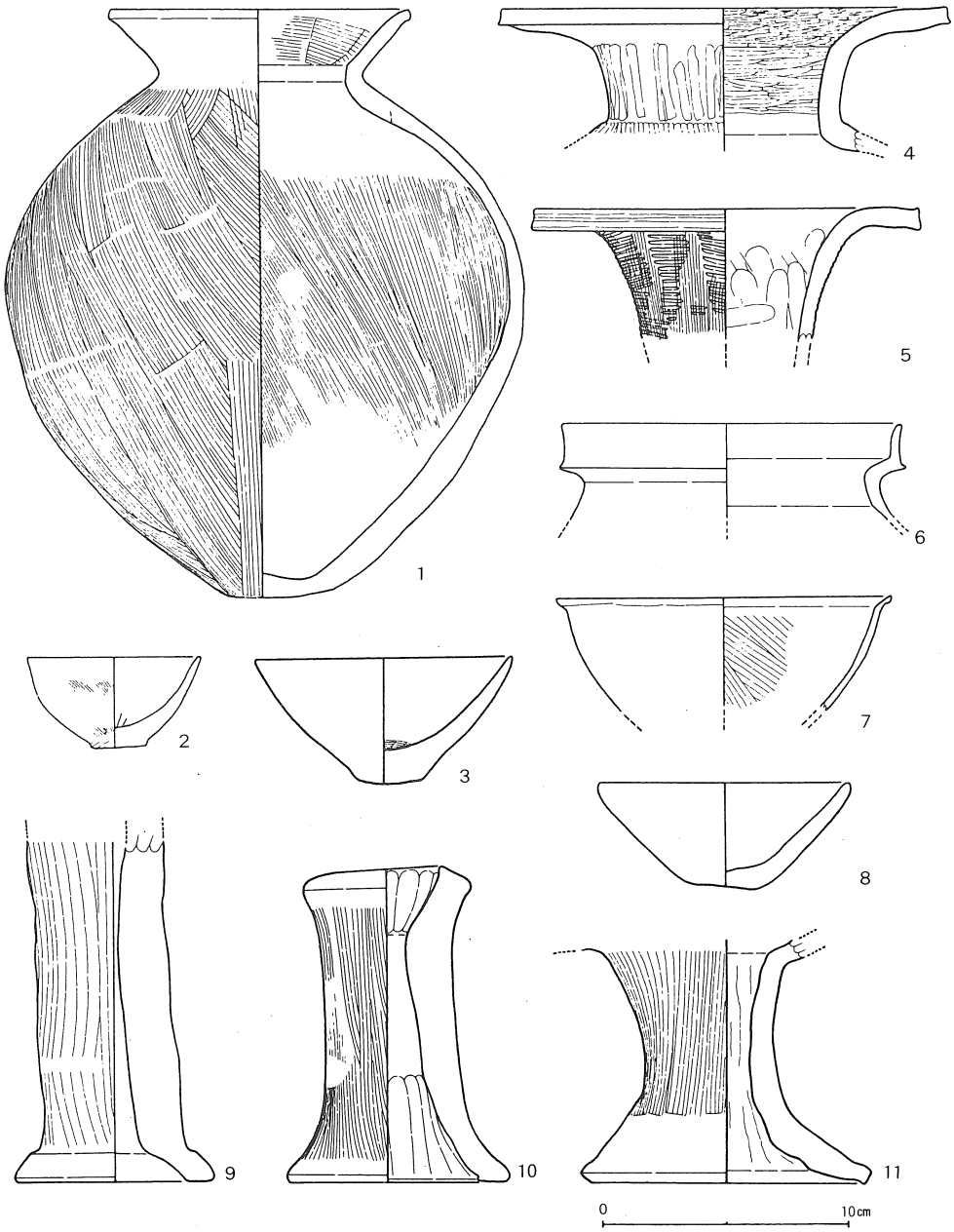
ＳＴ－20（西から）

第87図

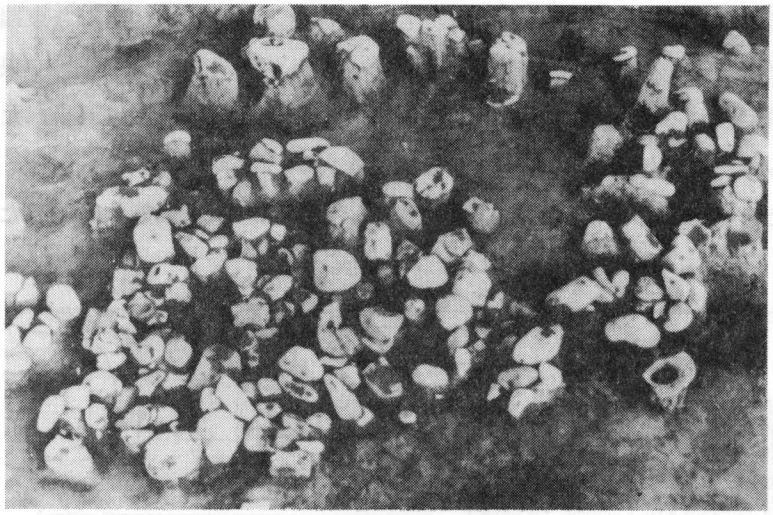
ＳＴ－20のベッド状遺構

れらは住居の廃絶に伴い、土砂と一緒に投棄されたものと考えられる。また他にも東端部のベッド状遺構上でガラス玉が一点、埋土中からは獣骨片３点・鉄器片２点と住居中央部で葦のような植物と推定される炭化物の塊が出土している。炭化物は格子状に編まれたように見える部分もあるが、遺存状況は悪く詳細は確認できなかった。

ＳＴ－20は出土した遺物を中心に検討した結果、弥生時代後期末頃に機能し廃絶したと考えられる。

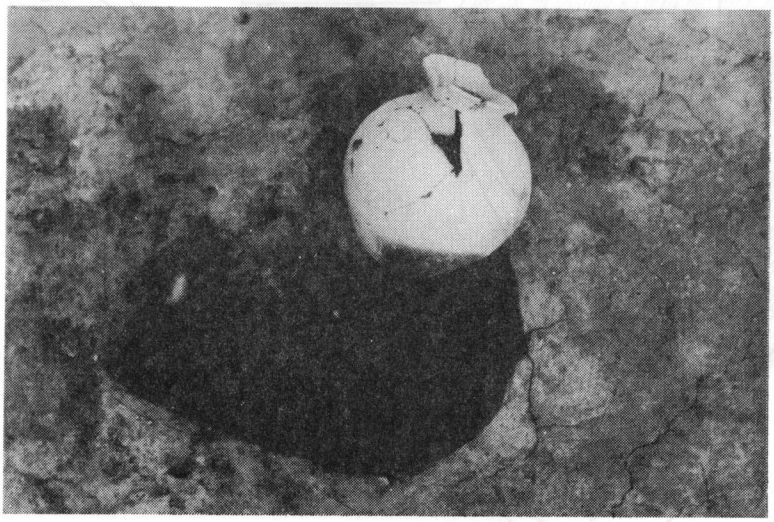


第88図　ＳＴ－20出土遺物実測図　（１　ＳＰ－09から出土　２　ＳＰ－06わきの小土坑から出土　３～11　埋土中から礫群と伴に出土）



第89図

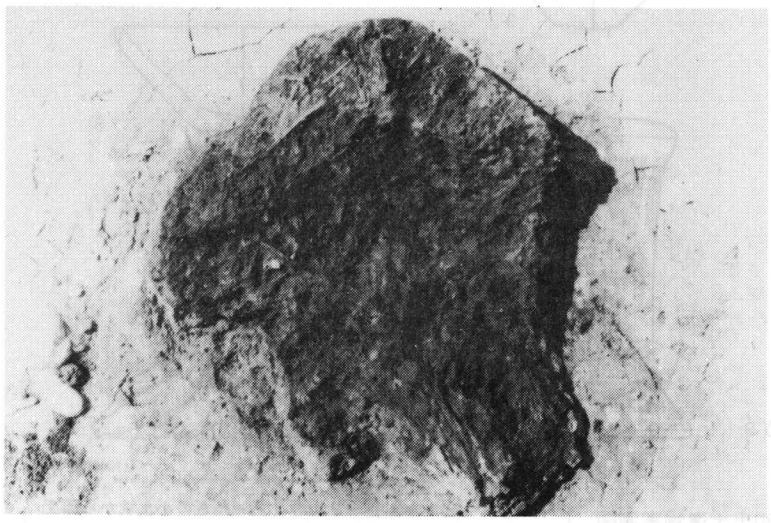
埋土中の礫と遺物



第90図

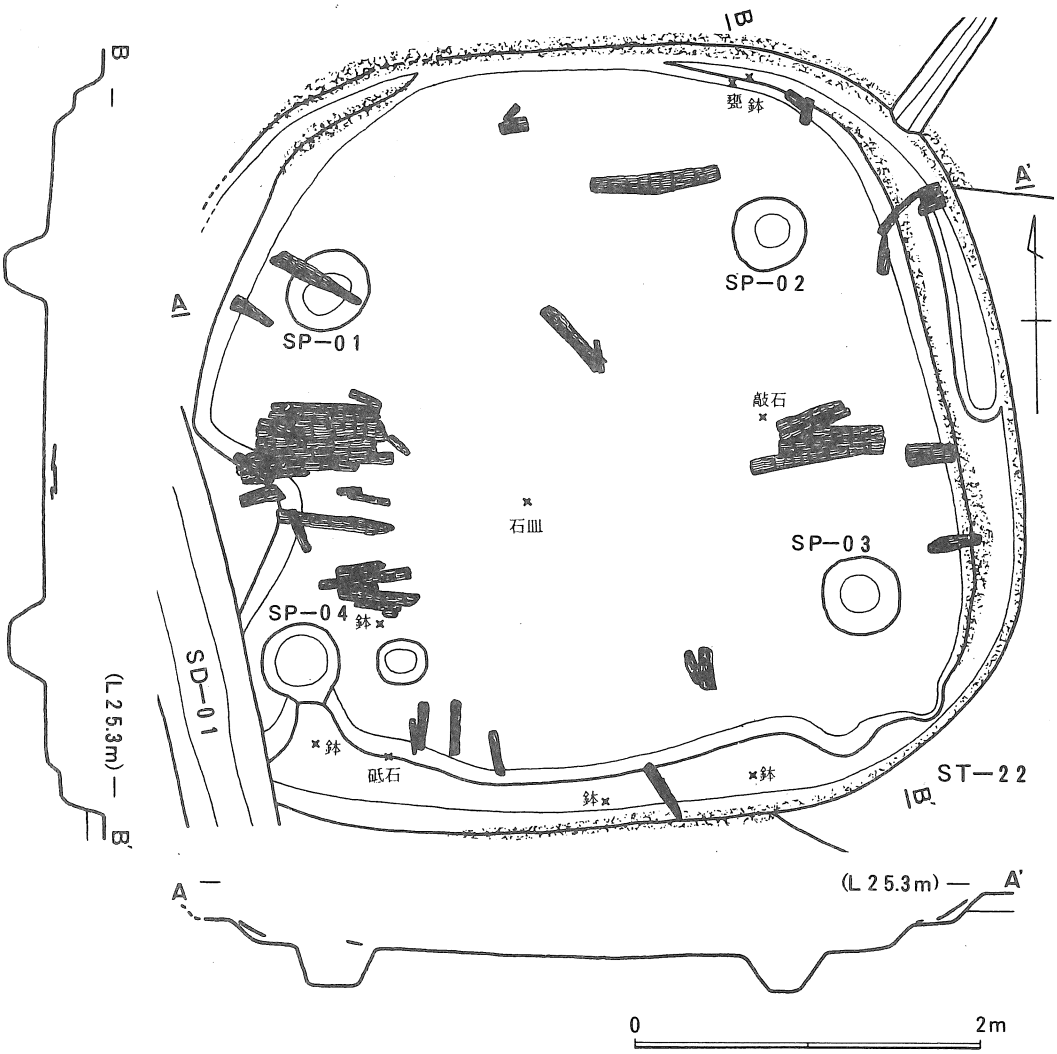
遺物の出土状況

（ＳＰ－09上）



第91図

炭化物の出土状況



第92図　ＳＴ−21 平・断面図

ＳＴ−21

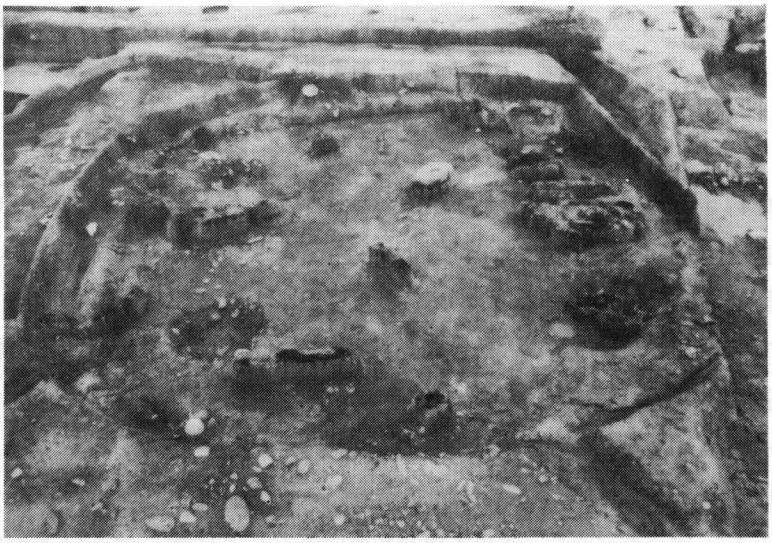
ＳＴ−21は長軸が約５ｍ・短軸が4.5ｍの不整円形に近い隅丸方形の竪穴住居で、主軸方位はＮ−６°−Ｗを向いており、検出された遺構面から床面までの深さは34cm・床面の平均レベルは24.9ｍ・住居の面積は約19.62㎡である。ＳＴ−21は西端部を一部、古墳時代の溝・ＳＤ−01に切られている他は遺存状況は比較的良好で、北壁添いを除いた床面周囲には幅15〜30cm・床面との比高差10〜15cmの張り出した段状の遺構が不規則にめぐらされており、住居の柱穴はＳＰ−01〜04の４個が床面の各隅に台形状に配置されているのが確認できた。

埋土は2、3cmの小礫と小さな木炭片を多量に含む黒褐色土で、20〜25cm掘り下げたところで棒状の炭の塊・５〜10cmの河原石・弥生土器が多量に出土し、住居の壁面は西側壁の一部を除いた周囲が焦土と化し灰褐色に変色して堅くなっていることなどから、ＳＴ−21が焼

失した住居であることが歴然と判別できた。壁面の焼け方は西側壁を除いて全体的に強く焼けており、特に東壁部分が極めて強く焼けていること・大きな棒状の炭はほとんどが東西方向に倒れていることなどから、この住居が火災に見舞われた時の風は西より東に強く吹いていたと考えられる。炭の塊と伴に出土した河原石・弥生土器については火に接して変色したものが多く、延焼中に投げ込まれたものではないかと考えられる。ここからは他にも楕円形の小さな砥石や鉄器片が出土している。また、埋土中には弥生時代中期中葉から後期末頃までの小さな土器片・分銅型土製品片なども含まれてはいたが、出土状況から埋土と伴に後から混入したものとそうでないものは容易に区別できた。

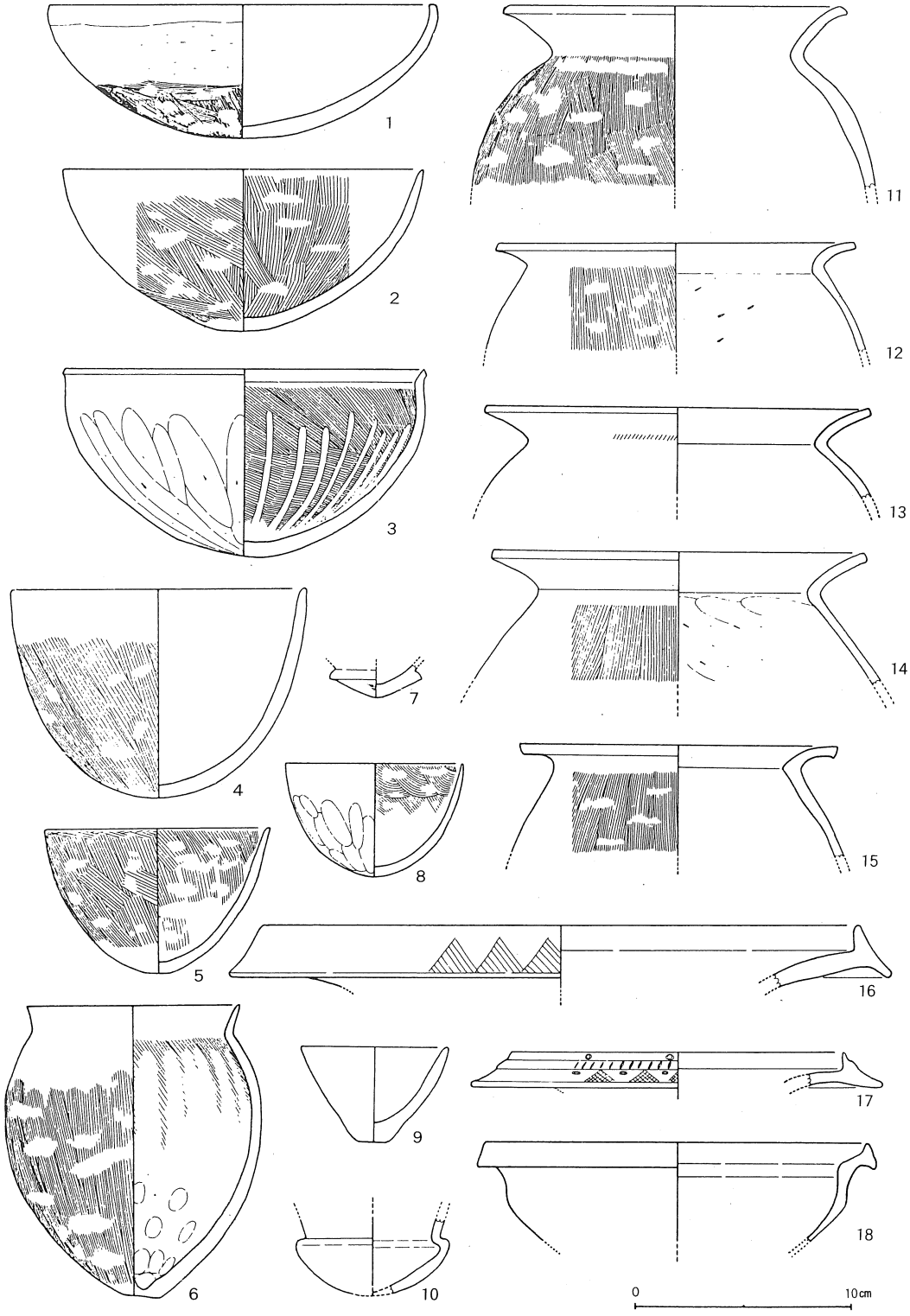
多量に炭の塊が出土した面より下層では、礫をほとんど含まない黒褐色土が埋土となっている。そして、壁面に添って検出された段状の遺構直上からは、極限までみごとに使い込まれた凝灰岩製の砥石の他、鉢や甕などの弥生土器が出土しているが、これらの遺物も全て火に接して変色してしまっている。床面直上からは40×26cmの河原石製の石皿と片麻岩製の敲石が出土しており、石皿はあまり変色はしていないが火災による高温のためにはじけたように割れてしまっている。

床面直上から出土した弥生土器については火災による二次的な焼成を受けているため、傷みがひどく変色してしまってはいるが、延焼中に投げ込まれたと推定される土器群との時期差は認められず、これらは非常に良好な一括資料であると考えられる。また、これらの出土遺物を検討した結果、ＳＴ－21は弥生時代終末期頃に機能し火災により廃絶したと考えられる。

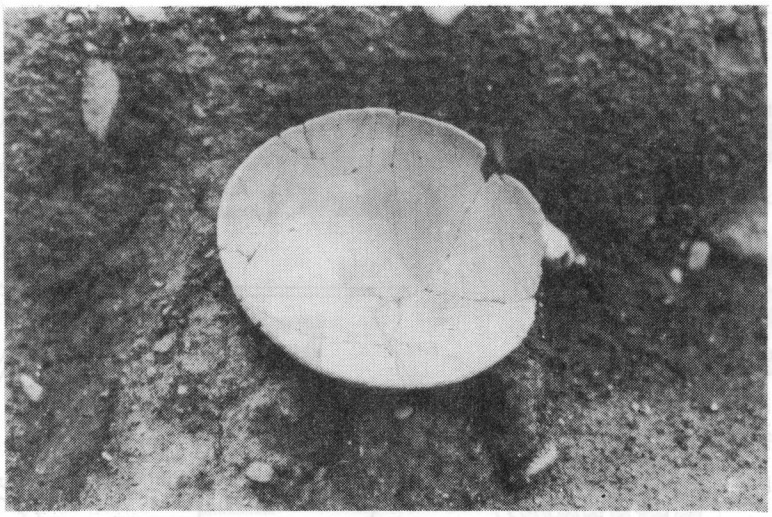


第93図

ＳＴ－21（北から）

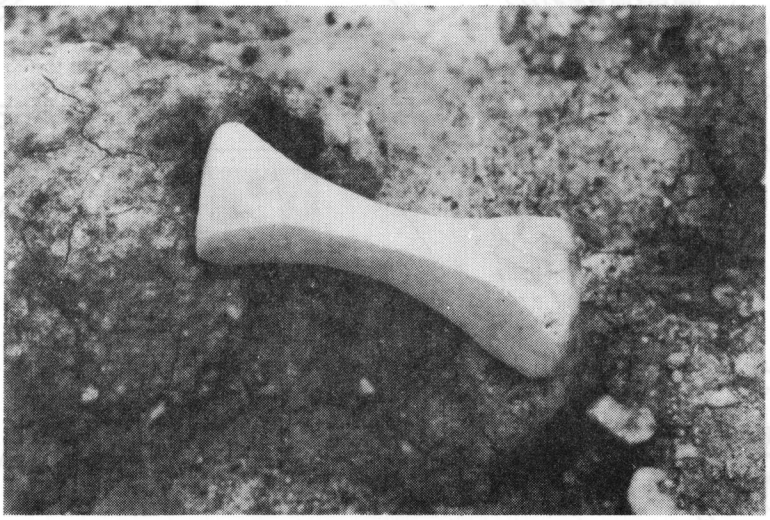


第94図　ＳＴ－21出土遺物実測図　（1・4～6・8・9　床面直上から出土
2・3・7・10・11～18　埋土下層から出土）



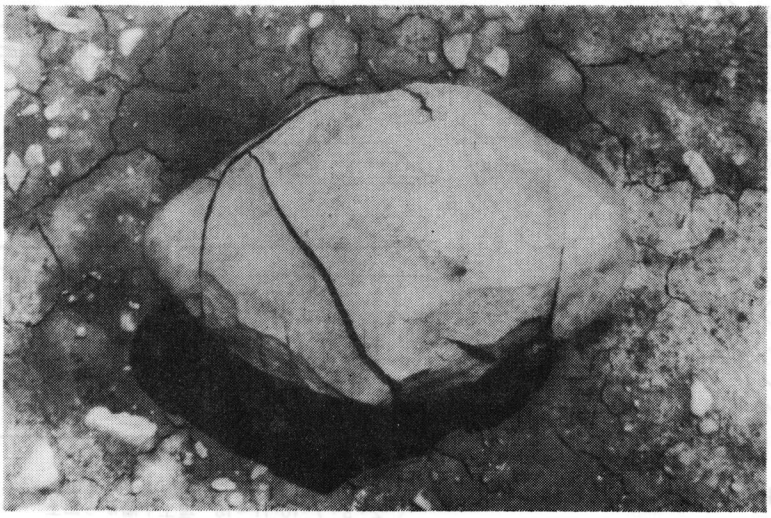
第95図

鉢の出土状況



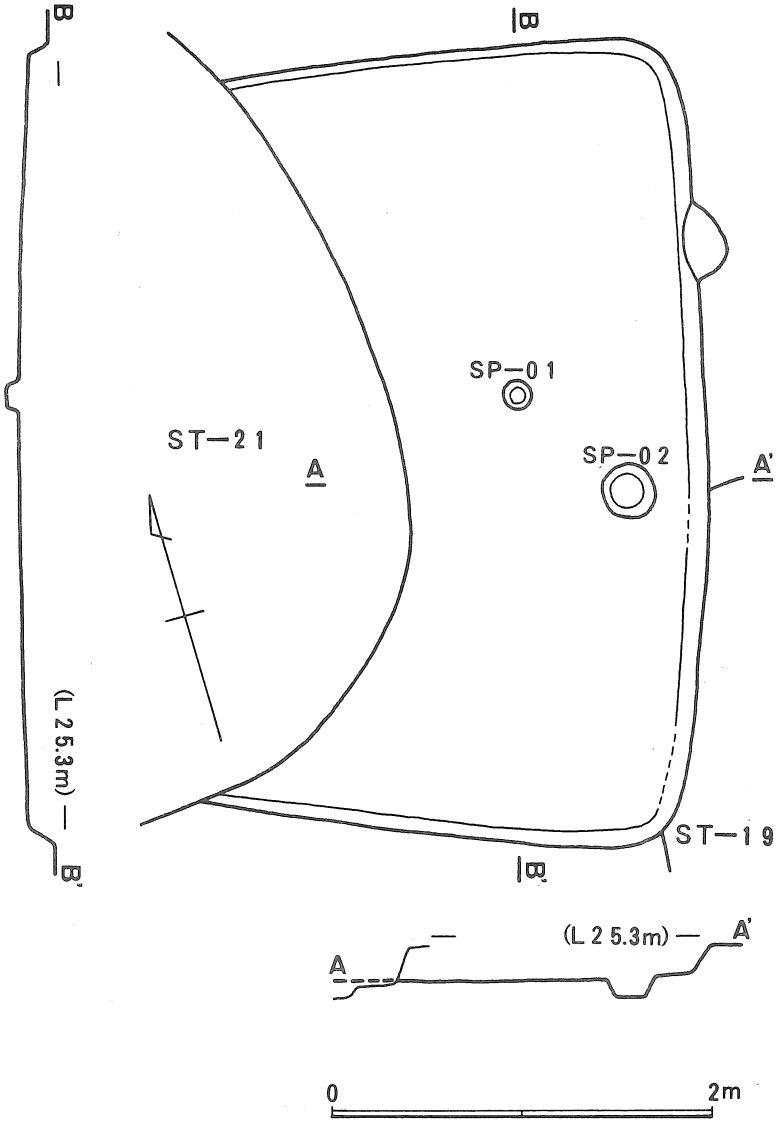
第96図

砥石の出土状況

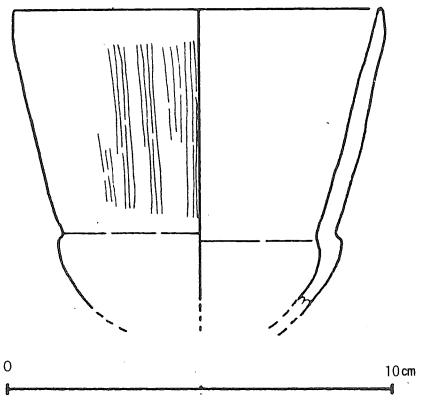


第97図

石皿の出土状況



第98図　ＳＴ−22平・断面図

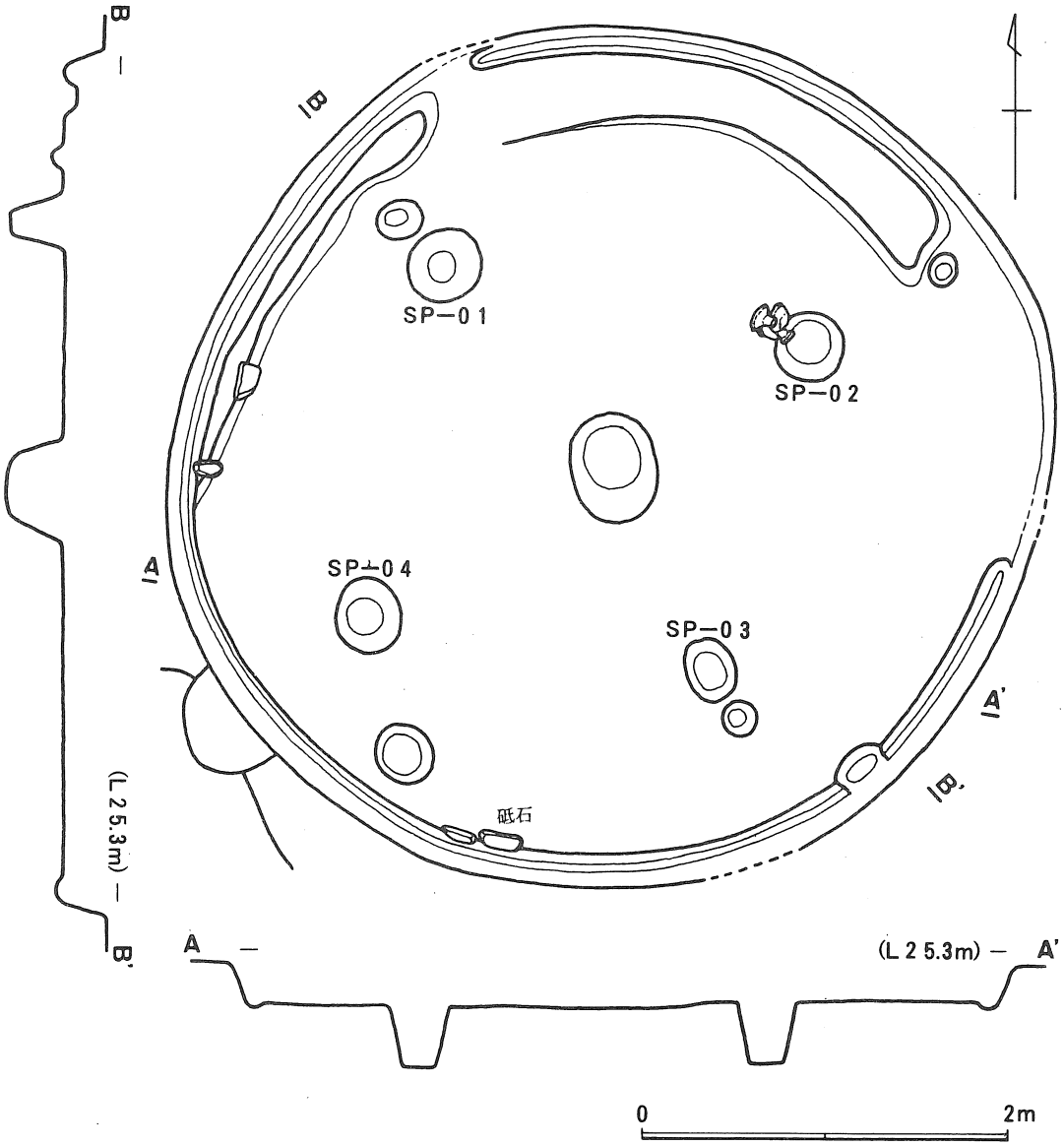


第99図　ＳＴ−22出土遺物実測図

ＳＴ−22

ＳＴ−22はそのほとんどをＳＴ−21に切られてはいるが、遺構の形がしっかりしていることから隅丸方形の竪穴住居ではないかと考えられる。床面ではＳＰ−01•02の２個のピットが検出されたが、いずれも浅く、この住居の柱穴に相当するか否かは疑問である。ＳＴ−22の東壁は直線的で約４ｍあり、その方位はＮ−17°−Ｅを向いており、北壁と南壁はいずれも内行し西に向かって狭くなっている。また、検出された遺構面から床面までの深さは18㎝•床面の平均レベルは25.07ｍである。

ＳＴ−22の埋土は2、3㎝の小礫を多く含む灰褐色土で層序は認められなかった。床面直上に遺物はみられなかったが、埋土中からは弥生時代中期中頃から後期末頃にかけての小さな土器片と、比較的残りの良い弥生時代終末期頃の土器が出土しており、ＳＴ−21との切り合い関係などと考え併せて、ＳＴ−22は弥生時代終末期の、ＳＴ−21よりも前ではあるがそれと近い時期に機能し廃絶したと考えられる。



第100図　ＳＴ−23平・断面図

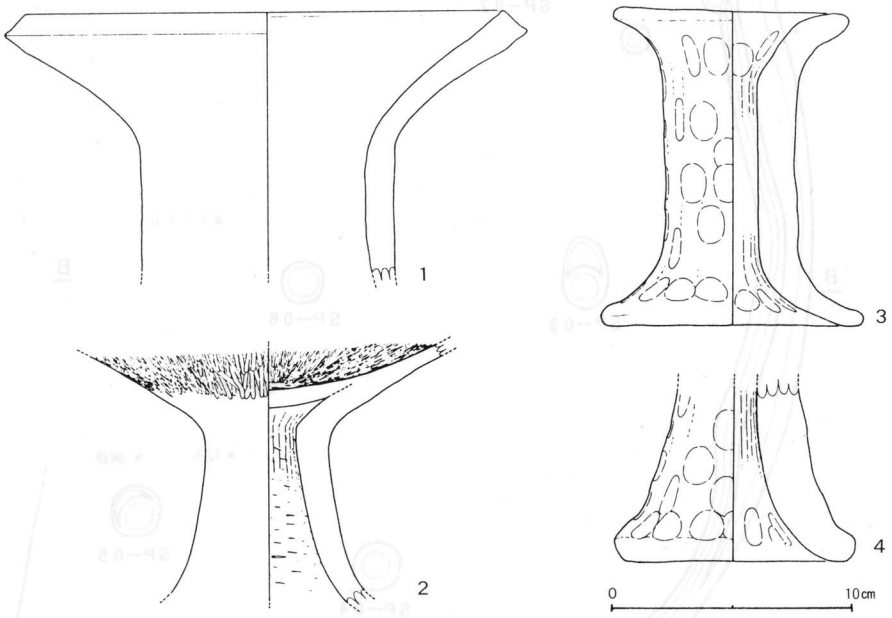
ＳＴ−23

ＳＴ−23は南北に4.7ｍ・東西に4.9ｍのほぼ円形を呈する竪穴住居である。検出された遺構面から床面までの深さは23㎝・床面の平均レベルは25ｍ・住居の面積は18㎡で、他の遺構との切り合いも認められず遺存状況は良好であり、北壁添いで２カ所に高さ７㎝・幅10㎝前後と高さ３〜５㎝・幅30㎝の段状の遺構が確認できた。また東壁添いの一部を除いた床面周囲には幅15㎝・深さ４〜８㎝のＵ字形の断面を呈する周溝が不規則にめぐらされている。

ＳＴ−23の埋土は暗茶褐色土のみで層序は認められなかった。床面で検出されたピットのうち、この住居の柱穴に相当するものは、その埋土や遺存状況からＳＰ−01〜04の４個であ

ると考えられ、主軸方位がN－約10°－Eに向く方形に配置されている。また床面中央では45×60cm・深さ30cm程のピット状の穴が検出されたが、これの埋土は他の柱穴のものとは異なり炭化物を多く含む黒褐色土であったため、性格不明の土坑と考えた。

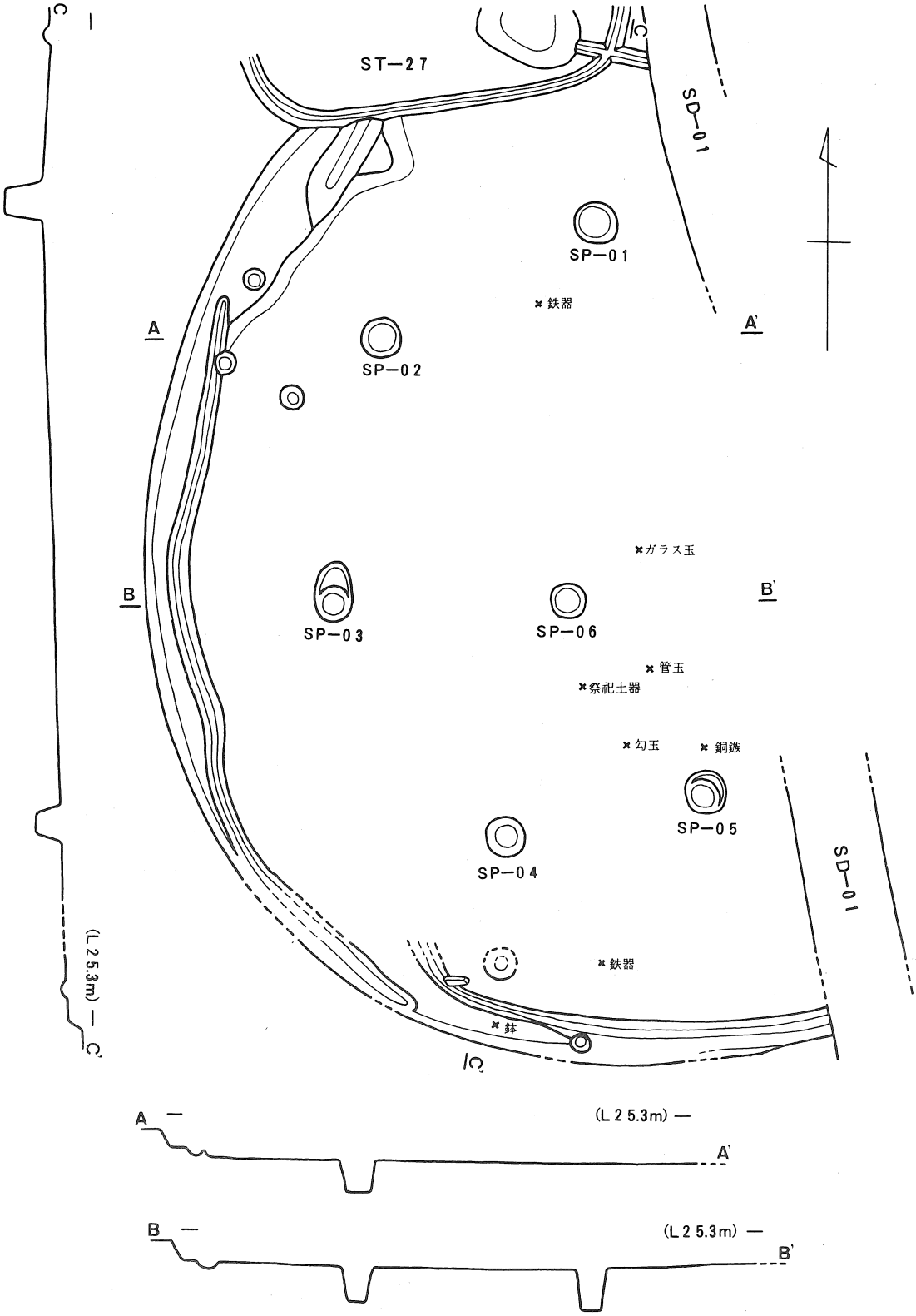
埋土中に含まれていた土器片は少なく小片ばかりであったが、ＳＰ－02わきの床面直上から完形の支脚一点を含む弥生土器が集中して、そして南端部の周溝わきからは石英粗面岩製の砥石が一点出土した。これらの遺物を住居の形態などと併せて検討した結果、ＳＴ－23は弥生時代後期中葉の初め頃に機能し廃絶したものではないかと考えられる。



第101図　ＳＴ－23出土遺物実測図　（1～4　床面直上から出土（ＳＰ－02わき）

第102図

ＳＴ－23（北から）



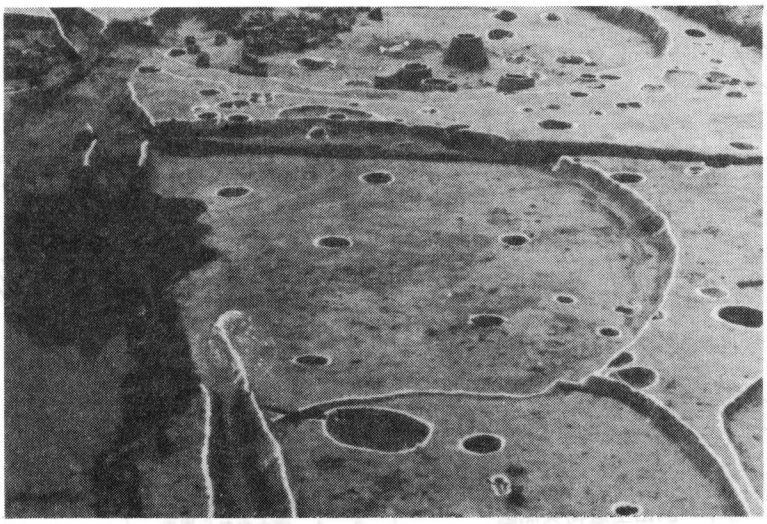
第103図　ＳＴ—24平・断面図　0　2m

ＳＴ－24

ＳＴ－24は南北に約８ｍの不整円型を呈する大型の竪穴住居であるが、床面までが比較的浅かったらしく、検出された遺構面から床面までの深さは遺構の中央部で20㎝・床面の平均レベルは25.06ｍであった。ＳＴ－24はほぼ東側半分を現代のゴミ廃棄坑によって掘削されてしまっていることと併せて、住居の形態が不整円形であることから、正確な規模については解明できなかった。残りの良い西側半分では、壁面に添って幅10～40㎝・床面との比高差８㎝程の段状の遺構が不規則にめぐらされており、その内側に添って幅10～15㎝・深さ４～６㎝程のＵ字形の断面を呈する溝が認められた。また住居の床面は全体的に平坦であり、ＳＰ－01～06の６個の柱穴と考えられるピットが検出された。

ＳＴ－24の埋土は黒褐色土のみで層序は認められなかった。埋土中には分銅型土製品片・炭化種子の他、弥生時代中期中葉から後期末頃までの土器片が含まれており、そのほとんどは住居の廃絶後に埋土と伴に混入したものであると考えられた。また、中にはこの遺構に伴う遺物であるか否かは不明であるが、この埋土の下層部から極めて写実的に作られたイノシシ型土製品が出土した。これは高さ３㎝・幅2.5㎝程のもので目・鼻・口・牙・鼻の穴が丁寧に作り付けられており、目は向って左から右への貫通孔で表現され、左右の目の後方には竹管文状の文様が認められる。そして置いた時に安定するように、腹の部分が幅広く平坦に作られている。床面直上から出土した３㎝程のミニチュアの壺と併せて祭祀遺物であると考えられる。

遺構直上から出土した土器は、南端部の段状の遺構直上に伏せて置かれた状態で出土した手づくねの小さな鉢だけであったが、床面中央からやや南寄りの平坦部では硬玉製勾玉・碧玉製管玉・ガラス玉・ミニチュア土器・銅鏃が、床面北端と南端の床面上からは鉄器片が一点づつ出土している。ＳＴ－24からは多くの特殊な遺物が出土しているが、遺構の構

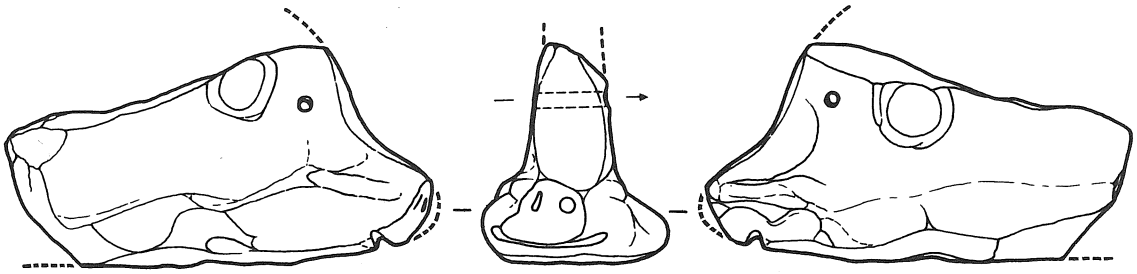


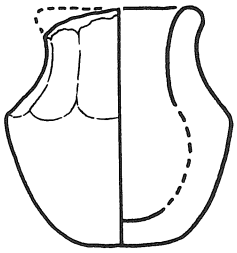
第104図

ＳＴ－24（北から）

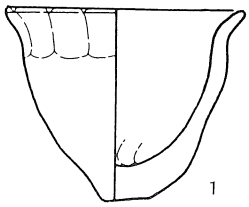
成時期を知り得るものは少なかった。またＳＴ－24は北端部で弥生時代後期後半頃の遺構と推定されるＳＴ－27と切り合っているが、その新旧関係を明確にすることはできなかった。

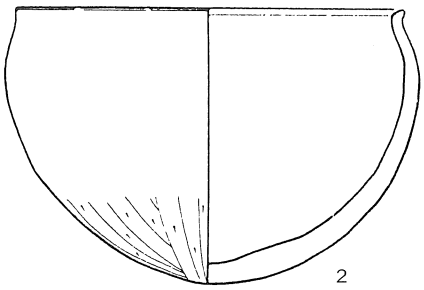
ＳＴ－24は調査結果を総合的に検討した結果、弥生時代終末期頃に機能し廃絶したものではないかと考えられる。

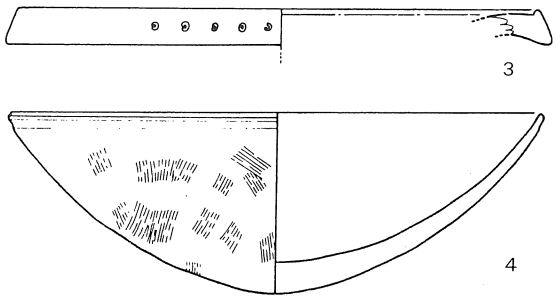




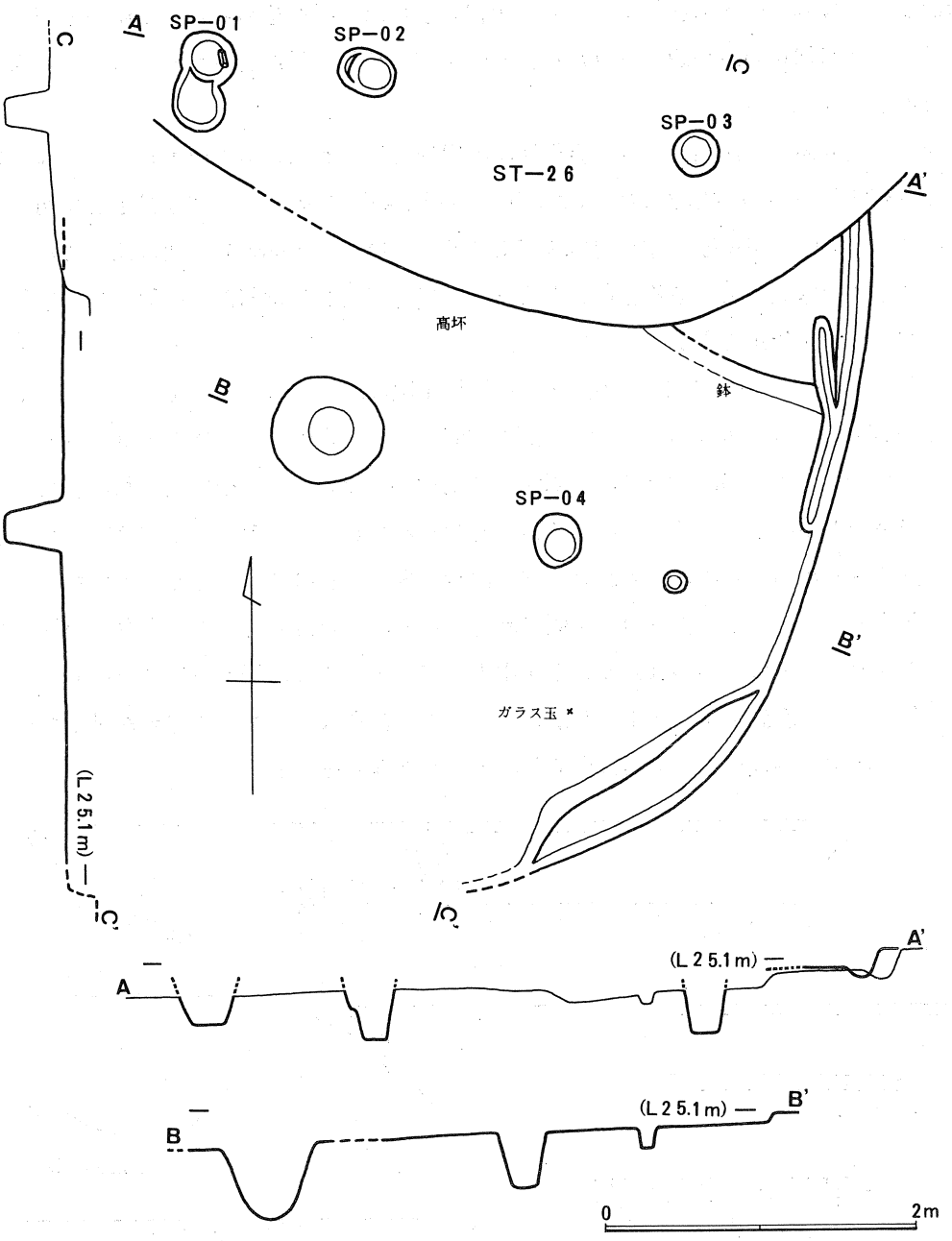
（上．イノシシ形土製品（原寸）　埋土下層から出土
左．ミニチュア土器（原寸）　床面直上出土）







第105図　ＳＴ－24出土遺物実測図　（1　床面直上から出土
2～4　埋土中から出土）



第106図　ＳＴ−25平・断面図

ＳＴ−25

ＳＴ−25はＣ−６グリッドの南西部分を中心として発掘区西壁添いで検出された竪穴住居であるが、遺構の西側半分は発掘区外にあり、北側部分を弥生時代終末期頃の遺構・ＳＴ−26によって切られているため、調査できたのは住居全体の三分の一に満たないと思われる。

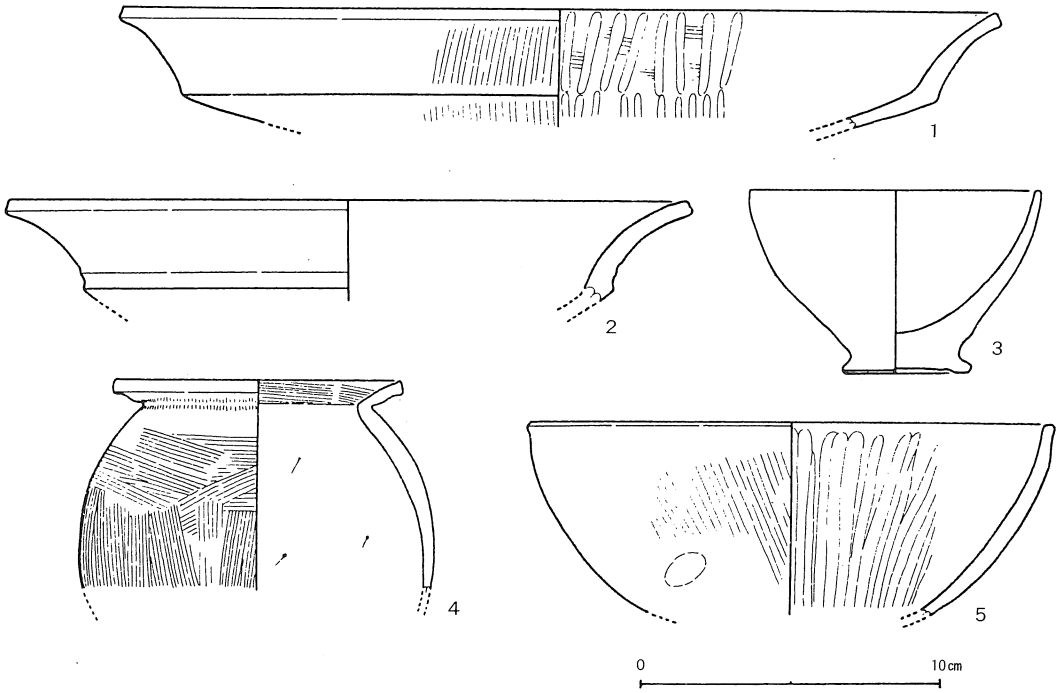
検出された範囲内での遺構の深さは24cm・床面の平均レベルは24.88ｍである。南東部の

壁面添いでは幅25cm・床面との比高差４cm程の張り出し部が認められ、東側の壁面添いでもベッド状遺構状の段が認められたが、その殆どをＳＴ－26に切られているため詳細は不明である。

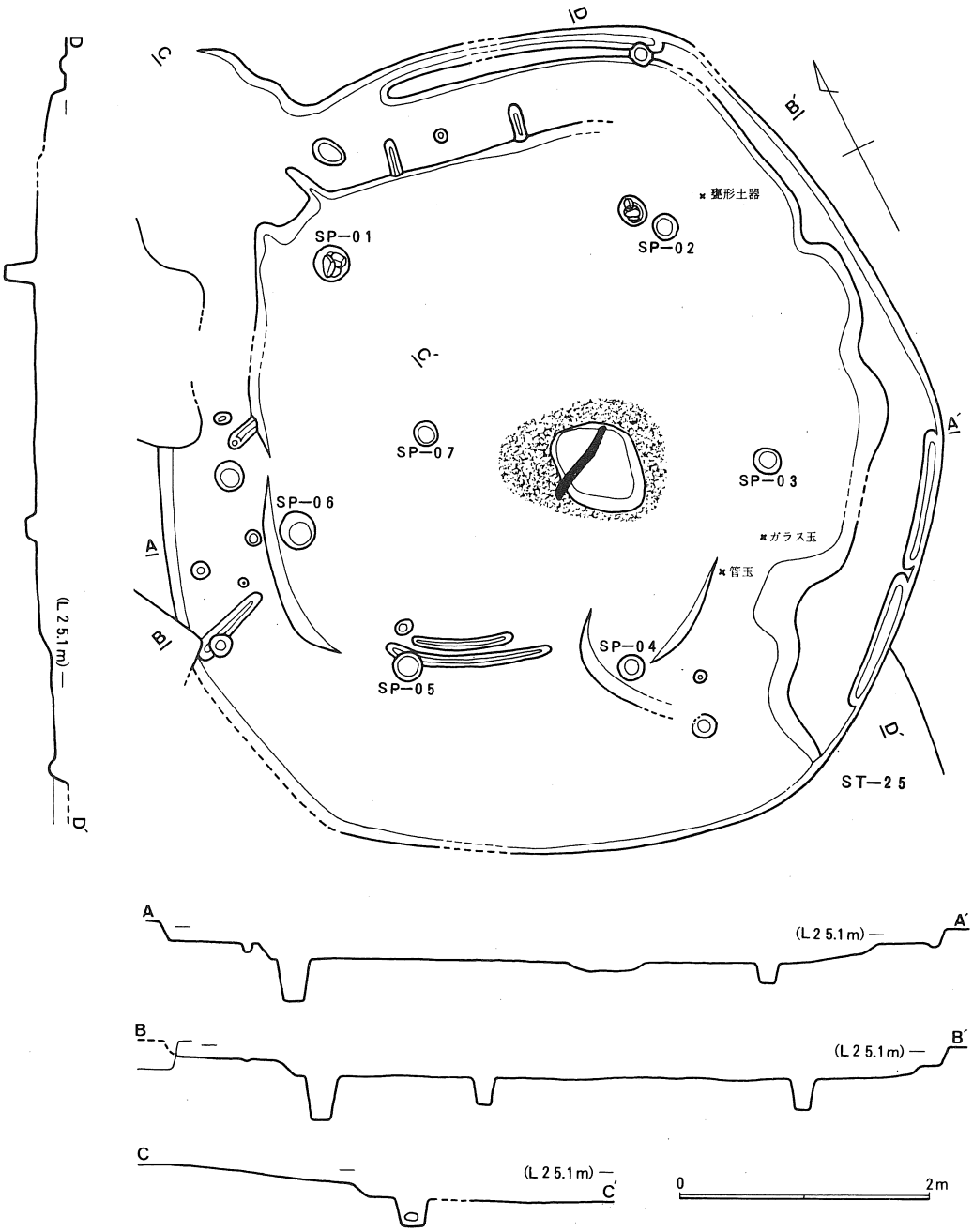
発掘区西壁添いの床面上では、直径70cmの円形で深さ50cmの暗茶褐色砂質土の埋土を持つ性格不明のピットが検出された。またＳＴ－26床面西壁添いのベッド状遺構上を東西に走る小さな溝がＳＴ－25の壁面に添う溝の残存であるらしいことと併せて、他の住居でみられたように住居の床面中央にある土坑と考えるならば、直径が７ｍ前後の円形若しくは多角形を呈する住居が想定できよう。

ＳＴ－25の埋土は弥生時代中期中葉から後期後半頃にかけての土器片を多く含む暗茶褐色土で、層序は認められなかった。また、ＳＴ－25とＳＴ－26との床面の比高差は余りみられなかったが、ＳＴ－26の南端部分では黒褐色の埋土を取り除いて床面を検出した後、暗茶褐色の土層が一部検出され、ＳＴ－25の残存部分であるらしく、この土層を取り除いた段階でＳＰ－01～03が検出されたためＳＰ－04と併せてＳＴ－25の柱穴であると考えた。

床面直上からは、中央土坑の北東側で高坏・東壁添いの段のすぐ下から台付小鉢・南東側の張り出し部分の下からはガラス玉が出土している。この住居の構造については不明な点が多いが、床面直上から出土した遺物や埋土中に含まれていた土器片を検討した結果、ＳＴ－25は弥生時代後期中葉頃に機能し廃絶したと考えられる。



第107図　ＳＴ－25出土遺物実測図　（１～３　床面直上から出土　４・５　埋土下層から出土）



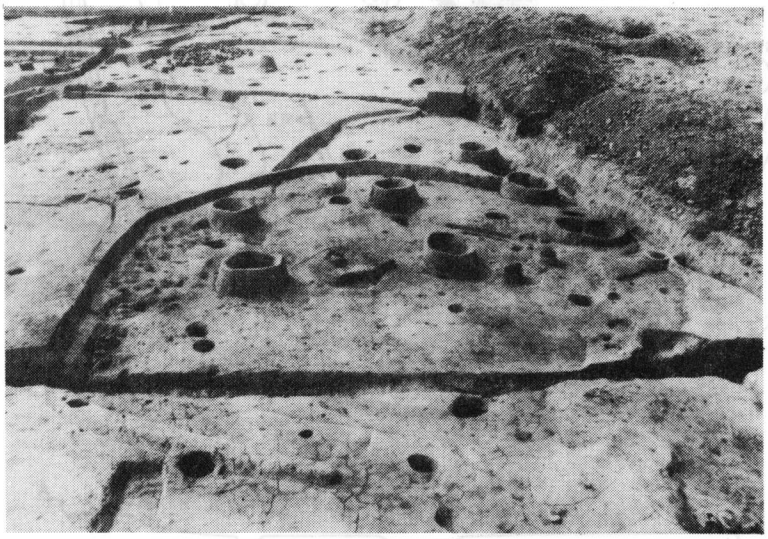
第108図　ＳＴ−26平・断面図

ＳＴ−26

ＳＴ−26は長軸が７ｍ・短軸が6.3ｍの竪穴住居であり、その形は歪んでいるため主たる方位は不明であるが明らかに六角形を呈している。検出された遺構面から床面までの深さは27cm・床面の平均レベルは24.88ｍ・住居の面積は33.2㎡である。この遺構は古墳時代の建

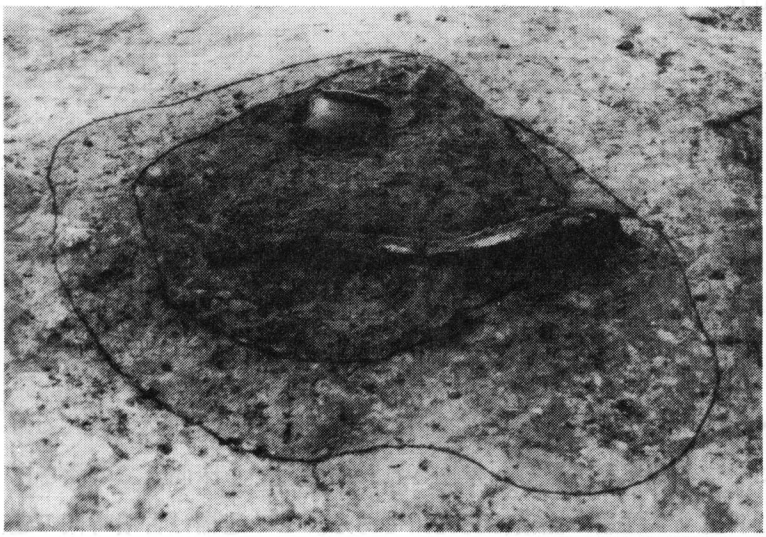
物跡・ＳＢ－02の柱穴によって数か所掘削されてはいるものの遺存状況は極めて良好であり、北側半分では壁に添って平行に延びる幅70cm前後・床面との比高差10～12cmのベッド状遺構が確認できた。また、西側から南西部分にかけても壁に添った、床面との比高差８～12cmの不定形なベッド状遺構状の段が認められた。ベッド状遺構は住居の北端角から対角線上に外に向って突出し、遺構上面も外に向ってゆるやかに傾斜しており、これが入口を示す遺構である可能性が考えられる。

ＳＴ－26の埋土は土器片を小量含む黒褐色土であり、層序は認められなかった。ベッド状遺構から内側の平坦な床面上で検出されたピットのうち、ＳＰ－01～07の７個がこの住居の柱穴と考えられるが、そのうちＳＰ－01～06は床面周囲に、それぞれ六角形の各隅のところに１個づつ、六角形に配置されている。また、床面中央から少し東に寄った、７本の柱の



第109図

ＳＴ－26（北から）



第110図

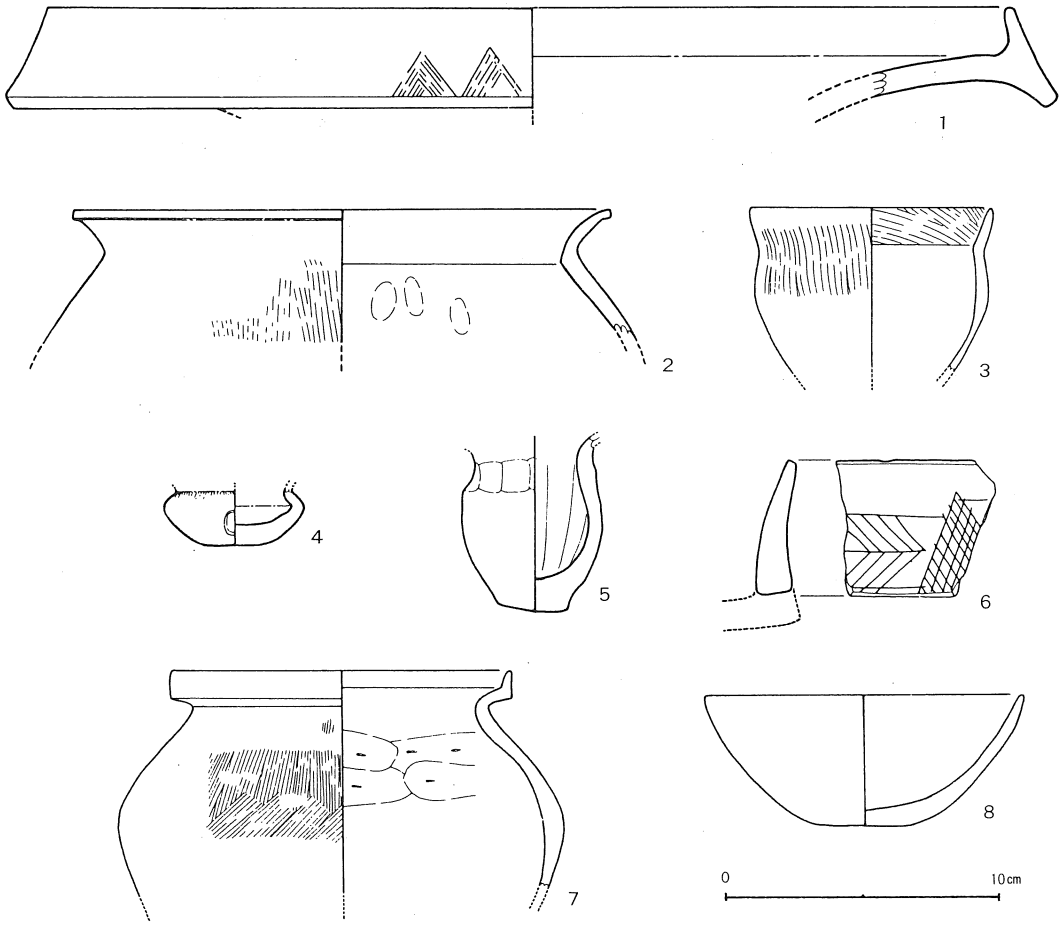
ＳＴ－26床面中央の土坑

（検出状況）

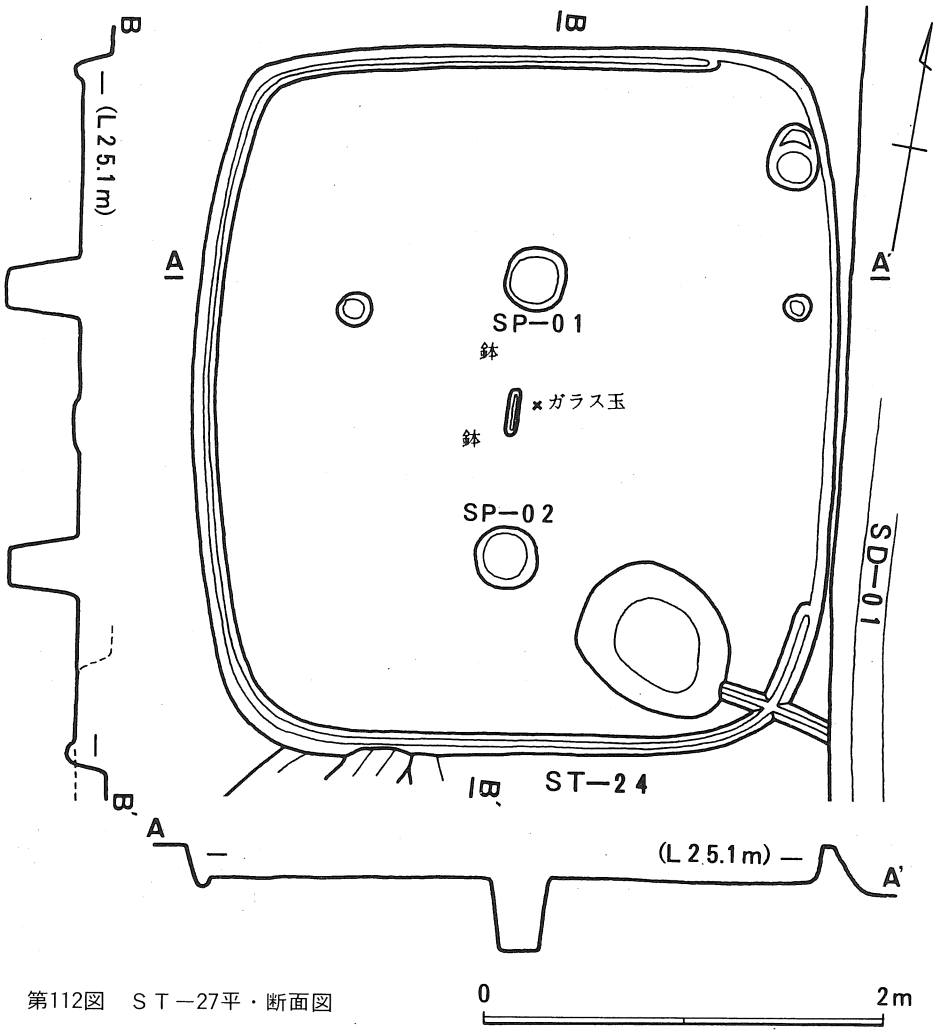
間隔が一番大きいところでは86×68cm・深さ７cm程の浅い土坑が検出された。この土坑の埋土は炭化した木の小さな破片を多量に含む黒褐色土であり、中からは甕の破片・長さ70cmの炭化した木材が出土している。この土坑の周囲は135×100cmにわたって焦土となっていたが、検出された状況からこれが住居に伴う炉であるか否かは明確にできなかった。

埋土から出土した遺物については獣骨片１点の他、弥生土器の小片ばかりであったが、遺構の南西部のベッド状遺構状の段の下の床面上からガラス玉１点・碧玉製管玉１点、そしてＳＰ－02東側の床面直上からは、黒色を呈する作りの粗い手づくねの小さな甕形土器が出土している。

ＳＴ－26は遺構の南西部で、弥生時代後期後半頃の遺構と考えられるＳＴ－25を切っていることと併せて出土した遺物などを検討した結果、弥生時代終末期頃に機能し廃絶したと考えられる。



第111図　ＳＴ－26出土遺物実測図　（5　床面直上から出土　1～4・6～8　埋土下層から出土）



第112図　ＳＴ−27平・断面図

ＳＴ−27

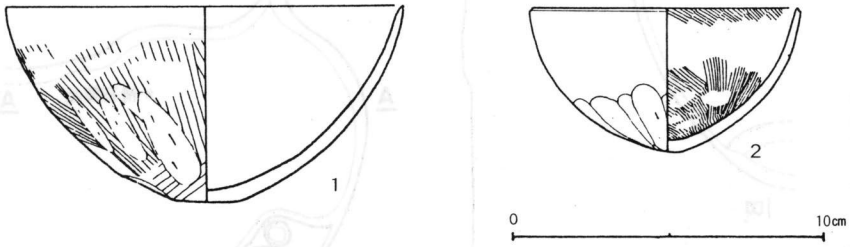
ＳＴ−27は長軸が3.55ｍ・短軸が3.25ｍの隅丸方形を呈する小形の竪穴住居で、主軸方位はＮ−10°−Ｗを向いており、検出された遺構面から床面までの深さは13cm・床面の平均レベルは25.00ｍ・住居の面積は10.5㎡である。この遺構の埋土は土器片を少量含む黒褐色土で層序は認められなかった。

床面では遺構の主軸線上でＳＰ−01・02の２個の柱穴を確認することができた。また、東壁添いを除いた床面周囲には幅10cm・深さ５cmのＵ字形の断面を呈する周溝がめぐらされており、遺構の南東隅においては85×70cm・深さ45cmの土坑が検出された。この土坑の埋土は黒褐色砂質土で、土器片等の遺物が全く出土しておらず性格は不明である。

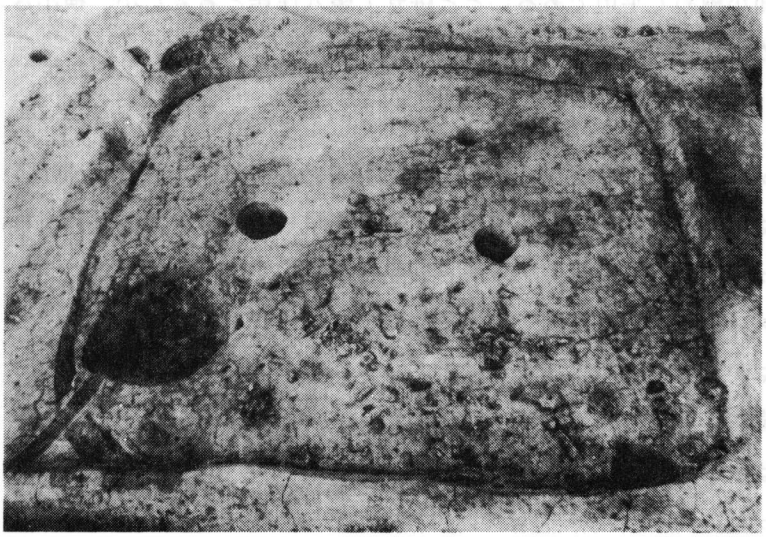
ＳＴ−27は南端部で、弥生時代後期末頃の遺構ではないかと考えられるＳＴ−24と切り合っているようではあったが、いずれの埋土もよく似ており、切り合っている部分の遺構の深さもほぼ等しく、その新旧関係を明確にすることはできなかった。また、埋土中から出土

した遺物については獣骨片２点の他、弥生土器の小片ばかりで点数も少なかったが、床面中央部において遺構面直上から小鉢２点とガラス玉が１点出土している。

ＳＴ－27は出土した遺物や調査結果を総合的に検討した結果、弥生時代終末期頃に機能し廃絶したものと考えられる。そしてＳＴ－24との関係については、より近接した時期のものと考えられるが、その新旧関係は不明である。

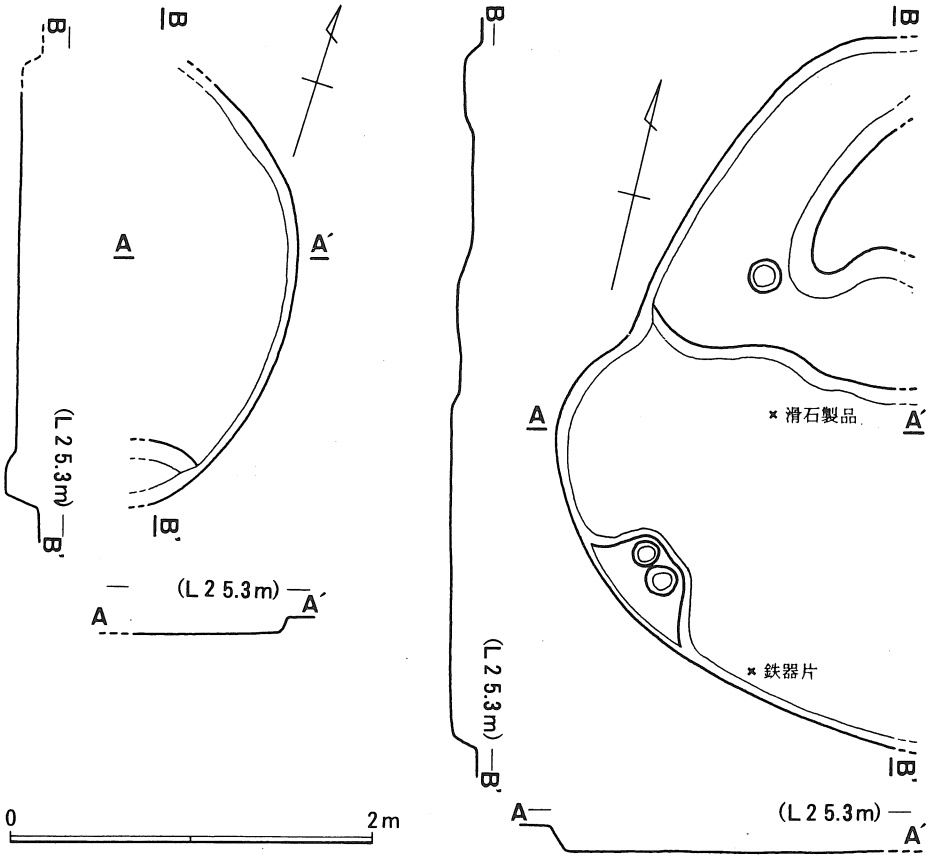


第113図　ＳＴ－27出土遺物実測図　（１・２　床面直上から出土）



第114図

ＳＴ－27（東から）



第115図　ＳＴ－28(左)・ＳＴ－29(右)平・断面図

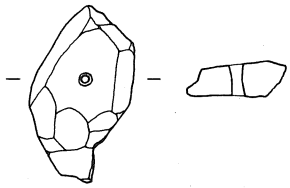
ＳＴ－28

ＳＴ－28はＣ－５グリッドの西端部で発掘区西壁添いに検出された落ち込みである。埋土は土器片をわずかに含む暗茶褐色土で、層序は認められなかった。当初は直径３ｍ程の円形の遺構を想定し、床面が極めて平坦であることと併せて竪穴住居と考えたが、検出された範囲内では柱穴も認められず決定に欠ける存在である。

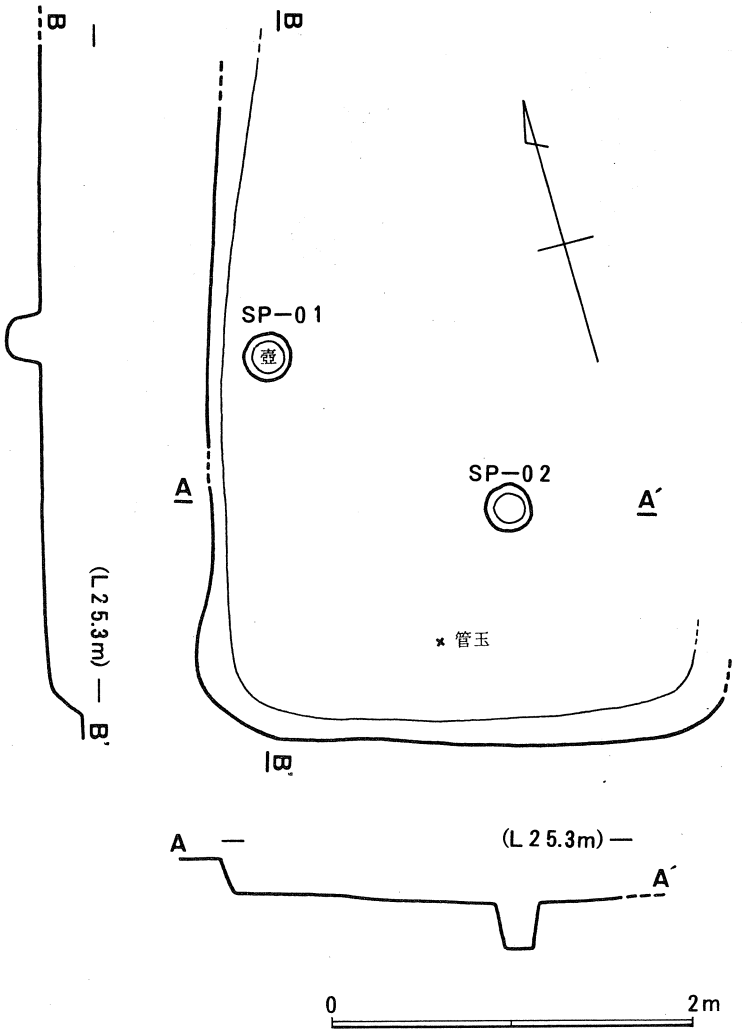
ＳＴ－29

ＳＴ－29はＥ－６グリッドで発掘区東壁添いに検出された落ち込みであり、埋土は土器片を少量含む黒褐色土で層序は認められなかった。遺構は不整形を呈しているが北側は15cm程の深さで床面は平坦になっており、その直上から滑石製品と鉄器片が出土している。

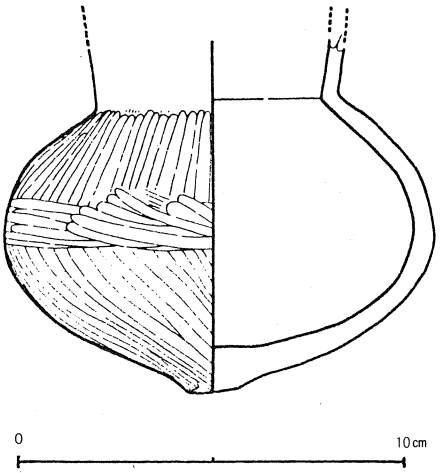
ＳＴ－29は竪穴住居と考えられるが、遺構内で検出された３個のピットは浅いものばかりで住居の主柱穴とは考えられず、遺物についても同様に、遺構の構成時期・性格などを究明するにはその内容は余りにも乏しかったため、それを立証するには至らなかった。



第116図　ＳＴ－29出土
滑石製品実測図



第117図　ＳＴ−30平・断面図



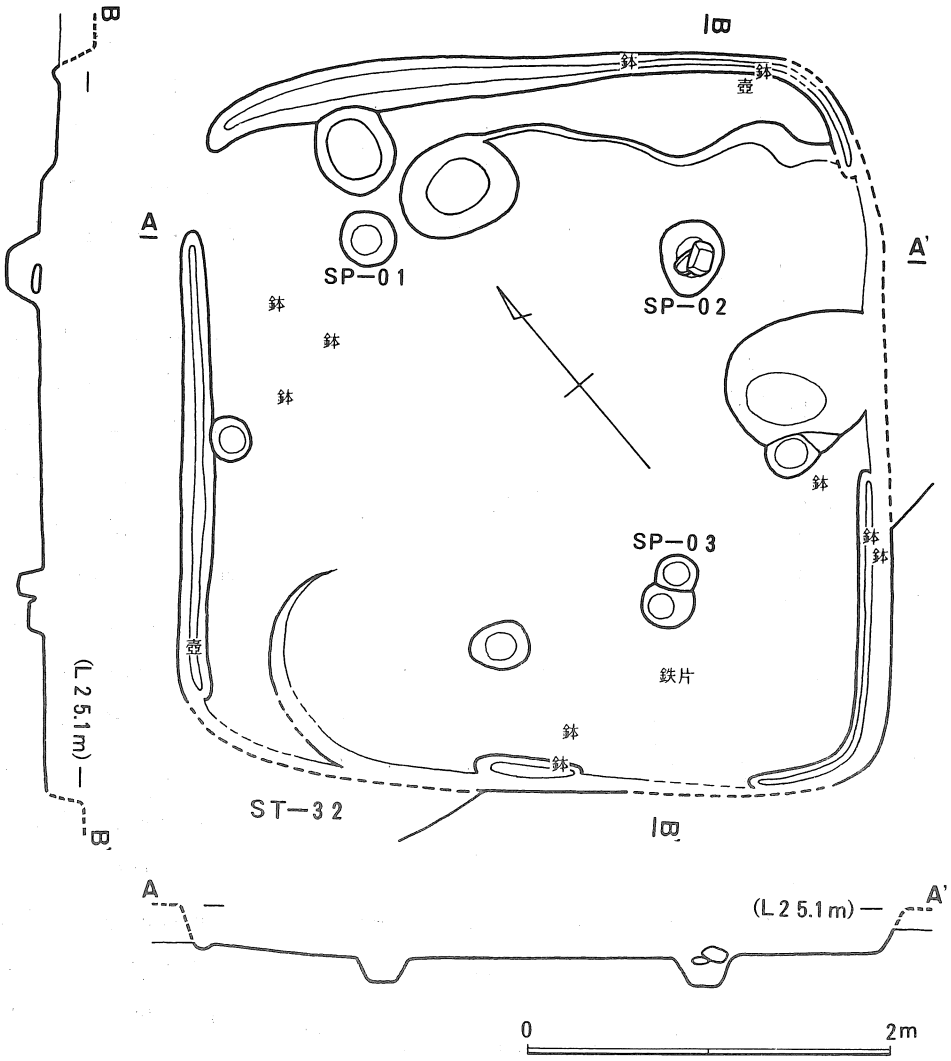
第118図　ＳＴ−30出土遺物実測図

ＳＴ−30

ＳＴ-30はＥ-6グリッドで発掘区東壁添いに検出された、やや歪んだ隅丸方形を呈する竪穴住居である。短軸は東西に約３ｍ・長軸方位はN-17°-Eを向いているが、遺構の半分程が調査区外にあるため、その数値については不明な点が多い。検出された範囲内での床面の深さは22cm・床面の平均レベルは25.00ｍであり、床面では柱穴と考えられるピットが２個検出された程度である。

遺構の埋土は多量の弥生土器片を含む黒褐色土で砥石も出土している。また層序は認められなかった。

床面直上からはＳＰ−01上で小形丸底壺・床面南端で碧玉製管玉が出土しただけであったが、埋土下層部分からは弥生時代後期末頃の、比較的残りの良い土器が多数出土しており、住居の形態や出土した遺物などを検討した結果、ＳＴ−38は弥生時代終末期頃に機能し廃絶したと考えられる。



第119図　ＳＴ−31平・断面図

Ｄ−６グリッドの北西部分を中心に大形の遺構が複数重なり合っている部分が認められ、ここに数棟の竪穴住居が複合して存在しているのではないかと考えられた。しかしながらこの部分の埋土は全て同一の黒褐色土であり、切り合い関係がつかめなかったため、数カ所に土層観察用の畔を残して掘り下げてみた。遺構の検出が完了した時点でも埋土質の差は全く認められなかったが、最終的にはＳＴ−31とＳＴ−32に区別でき、遺物の出土状況から判断してＳＴ−32の廃絶後にＳＴ−31が構成されたと考えられる。

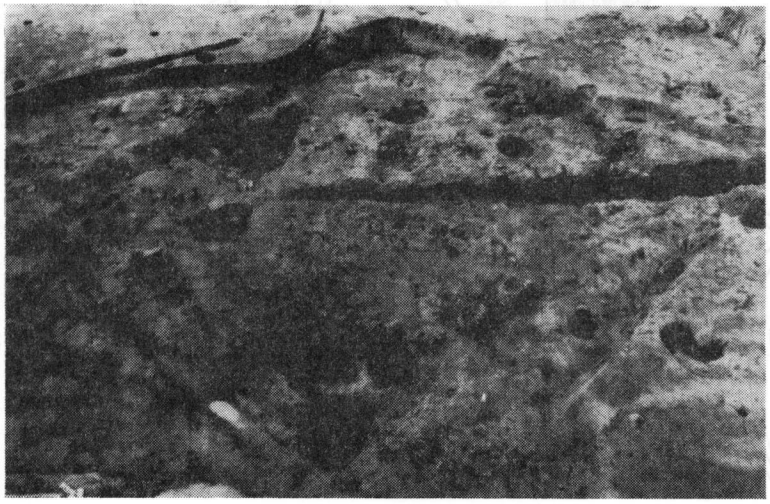
ＳＴ−31

ＳＴ−31は長軸が4.1m・短軸が3.9mの隅丸方形の竪穴住居で、主軸方位はＮ−40°−Ｅを向いており、検出された遺構面から床面までの深さは25cm・床面の平均レベルは24.85m・住居の面積は15.00㎡である。床面では、北西壁・北東壁と南隅壁の一部に添って幅10〜25cm・

深さ４㎝前後のＵ字形の断面を呈する周溝と、北東壁の一部に添って床面との比高差10㎝程のベッド状遺構状の不定形な段が認められた。また、床面で検出されたピット群については、その遺存状況からみてＳＰ－01～03の３個が相当すると考えられる。 南西隅の柱穴は現代の溝によって掘削され消滅している。床面において認められた他のピットや土坑などについてはＳＴ－32に伴うものである可能性もあり、詳細は明らかにできなかった。

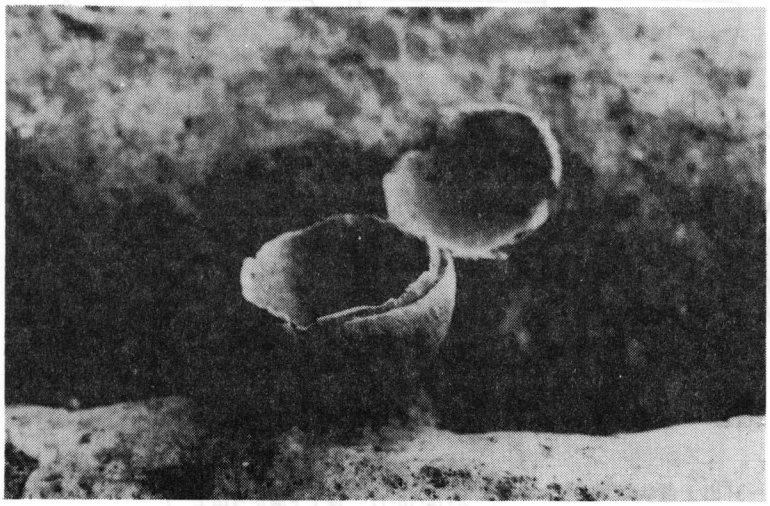
ＳＴ－31の黒褐色土の埋土中に含まれた土器片は周辺部（ＳＴ－32の埋土）に比べて多く、下層部分に集中しており、床面直上からも多数の土器がほとんど完形に近い状態で出土している。床面直上から出土した土器はいずれも口径が10㎝程度の小型の鉢・壺類で、大半が壁面に添った位置に置き去られたかのような状態で遺存していた。

出土した遺物群や住居形態などを検討した結果、ＳＴ－31は弥生時代終末期頃に機能し廃絶したと考えられる。



第120図

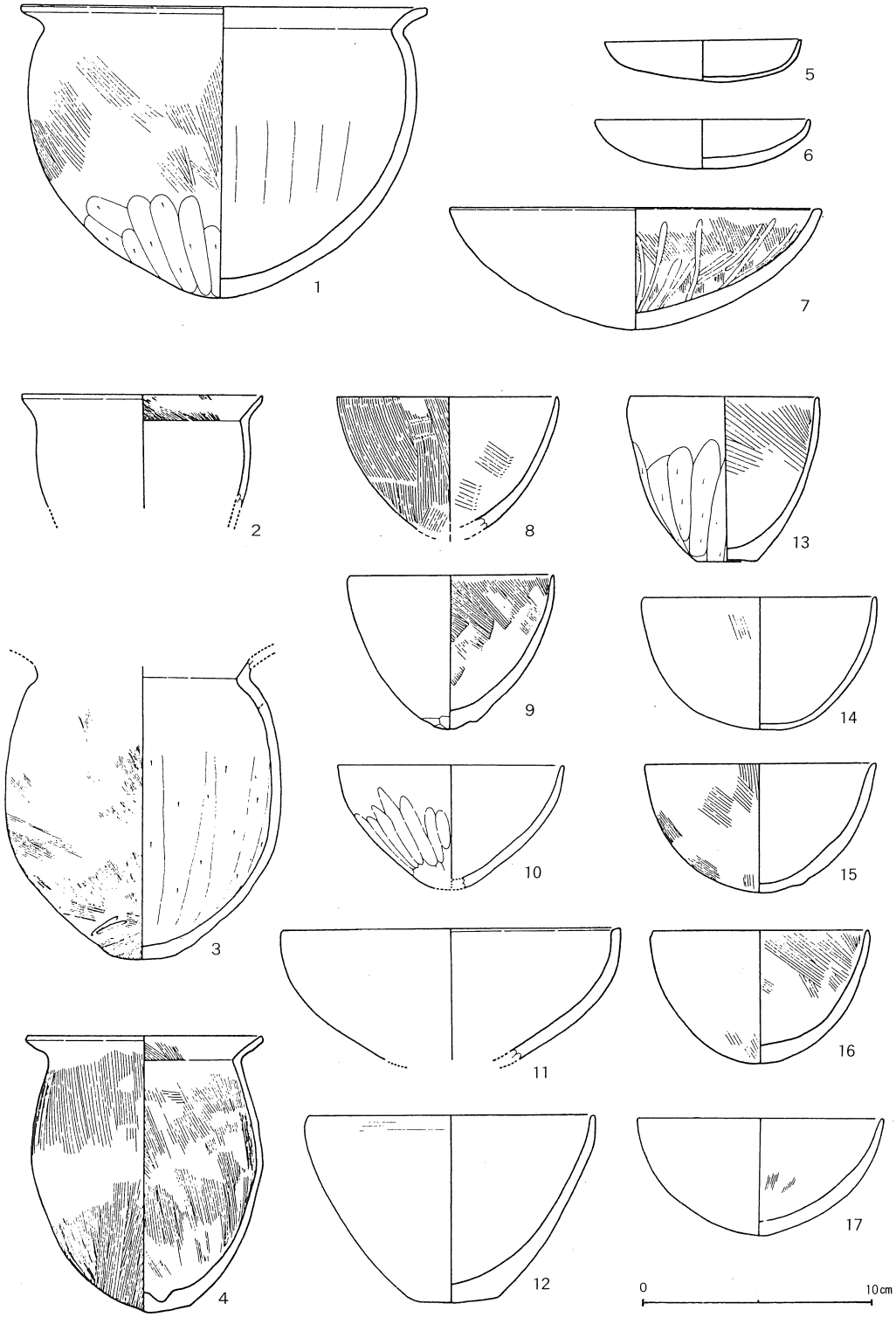
ＳＴ－31（北から）



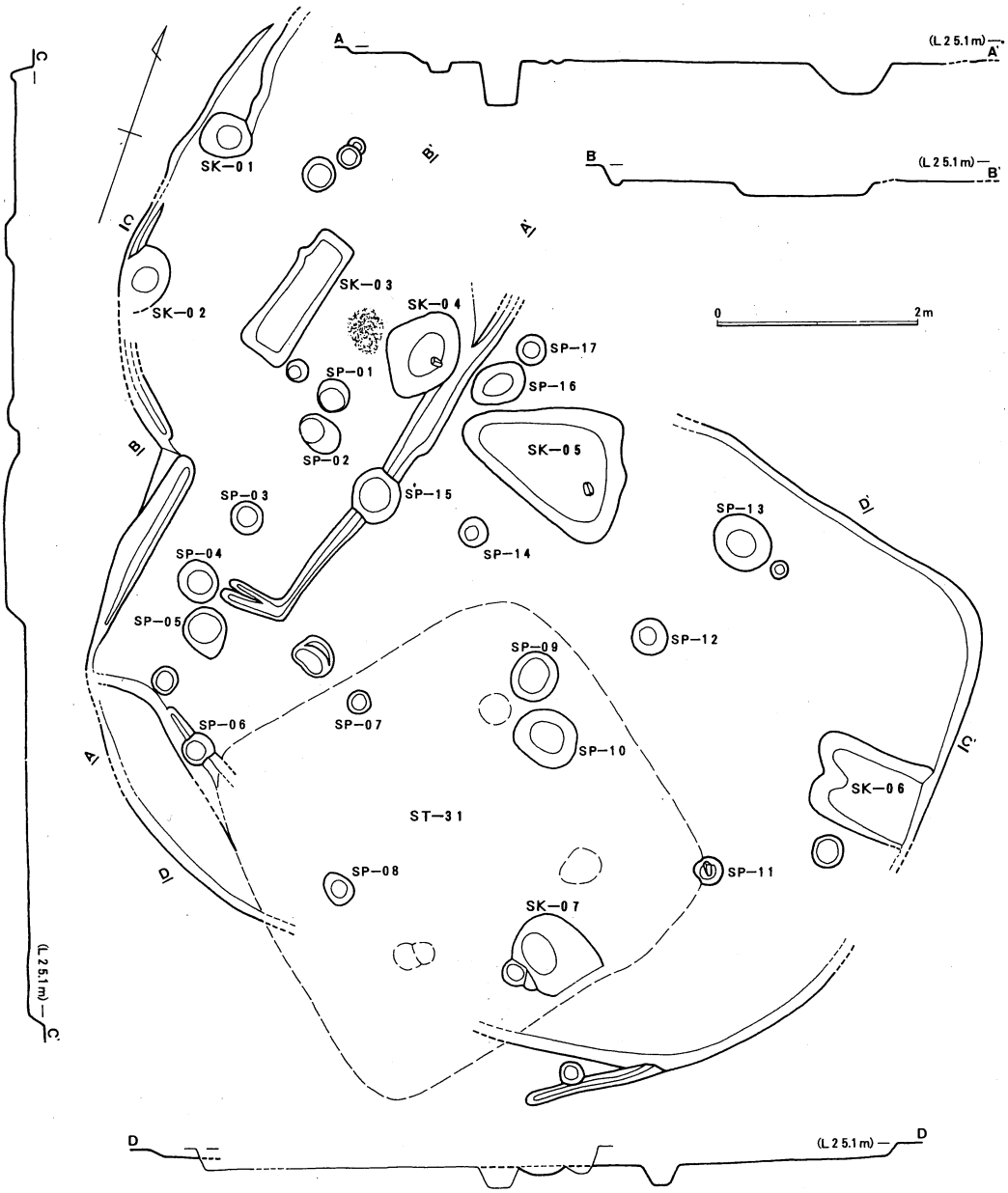
第121図

小鉢の出土状況

（ＳＴ－31南東壁面添い）



第122図　ＳＴ－31出土遺物実測図　（1・3～13・15　床面直上から出土　2・14・16・17　埋土下層から出土）



第123図　ＳＴ－32平・断面図

ＳＴ－32

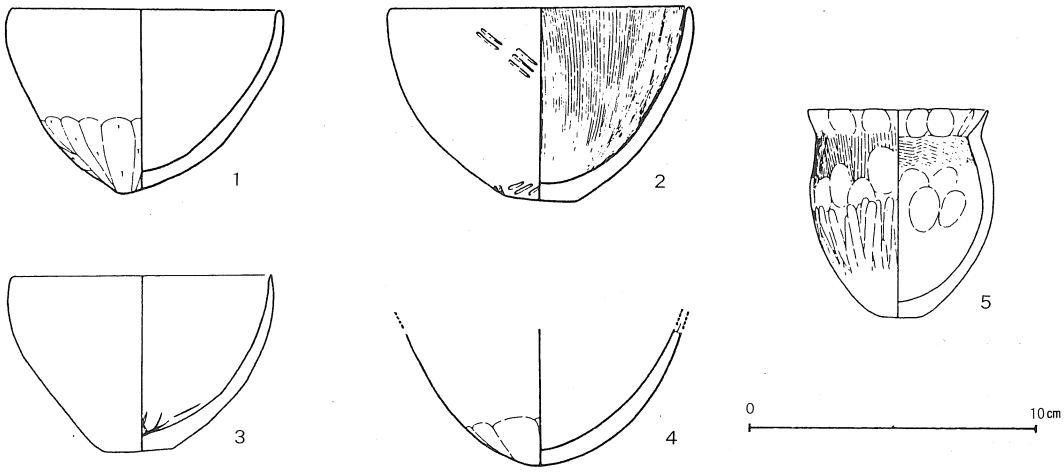
ＳＴ－32は複雑な形を呈しているが、これはその遺存状況からみて一つの遺構であり、床面が極めて平坦であることに加えて多数の柱穴が検出されたことから竪穴住居ではないかと考えられる。遺構は東西に約10ｍ・南北に約８ｍあり、床面は西端から約４ｍのところで南北（Ｎ－18°－Ｅ）方向に向く幅15～30cm・深さ７～10cmの溝によって東と西に画されている。検出された遺構面から住居床面の平坦部分までの深さは西側区画で25cm（平均レ

ベル24.85m）・東側区画で16cm（平均レベル24.94m）である。

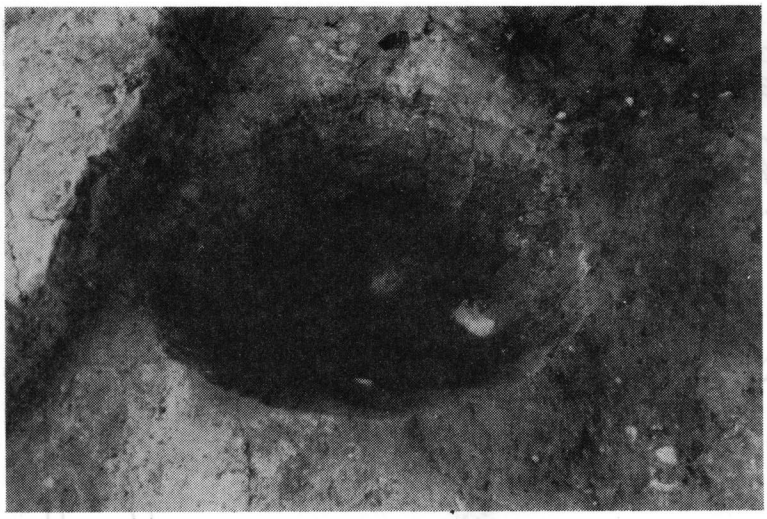
床面では柱穴の他にも多数の土坑が検出されている。まず西側区画の西壁添いで44×50cm・深さ28cmのＳＫ－01、ＳＫ－01から南に1.5m程のやはり西壁添いでは50×60cm・深さ32cmのＳＫ－02、西側区画の中央には45×142cm・深さ10cmの長方形の土坑ＳＫ－03（主軸方位Ｎ－18°－Ｅ）、西側区画の東端部分では72×93cm・深さ35cmのＳＫ－04が検出されている。埋土はＳＫ－03が炭化物を多く含んでいる以外は全て上部と同じ黒褐色土であり、ＳＫ－01の底部からは伏せた状態で１点・ＳＫ－02の底部からは入れ子の状態で２点の鉢が、ＳＫ－04の底部からは10cmの白色を呈する石英の円礫と８cm程の小さな手づくねの甕形土器が並んだ状態で出土している。またＳＫ－03とＳＫ－04の間には35×45cmの焦土が認められる。そして東側区画では北端部分で120×177cm・深さ20cmのＳＫ－05、東端部分では83×96cm・深さ18cmのＳＫ－06、また南端部分では70×75cm・深さ32cmのＳＫ－07が検出されているが埋土は全て黒褐色土であり、ＳＫ－07についてはＳＴ－31に伴う可能性も考えられる。いずれの土坑についてもその性格は明らかにはできなかった。

遺物については土坑から出土した土器類の他にも埋土下層部分からは比較的残りの良い小鉢などが数点出土しており、これらの遺物を中心に検討した結果ＳＴ－32は弥生時代終末期頃でＳＴ－31が構成される以前に機能し廃絶したと考えられる。

最後にＳＴ－32の柱穴群と推定されるピットについて、この構造の主軸方位が溝や長方形土坑の方位・Ｎ－18°－ＥにあるならばＳＰ－01～04の柱列はこれと平行し、ＳＰ－02・14・12はこれと直交する方位に等間隔に配列され、ＳＰ－07もこれに対応していると考えられる。



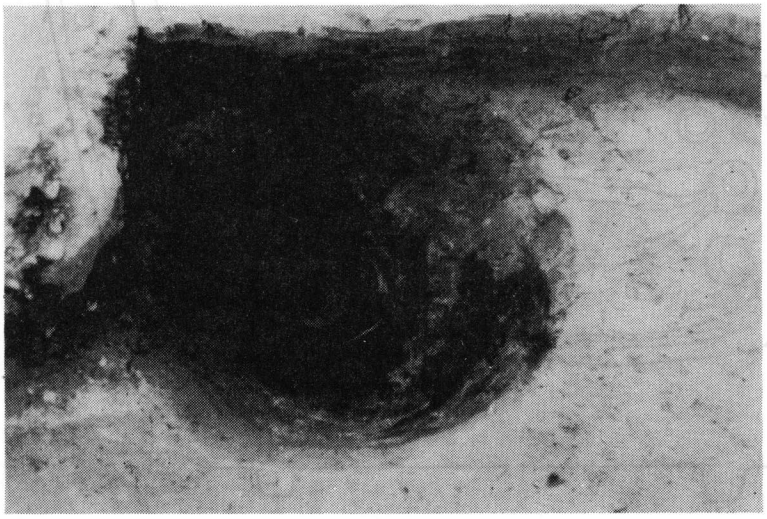
第124図　ＳＴ－32出土遺物実測図　（１・２　ＳＫ02から出土　３　ＳＫ－01から出土　４　埋土下層から出土　５　ＳＫ－04から出土）



第125図

ＳＴ－32・ＳＫ・01

遺物出土状況



第126図

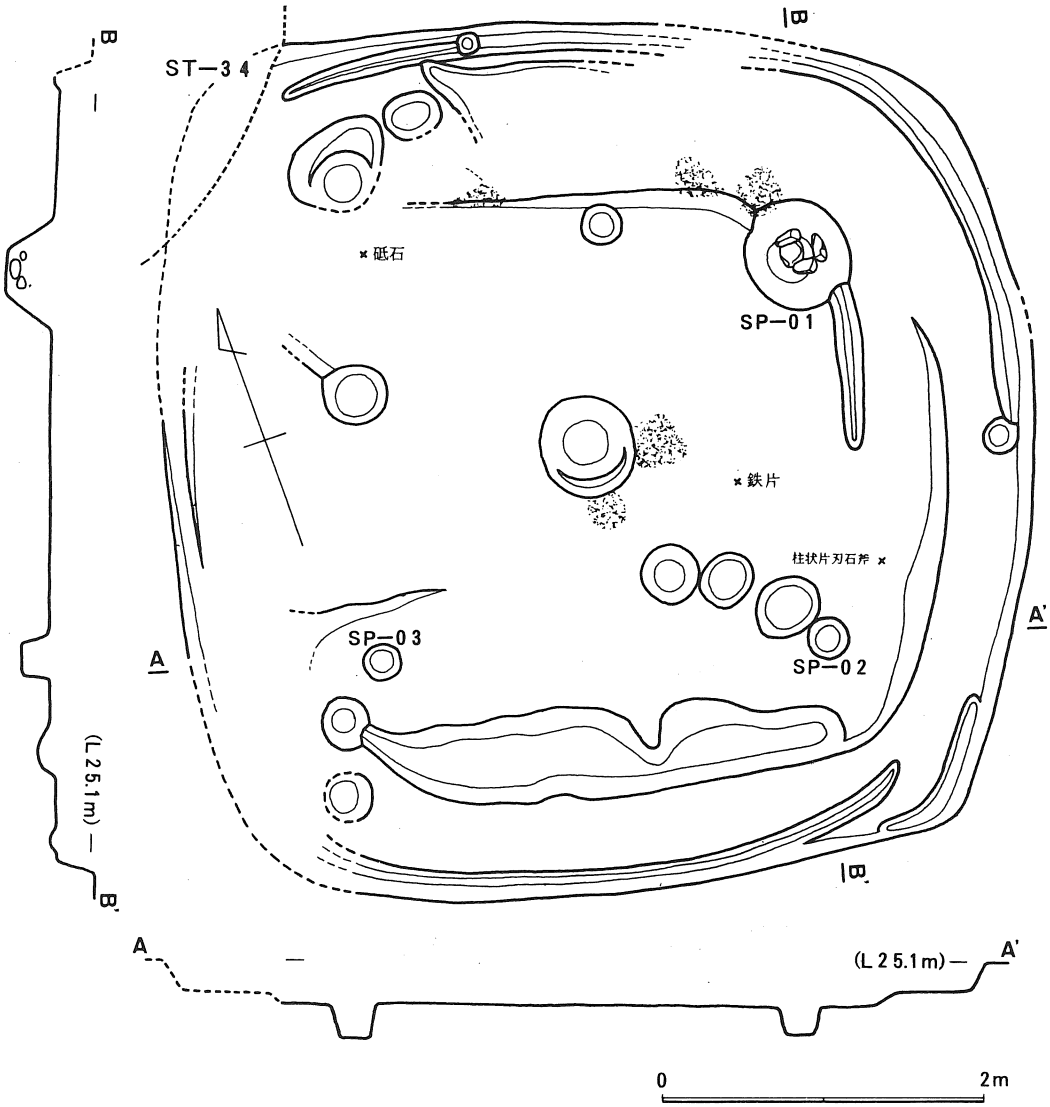
ＳＴ－32・ＳＫ－02

遺物出土状況

第127図

ＳＴ－32・ＳＫ－02遺物出土

遺物出土状況



第128図　ＳＴ−33平・断面図

ＳＴ−33

ＳＴ−33は長軸が5.43ｍ・短軸が5.40ｍの隅丸方形を呈する竪穴住居で、主軸方位はＮ−17°−Ｅを向いており、検出された遺構面から床面までの深さは27cm・床面の平均レベルは24.83ｍ・住居の面積は25.5㎡である。そしてこの遺構の埋土は土器片を多量に含む黒褐色土で、層序は認められなかった。

ＳＴ−33はその遺構の数カ所を現代の配水溝によって掘削されてはいたが、遺存状況は極めて良好であり、壁面に添って幅10〜20cm・深さ５〜10cm程の不規則にめぐらされたＵ字形の断面を呈する溝が検出された。その溝の内側ではやはり壁面に添って幅45〜90ｍ・床面との比高差10cm程のベッド状遺構が検出され、これより内側は平坦な床面になっ

ている。住居の床面では多数のピットが検出されているが、これらのピット群のうち、この住居の柱穴に相当すると考えられるものはＳＰ－01～03の３個であり、北西隅にあったと思われるもう１個の柱穴は現代の溝に掘削されてしまっており、その詳細は不明である。また、床面中央で検出された57×62cm・深さ45cmのピットについてはその埋土が他のピット群のものと同一であり、これが他の住居跡で認められた土坑と同じものか住居中央の柱穴であるのかは明らかにはできなかった。

ＳＴ－33の遺構面上では中央ピットのわき２カ所と北壁添いのベッド状遺構上３カ所に、直径20～30cm程の焦土となった部分が認められた他、床面北西隅で乳灰色を呈する凝灰岩製の砥石、床面南東部では鉄器片と片麻岩製の柱状片丸石斧が出土している。埋土中には弥生時代中期中頃から後期末頃までの土器片が含まれていたが、比較的残りの良いものは床面近くから出土しており、そのほとんどが終末期頃のものであった。ＳＴ－33は出土遺物

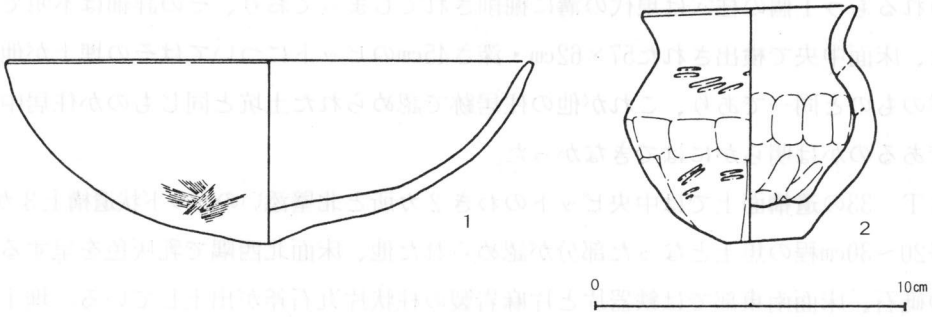
第129図

ＳＴ－33（東から）

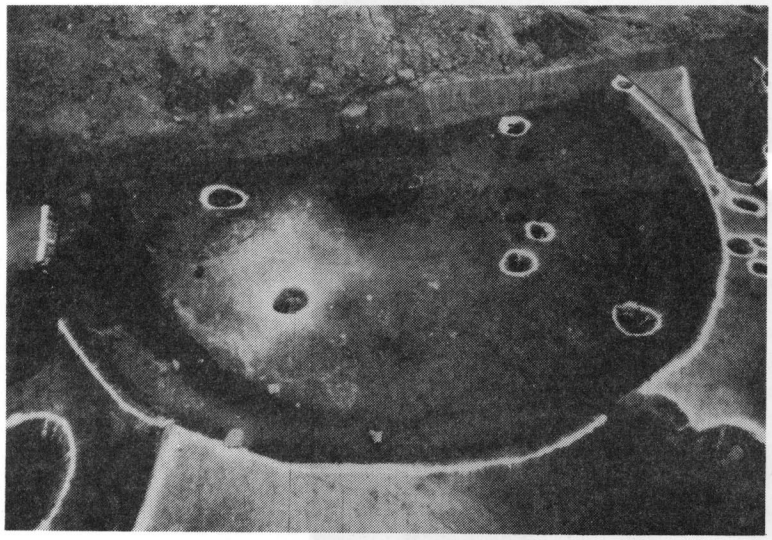
第130図

ＳＴ－33（北から）

や遺構の形態から考えて、弥生時代終末期頃に機能し廃絶したものと考えられる。

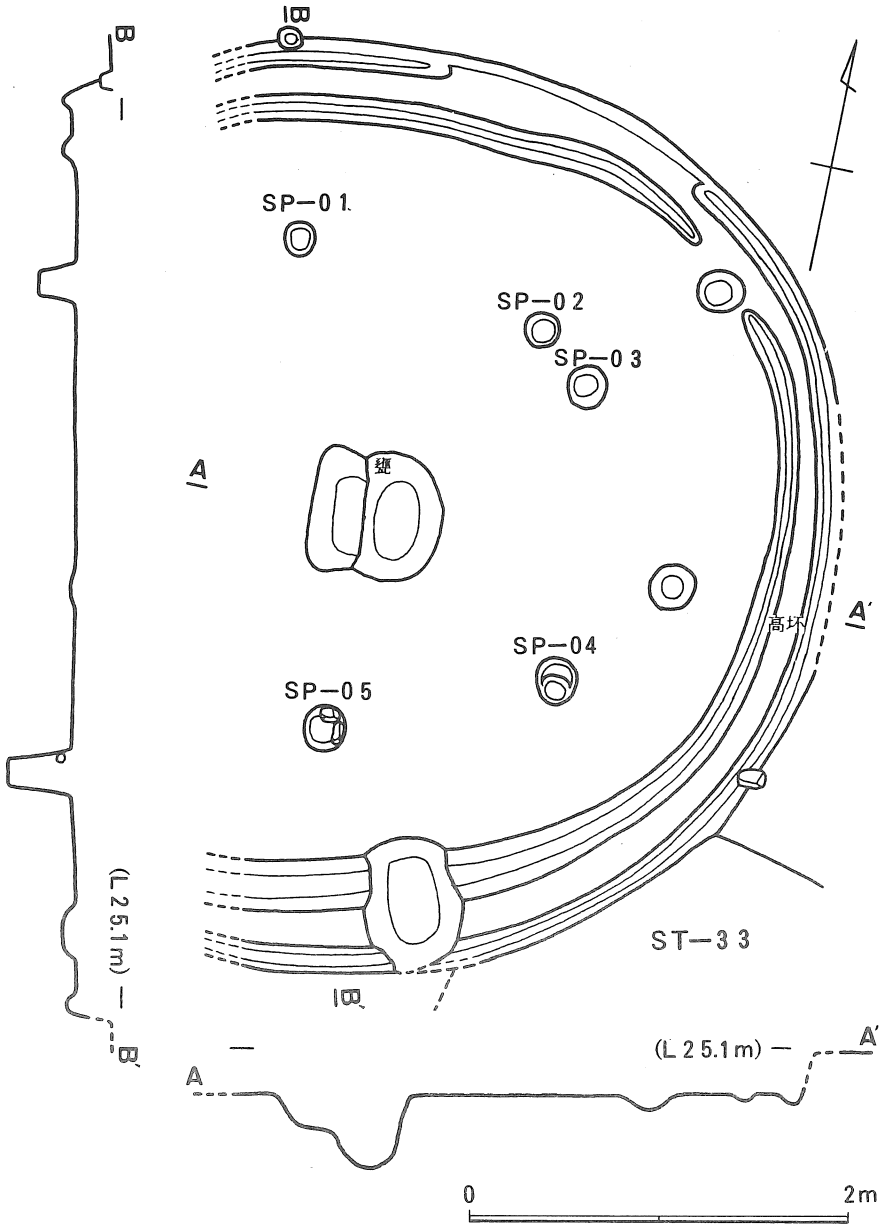


第131図　ＳＴ－33出土遺物実測図　（１・２ 埋土下層から出土）



第132図

ＳＴ－34（東から）



第133図　ＳＴ−34平・断面図

ＳＴ−34

ＳＴ−34はＢ−７グリッドの発掘区西壁添いで検出された円形を呈する竪穴住居で、直径はほぼ５ｍある。検出された遺構面から床面までの深さは23㎝・床面の平均レベルは24.85ｍ・住居の推定面積は約24.84㎡あり、この遺構は東端でＳＴ−33と重なっており、写真ではこの遺構の方が深いためにＳＴ−33を切っているようにみえるが、実際はＳＴ−34の廃絶後にＳＴ−33が構成されている。

住居の床面周囲には幅12〜27㎝・深さ５〜７㎝のＵ字形の断面を呈する周溝が、不規則に

二重にめぐらされている。周溝の内側には7個のピットが認められたが、遺存状況からみてＳＰ－01～05の5個がこの住居の柱穴と考えられる。これらの柱穴は遺構の直径2.6ｍの同心同上に配置されており、その中心には70×70㎝・深さ36㎝で西側に17㎝の段を持ち、炭化物がわずかに含まれる暗茶褐色土の埋土をもつ土坑が検出されている。また、遺構南端部の周溝上には淡褐色砂質土の埋土をもつ52×70㎝・深さ50㎝の土坑が認められたが、これはＳＴ－34以前の遺構であったらしく、ＳＴ－34検出後床面上に染み状に検出された。遺物は全く出土していない。

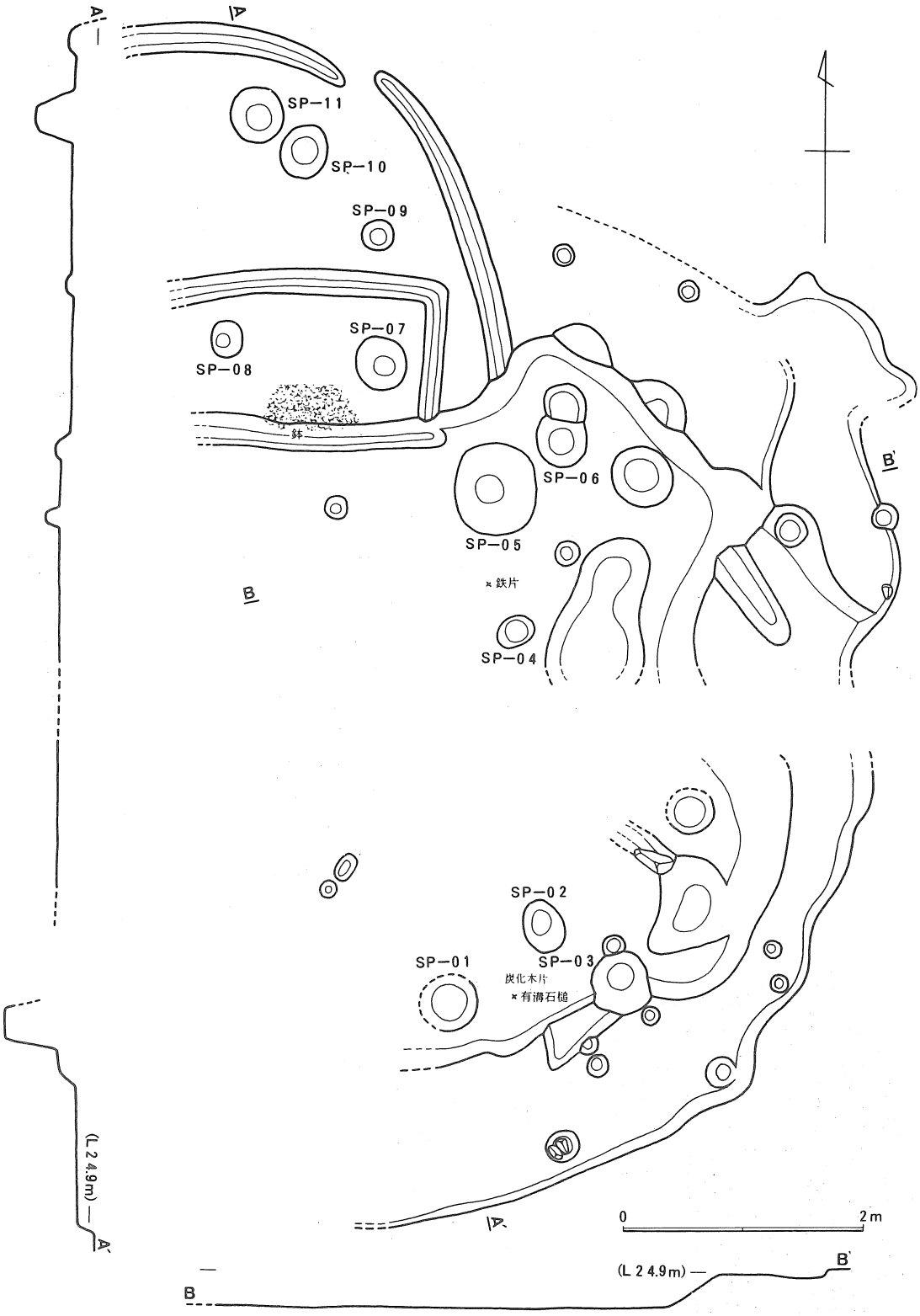
ＳＴ－34の埋土は茶褐色土で遺物は余り含まれておらず、層序も認められなかった。この遺構の出土遺物は床面上に散乱していた多量のサヌカイト片と埋土下層部分に含まれていた少量の土器片、そして床面中央の土坑埋土上部に含まれていた甕の一部分と床面東端の二本の周溝の間に認められた高坏の脚部のみであった。このように遺物は極めて少なく遺構の構成された時期について述べるには乏しいが、遺構直上から出土した甕や高坏の破片がこの遺構に伴うものであるとするならば、ＳＴ－34は弥生時代後期中葉頃に機能し廃絶したことが考えられる。

ＳＴ－35・36

ＳＴ－35・36はＢ－8からＢ－9グリッドにかけて発掘区西壁添いに検出された、南北に約10ｍの複雑な形を呈する遺構である。当初は2棟の竪穴住居が切り合っているものと考えられたためＳＴ－35（南側）・ＳＴ－36（北側）としたが、遺構が重なっていると考えられた部分の構造は両方が同時に存在していたことを示唆するような複雑な形を呈しており、造構の埋土についても両方の埋土質には差が全く認められなかったため、一棟の竪穴住居ではないかと考えた。

この遺構は確認された範囲内では当集落内の北端部に位置しているようで、これから北側は攪乱域でありすぐ弘田川旧河道の落ち込みに達する。しかしながらトレンチ探査で確認された旧河道部分は最下層でも近世陶器片が出土しており、弘田川によって遺構が浸食されてしまっている可能性も考えられる。また、集落内での位置関係及び遺構の構造・構成時期などについてはＳＴ－32と類似した点も多いようで、ＳＴ－32のすぐ北側からＳＴ－35・36の東側にかけて広がる小児壺棺墓域と関わる可能性も考えられる。

遺構は南側部分では直径9ｍ程のほぼ円形を呈しており、検出された範囲内では床面の深さが33㎝・平均レベル24.75ｍとなっている。床面ではその遺存状況から柱穴と考えられるＳＰ－01～06の6個のピットが検出され、ＳＰ－01と03の間では花崗岩の円礫を用いた有溝石槌と炭化した木片が出土しており、北半分の床面直上には薄く炭化物が堆積しているの



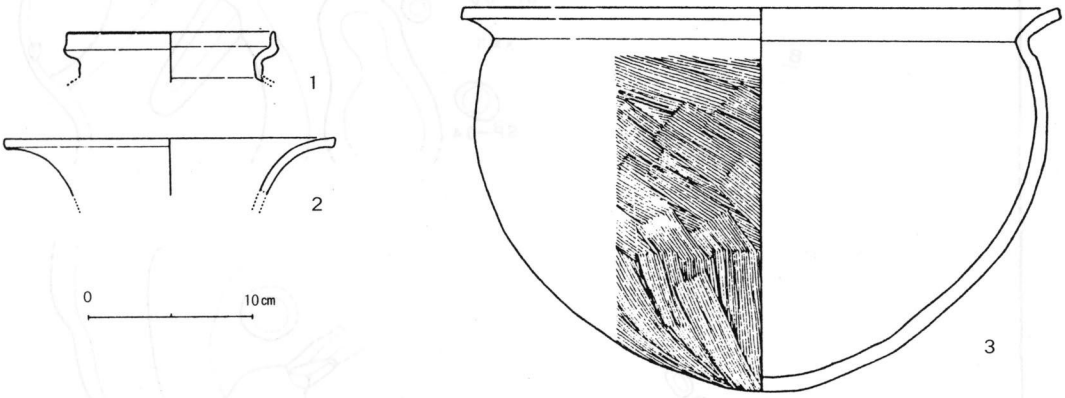
第134図　ＳＴ−35・36平・断面図

が認められた。遺構の埋土は黒褐色土であり層序は認められず、遺物も余り含まれてはいなかった。北側部分は南側部分床面との比高差10cm程で深さ23cm・平均レベル24.85mの平坦面で、幅20cm・深さ7cm程の小溝によって囲まれており、遺構の中央部分でも「く」の字形に曲がる同様の溝が認められた。この平坦面の南端には15×80cmにわたって焦土が認められ、ここではＳＴ－35・36の両方の遺構にかかるような状態で大型の鉢が出土しており、やはりこの遺構が一棟の住居であることが考えられた。この部分も埋土はやはり黒褐

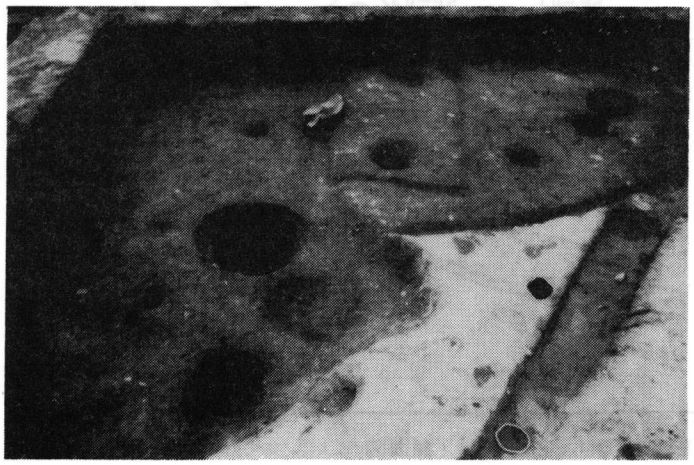
また、遺構東側の不定形部分では、ＳＴ－38が廃絶し埋没した後に作られたと考えられる小児壺棺墓２基（ＳＸ－14・15）が検出されている。

て不明な点が多い。

ＳＴ－35・36は一棟の竪穴住居であり、出土した遺物を中心に検討した結果、弥生時代終末期頃に機能し廃絶したものではないかと考えられる。

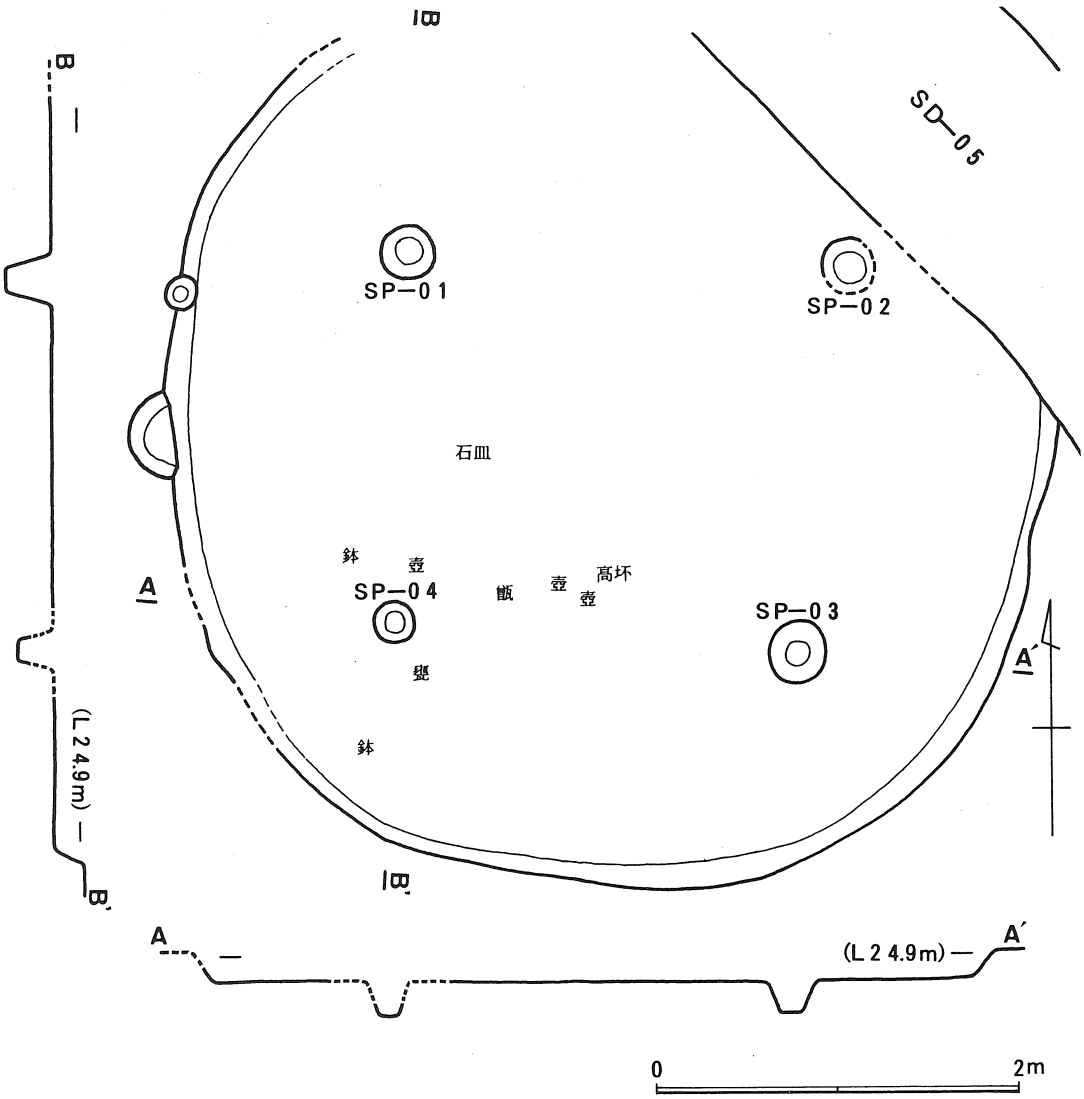


第135図　第136図　ＳＴ－35・36出土遺物実測図　（１・２　埋土下層から出土　３　床面直上から出土）



第136図

ＳＴ－35・36（東から）



第137図　ＳＴ－37出土遺物実測図

ＳＴ－37

ＳＴ－37は直径約５ｍの円形を呈する竪穴住居である。検出された遺構面から床面までの深さは17cm・床面の平均レベルは24.77ｍ・住居の面積は約21.00㎡で、遺構は北東隅を古墳時代後期の溝・ＳＤ－05によって切られていることと北端部を攪乱されてしまっていることを除けば、遺存状況は比較的良好である。そしてこの遺構も確認された範囲内では当集落の北端部に位置していたようであり、これから北側は大きな礫を多量に含む攪乱域（砂利層）を径て、すぐに弘田川旧河道の落ち込みに達する。Ｂ－11・12、Ｃ－11グリッドでは遺構は全くみられず、こぶし大程の河原石と伴に磨耗して丸味を帯びた土器片が多量に出土しており、この周辺が一時弘田川の河川敷であったことがうかがわれる。

また、ＳＴ－37の床面にはこぶし大程の河原石が敷き詰められたような状態で検出された

が、これは地山下の氾濫原が顔を出したものであり、この周囲でも遺構面上の随所に礫群が露出しているのが認められた。この住居の床面は平坦であり周溝等の構造は全く認められず、N－2°－Eに向く方形に配置されたＳＰ－01～04の4個の柱穴が検出されただけであった。

ＳＴ－37の埋土は小礫を多く含む黒褐色土であり、埋土の上層部に炭化した木片が目立ったため焼失家屋ではないかと考えられたが埋土下層部ではそれが全く認められず、床面南部では埋土下層部から床面直上にかけて、安山岩製の石皿と多数の土器が一括廃棄されたような状態で検出された。出土した土器には壺・甑・鉢・高坏等が認められたが、いずれも弥生時代終末期頃の西瀬戸内海系の形態を呈したもので、これまでに見られた土器群とは明らかに異質なものであった。

ＳＴ－37は弥生時代終末期頃に機能し廃絶したと考えられるが、当集落内で認められた同時期の他の竪穴住居が大型のものを除けば全て隅丸方形であるのに対して、この住居は円

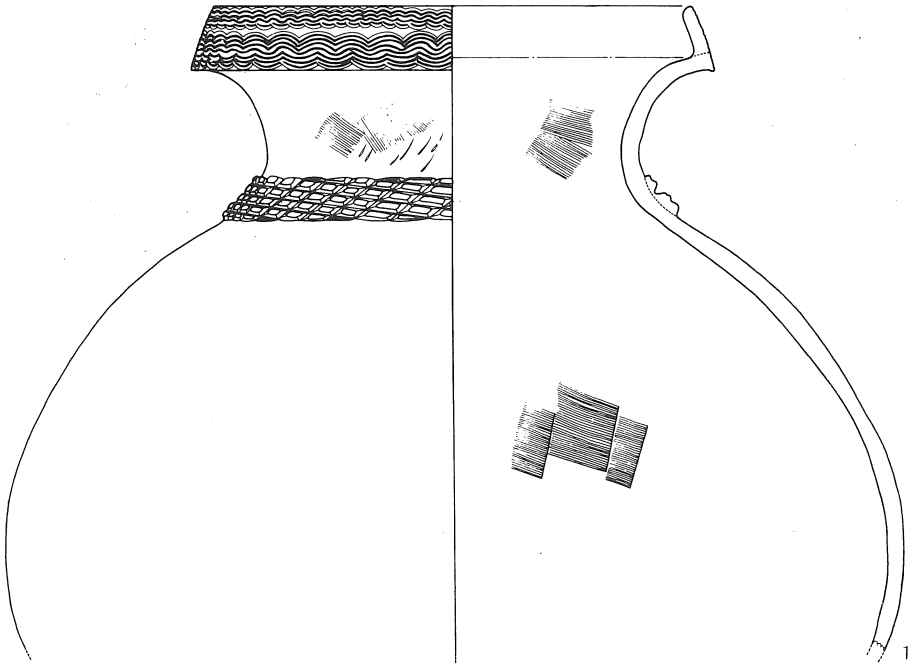
第138図

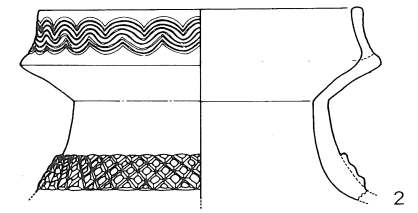
ＳＴ－37（西から）

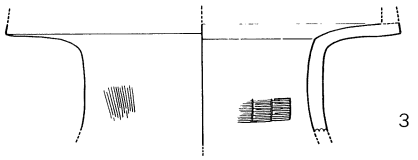
第139図

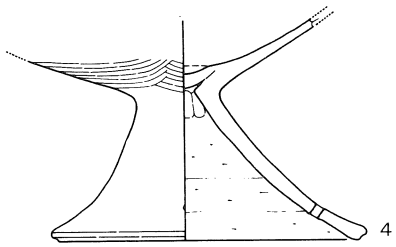
ＳＴ－37遺物出土状況

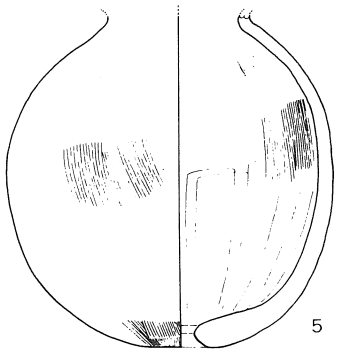
形を呈していること、同時期の住居では全く認められなかった形態の土器群が出土していることと、集落の最北端らしいところに立地している点を考え併せれば何か異質な印象を強く受ける住居跡である。

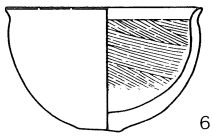








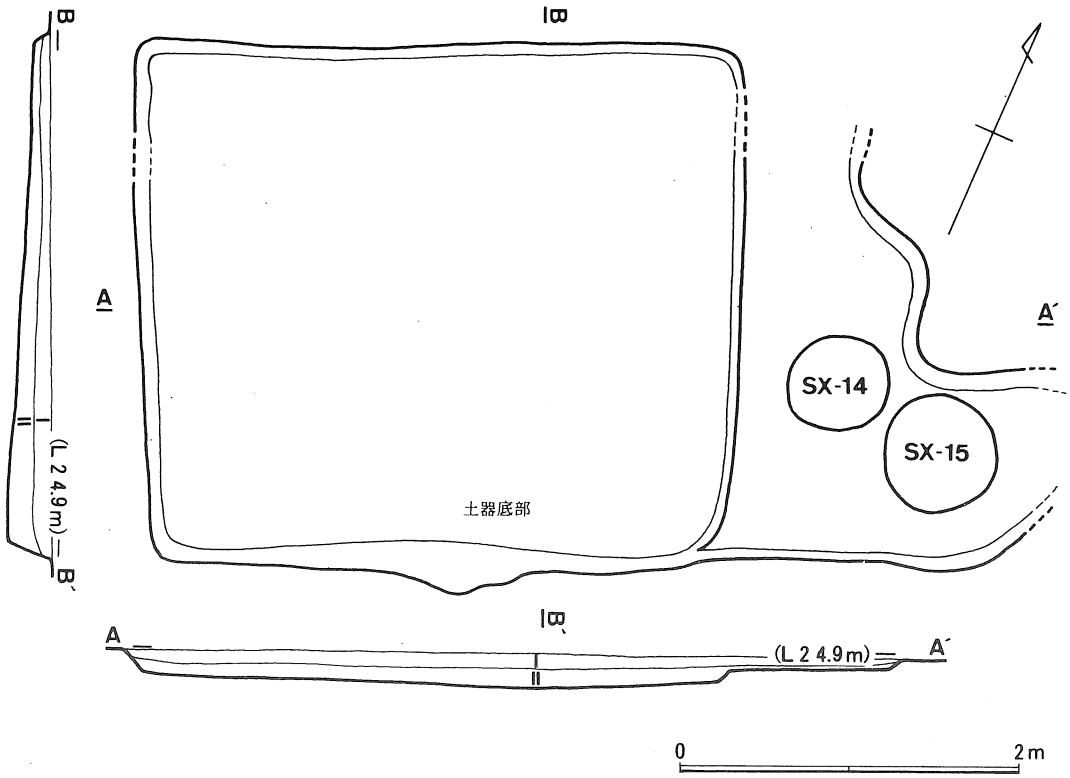




0　10cm

（1～8　床面直上の土器溜まりの遺物）

第140図　ＳＴ－37出土遺物実測図

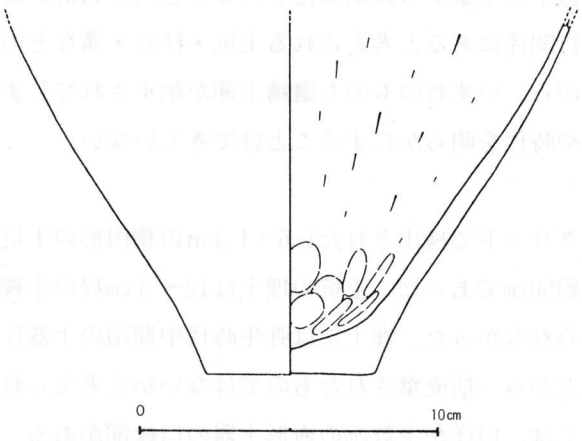


第141図　　ＳＴ－38平・断面図

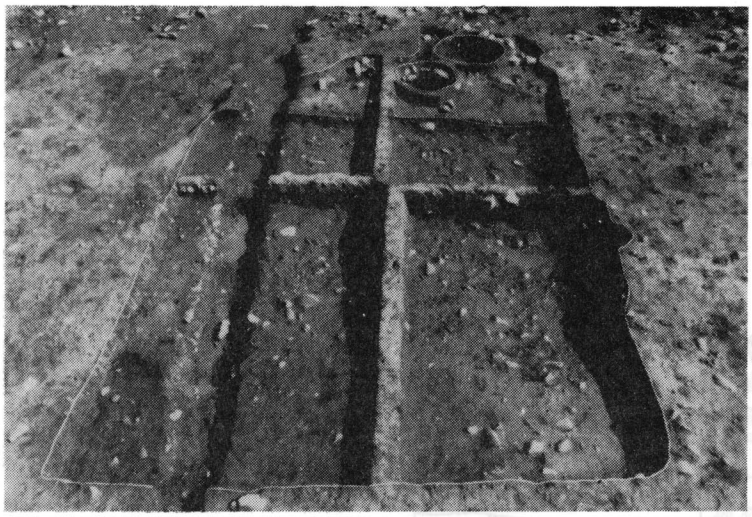
ＳＴ－38

ＳＴ－38はＣ－10グリッドの東端で検出された東西に約５ｍ・南北に3.2ｍ程の遺構で、東側は不定形であるが西側では長軸3.6ｍ・短軸3.1ｍの方形の落ち込みが確認できた。この方形の遺構の深さは平均18cm（一部26cm）・平均レベルは24.68ｍ・面積は10.85㎡で、東側部分との比高差は約10mc・主軸方位はＮ－24°－Ｗである。床面は北から南に向かってゆるやかに傾斜しており、南壁中央部分が局部的にくぼんでいる。遺構の埋土は、こぶし大の礫を少し含む黒褐色土で土器片等の遺物が全く認められないＩ層（上層）と暗灰色砂質土層のII層（下層）に分層できた。II層中からは、南壁中央部分のくぼみから甕の底部が出土しただけである。

ＳＴ－38は遺構の西側部分が均正の取れた方形を呈していることから、当初は竪穴住居ではないかと考えられたが、床面が傾斜していること・柱穴等が全く認められなかったことなど竪穴住居とするには無理な点が多く、遺構の性格及び時期等については明確にはできなかった。また、遺構東側の不定形部分では、ＳＴ－38が廃絶し埋没した後に作られたと考えられる小児壺棺墓２基（ＳＴ－14・15）が検出されている。



第142図　ＳＴ－38出土遺物実測図



第143図

ＳＴ－38（西から）

第144図

ＳＴ－38遺物出土状況

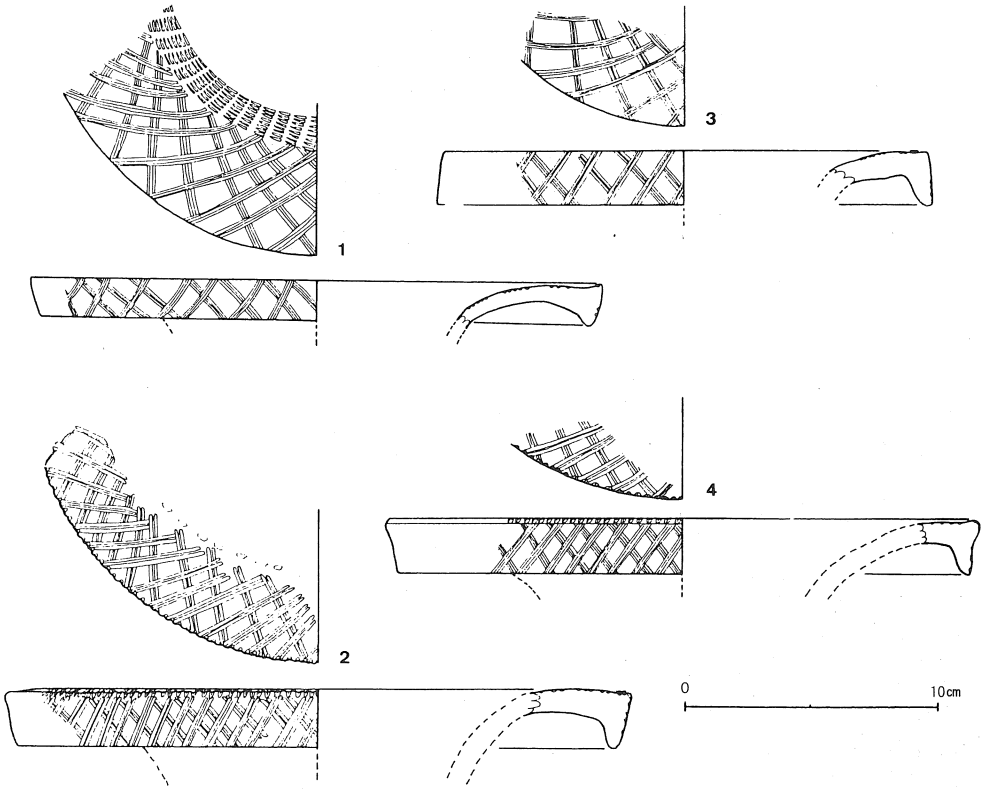
②土　坑　弥生時代中期中葉から後期末にかけての竪穴住居群が検出された調査区の南側では、それらと併行関係にあると考えられる土坑・柱穴・溝などの遺構が数多く検出されている。しかしながら、いずれのものも遺構上部が削平されてしまっており、ほとんどのものは、その性格や時代を明らかにすることはできていない。

ＳＫ－Ｉ

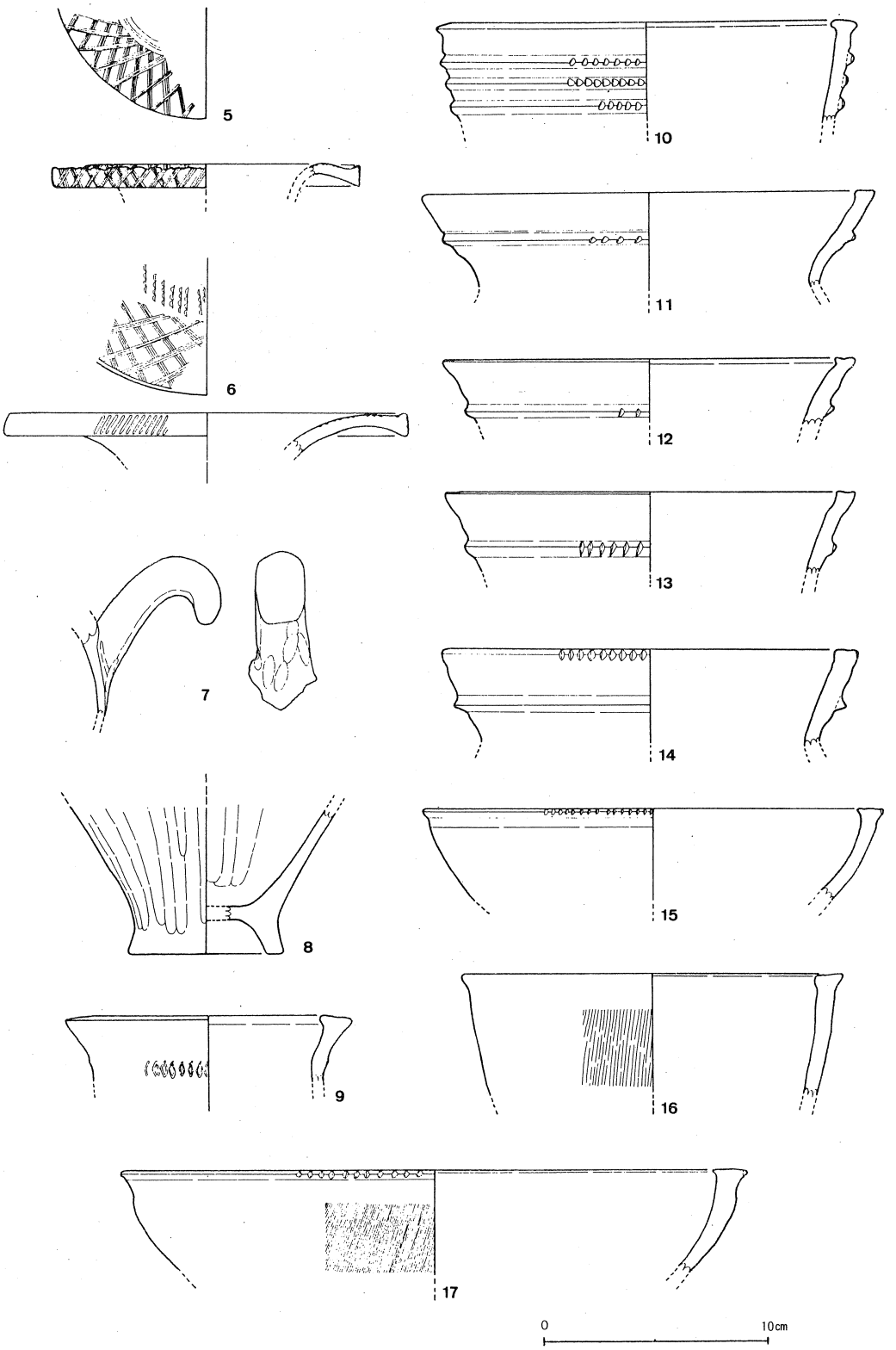
ＳＫ－ＩはＤ－１グリッドで検出された1.6×1.1ｍの楕円形の土坑で、断面は擂鉢形を呈しており、深さは約50㎝であった。土坑の埋土は12～３㎝程の小礫を多く含む茶褐色砂質土で、層序は認められなかった。埋土には弥生時代中期頃の土器片が多量に含まれており、その出土状況などから一括廃棄されたものではないかと考えられた。

特徴的なものとしては、口径が十数㎝の壺形土器の口縁部がある。これは口縁下に三角形の断面を呈する凸帯を１～２本めぐらし、その上に刻目文が施されているもので、他にも大きさは一定しないが、口縁部が上下に肥厚し、内面と端面に格子文・刺突文などが施された壺形土器などもある。

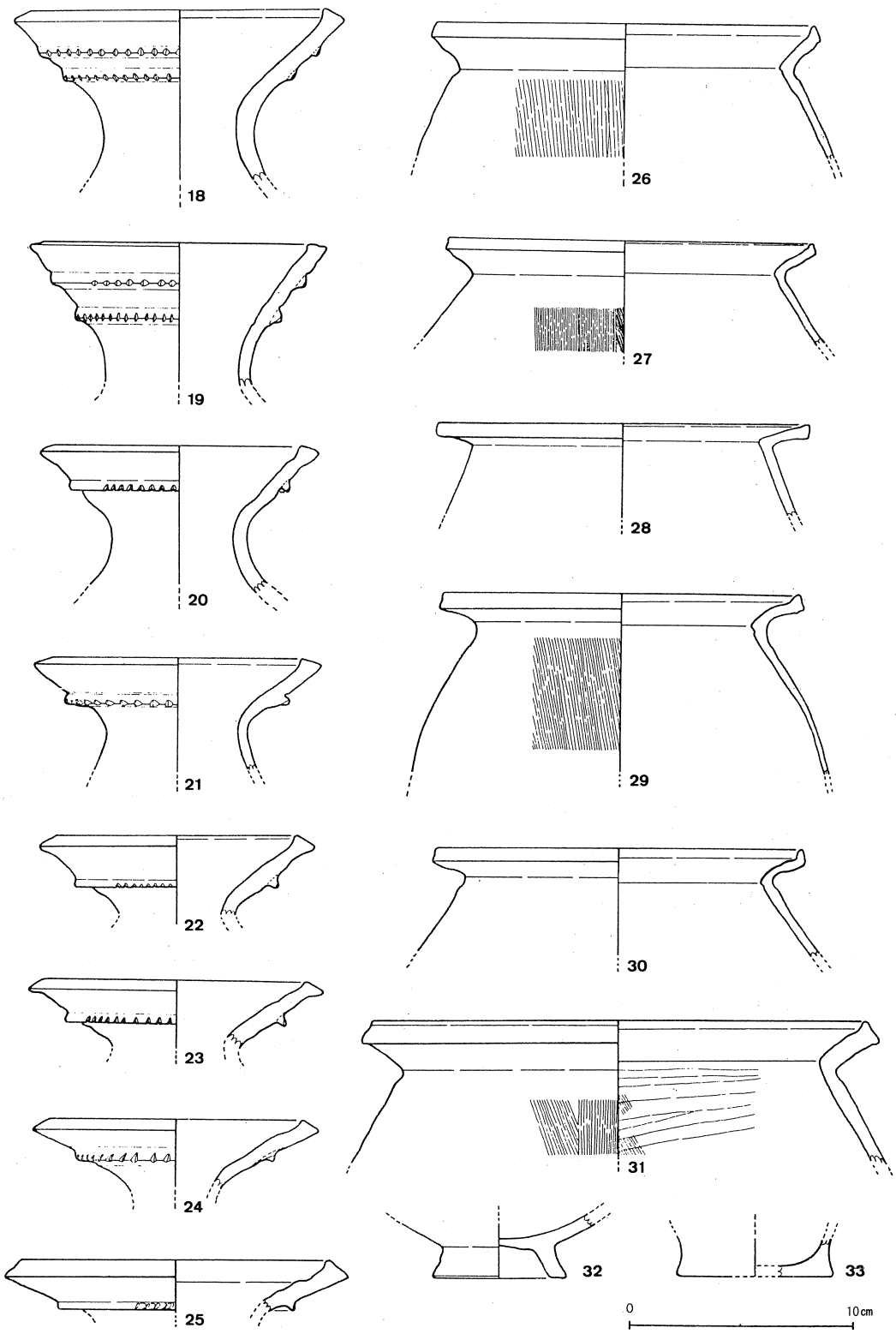
ＳＫ－Ｉ出土の土器には凹線文の手法を持つものが全く認められず、この遺構は弥生時代中期中葉前半頃の所産であると考えられる。



第145図　ＳＫ－Ｉ出土遺物実測図



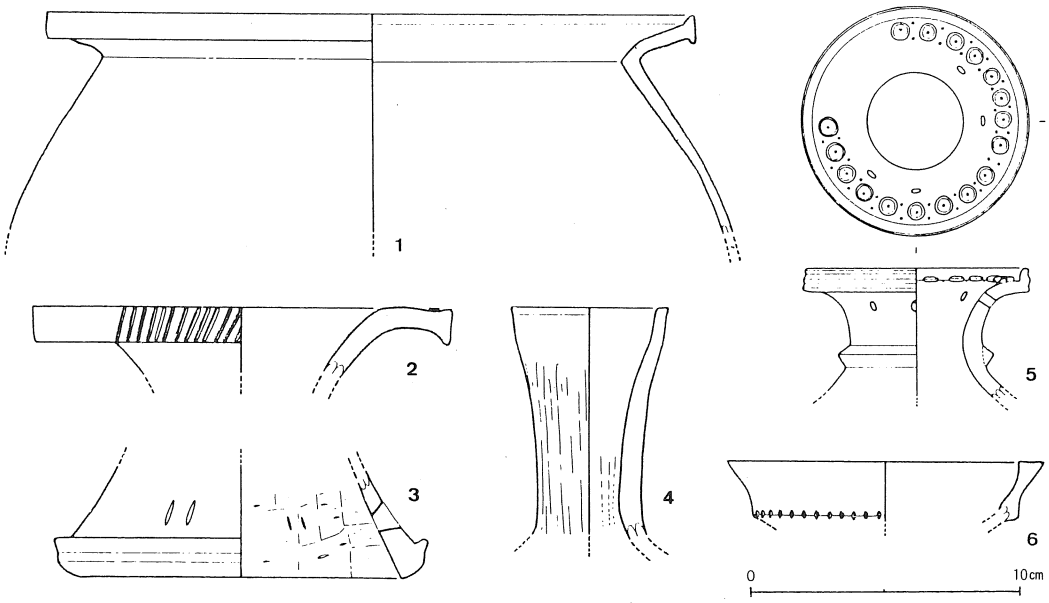
第146図　ＳＫ－Ｉ出土遺物実測図



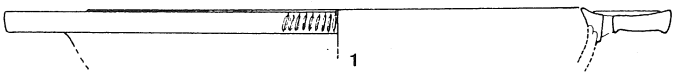
第147図　ＳＫ－Ｉ出土遺物実測図

ＳＫ－Ⅱ

ＳＫ－ⅡはＤ－２グリッドの中央で検出された1.8×1.6ｍの円形の土坑で、断面は半円形を呈しており、深さは28cmであった。土坑の埋土は12～３cmの小礫を多く含む茶褐色砂質土で、層序は認められず、埋土中からは分銅形土製品の破片一点と数点の弥生土器片が出土している。遺物の出土量は少なかったが、その特徴などから、ＳＫ－Ⅱは弥生時代中期中葉頃の所産であると考えられる。

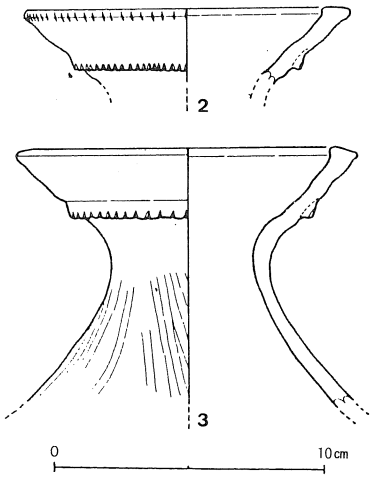


第148図　ＳＫ－Ⅱ出土遺物実測図



ＳＫ－Ⅲ

ＳＫ－ⅢはＤ－１からＥ－１グリッドにかけて検出された、東西に3.7ｍ・南北に1.1ｍの歪な形を呈する土坑で、深さは中央部分で約20cm程であった。土坑の埋土は２～３cmの小礫を多く含む茶褐色砂質土で、層序は認められず、遺構の東端部で最下部から数点の弥生土器片が出土しているが、その形態はＳＫ－Ⅰ出土の土器片と同様の特徴を呈しており、ＳＫ－Ⅲは弥生時代中期中葉前半頃の所産であると考えられる。



第149図　ＳＫ－Ⅲ出土遺物実測図

ＳＫ－Ⅳ

ＳＫ－ⅣはＥ－１グリッドのほぼ中央で検出された、幅50cm・深さ25cm程の南北に狭長な形を呈する土坑である。遺構は北東部を現代の建物の基礎工事の際に掘削されてしまってはり、詳細は不明であるが、暗茶褐色の埋土中には３～５cmの礫と多量の弥生土器片が含まれており、土器の廃棄坑ではないかと考えられる。

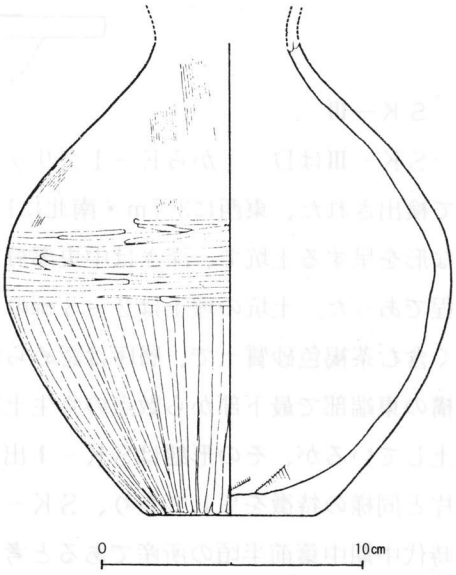
出土した土器片には弥生時代中期のものも認められたが、そのほとんどは後期後葉頃のものである。このことからＳＫ－Ⅳは弥生時代後期後葉頃の所産であると考えられる。

第150図
ＳＫ－Ⅳ検出状況
（西から）

ＳＫ－Ｖ

ＳＫ－ＶはＥ－２グリッドの南端において、ＳＴ－04と切り合った状態で検出された東西に1.5ｍ・南北に3.3ｍの土坑であり、遺構の北側は深さが２～３cmと浅く底部は平坦であるが、南端では深さ約30cmの擂鉢形の断面を呈する落ち込みとなっており、その最下部から壺形土器が一点出土している。遺構の埋土は茶褐色砂質土で層序は認められず、壺形土器の他には、わずかな弥生土器片が出土しているだけである。

ＳＫ－Ｖは弥生時代中期中葉前半頃の所産と考えられるＳＴ－04を切っていることや、出土した壺形土器の形態的特徴から、弥生時代中期中葉頃の所産ではないかと考えられる。

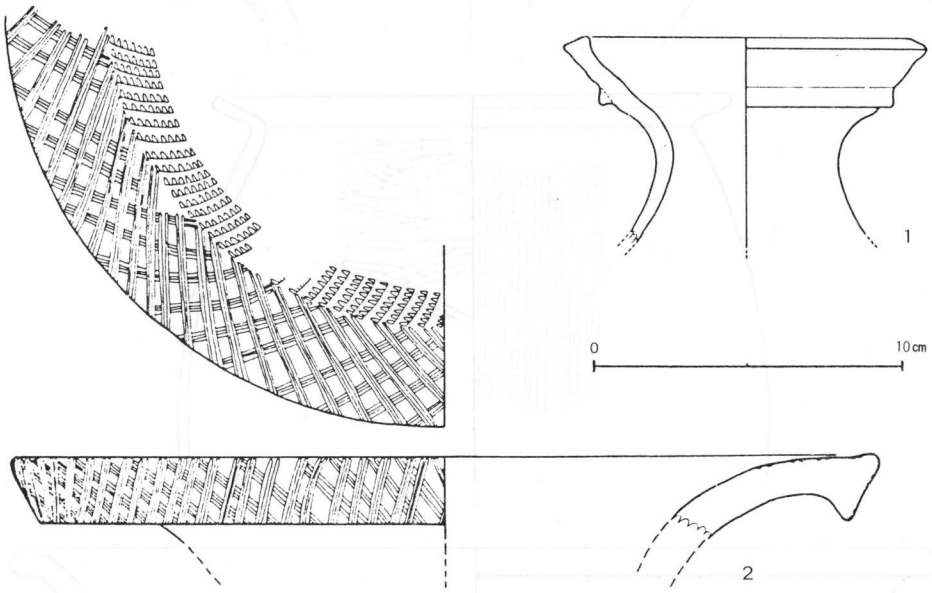


第151図　ＳＫ－Ｖ出土遺物実測図

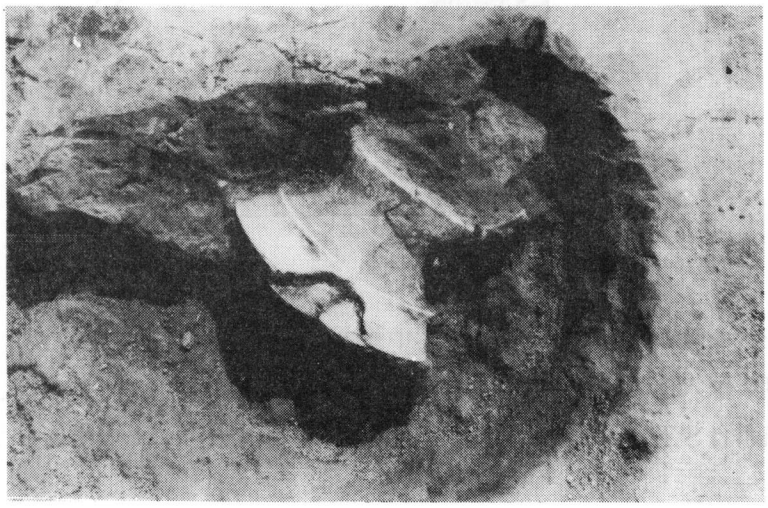
ＳＫ－Ⅵ

ＳＫ－ⅥはＥ－２グリッドのほぼ中央で検出された、東西に約２ｍ・南北に約1.8ｍ・深さ32cmのほぼ方形を呈する土坑である。遺構は、弥生時代中期中葉前半頃の竪穴住居と考えられるＳＴ－05の床面上で検出されているが、ＳＴ－05の遺存状況が悪く、その性格やＳＴ－05との関係を明確にすることはできていない。

ＳＫ－Ⅵの埋土は茶褐色砂質土で、層序は認められず、埋土中から弥生時代中期の土器片が出土しているが、これはＳＫ－Ⅰ・Ⅲ出土の土器と同様に凹線文の手法をみないものであり、その特徴から、ＳＫ－Ⅵは弥生時代中期中葉前半頃の所産であり、ＳＴ－05とほぼ同時期の遺構であると考えられる。



第152図　ＳＫ－Ⅵ出土遺物実測図

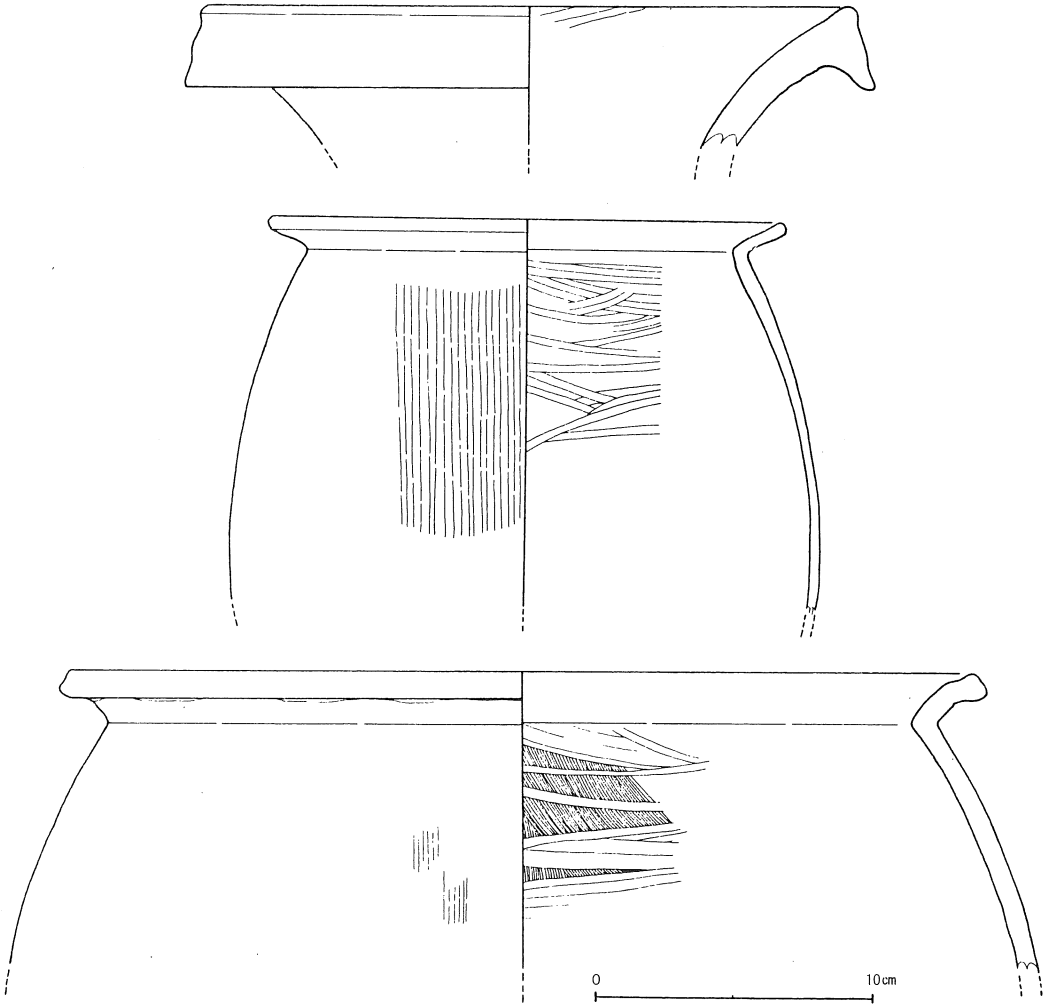


第153図

ＳＫ－Ⅵ遺物出土状況

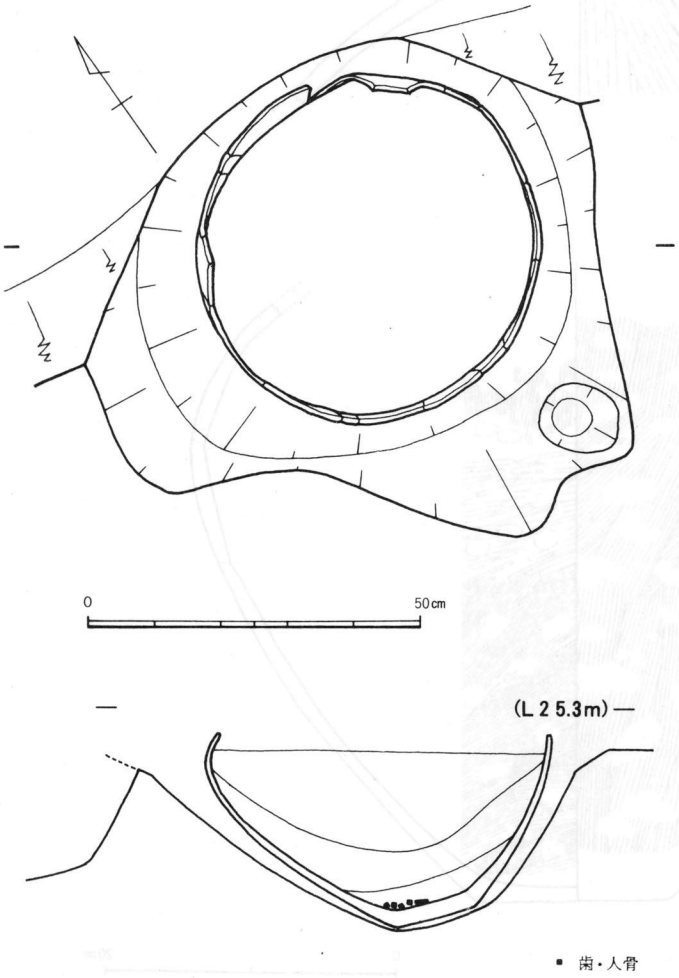
ＳＫ－Ⅶ

ＳＫ－ⅦはＥ－３からＥ－４グリッドにかけて検出された、東西に1.7ｍ・南北に1.2ｍ・深さ36cmの楕円形を呈する土坑である。埋土は２～３cmの小礫を多く含む茶褐色砂質土で、層序は認められなかった。遺構の底部からは弥生時代中期頃の土器片が出土しているが、口縁部に凹線文の手法はまだ認められず、その特徴から、ＳＫ－Ⅶは弥生時代中期中葉前半頃の所産であると考えられる。



第154図　ＳＫ－Ⅶ出土遺物実測図

ＳＫ－Ⅰ～Ⅶは、ＳＫ－Ⅳを除くと全て弥生時代中期中葉頃の遺構であり、いずれも調査区南端において、同時期の竪穴住居（ＳＴ－04・05・08）の周辺で検出されている。このことから、これらの土坑群はＳＴ－04・05・08に伴う何等かの施設ではないかと考えられる。



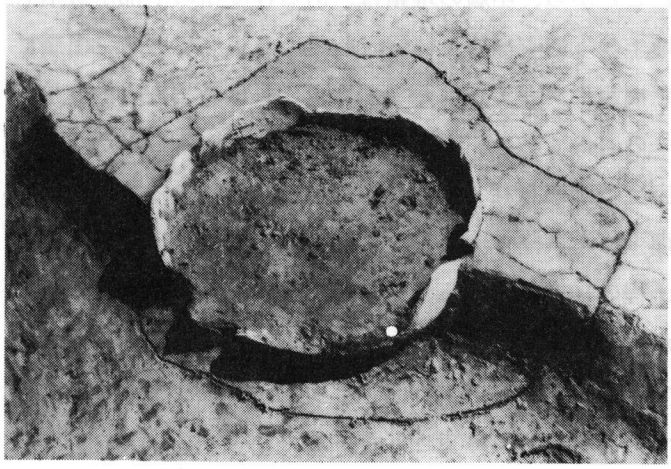
第155図　ＳＸ－01平・断面図

③小児壺棺墓

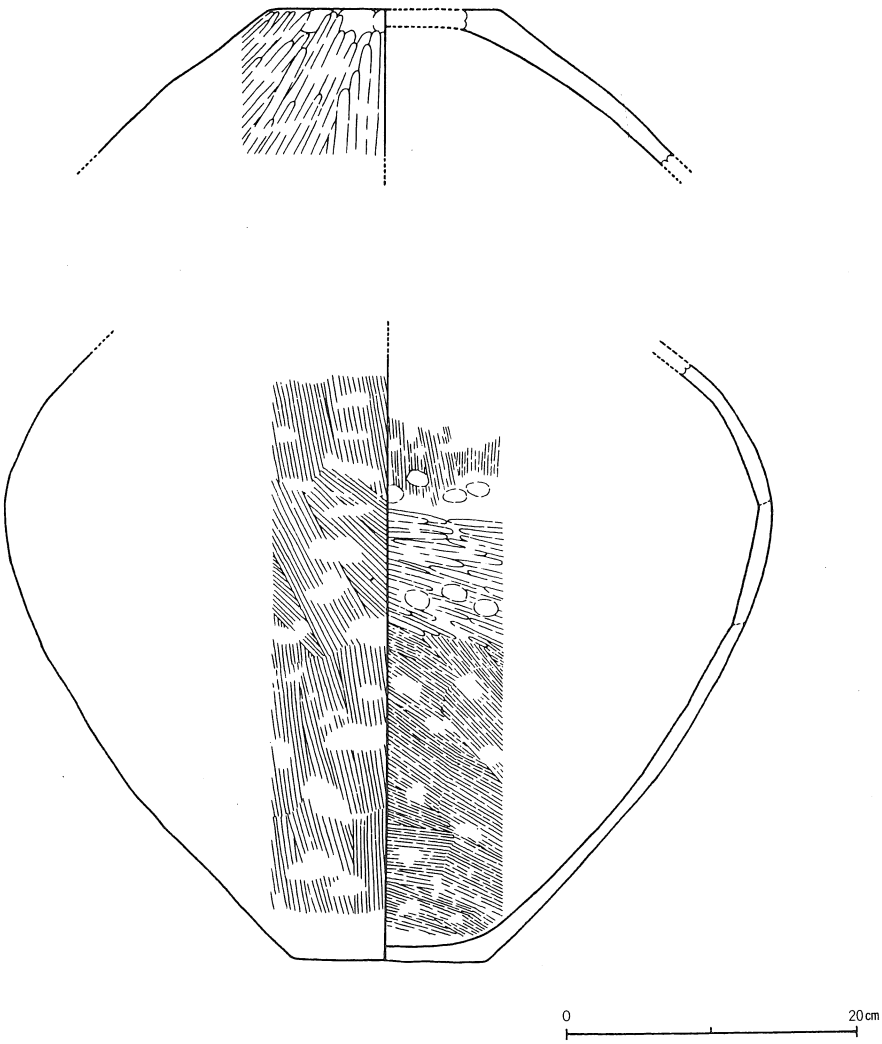
ＳＸ－01

ＳＸ－01はＤ－１グリッドの中央から、やや東寄りで検出された小児壺棺墓である。遺構は上半分が削平されてしまっており、墓坑の断面をみるような状態で検出された。壺棺の中心軸は6.5°、Ｎ－55°－Ｗ方位に傾いている。

壺棺内に堆積していた土層は大きく三種類に分層できた。下層は厚さ３cmの暗黒色粘性土層であり、最下部からは小児の歯数本と骨片・毛髪が出土している。この土層は、壺棺が壊れる前に、雨水などと伴に浸入した細かい泥が徐々に堆積したものであり、断面には幅１mm以下の細い縞文様が無数に認められた。中層は暗灰色粘性土で、この壺棺の蓋とされていたと思われる別



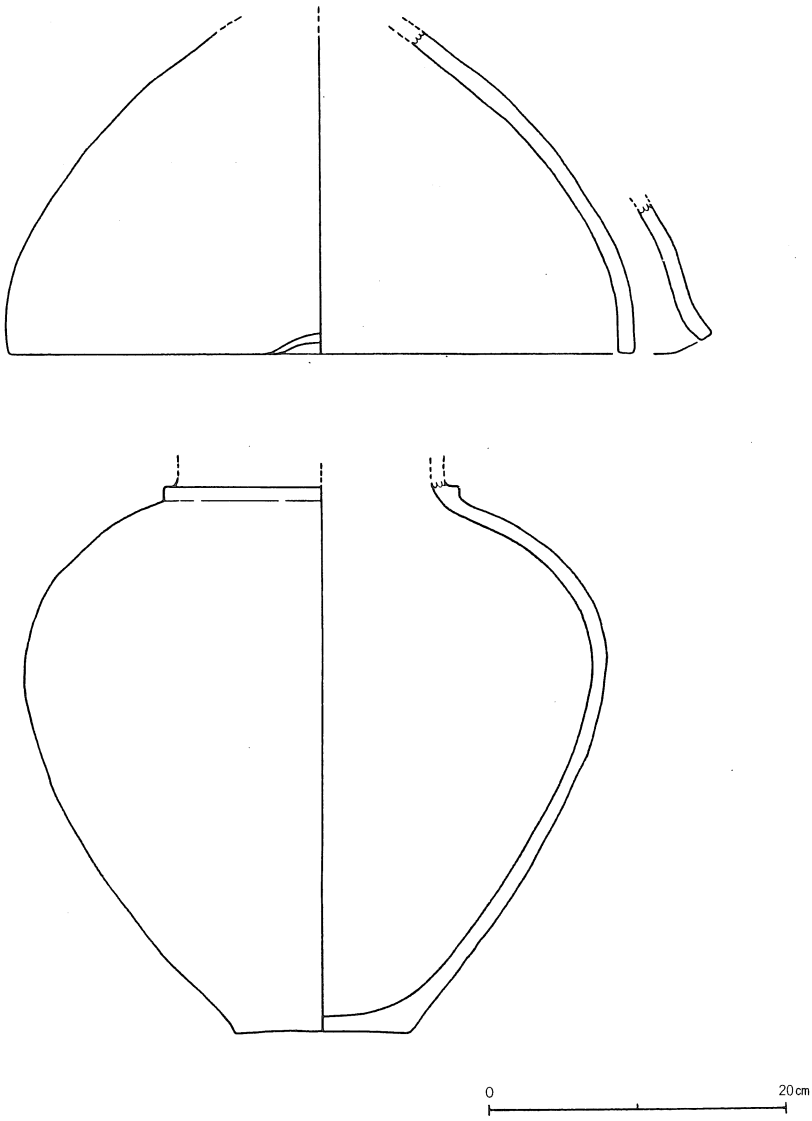
第156図
ＳＸ－01検出状況
（北から）



第157図　ＳＸ－01壺棺実測図

な大型土器の底部が落ち込んでいたことから、中層の堆積は、ある程度棺の上部が破損した時のものであると思われたが、埋土は下層同様除々に混入しているようである。上層については、土器小片を多量に含む黒褐色土が埋土となっており、これは当調査区内で検出された古墳時代の遺構の埋土と同一のものであり、須恵器片が出土していることから、この遺構は古墳時代には既に上部が完全に破壊されて、壺棺内が埋没してしまっていたと考えられる。また、墓坑の掘り方の埋土は暗茶褐色土であり、比較的容易に検出することができた。掘り方内南端には直径10cm程の柱穴が認められ、その遺存状況から墓坑と伴に構成されたものであると判断されたが性格は不明である。

ＳＸ－01には副葬品は認められず、壺棺本体も遺構と伴にその大半を失っており、この時点では壺棺墓の構成時期などについて明らかにはできなかった。

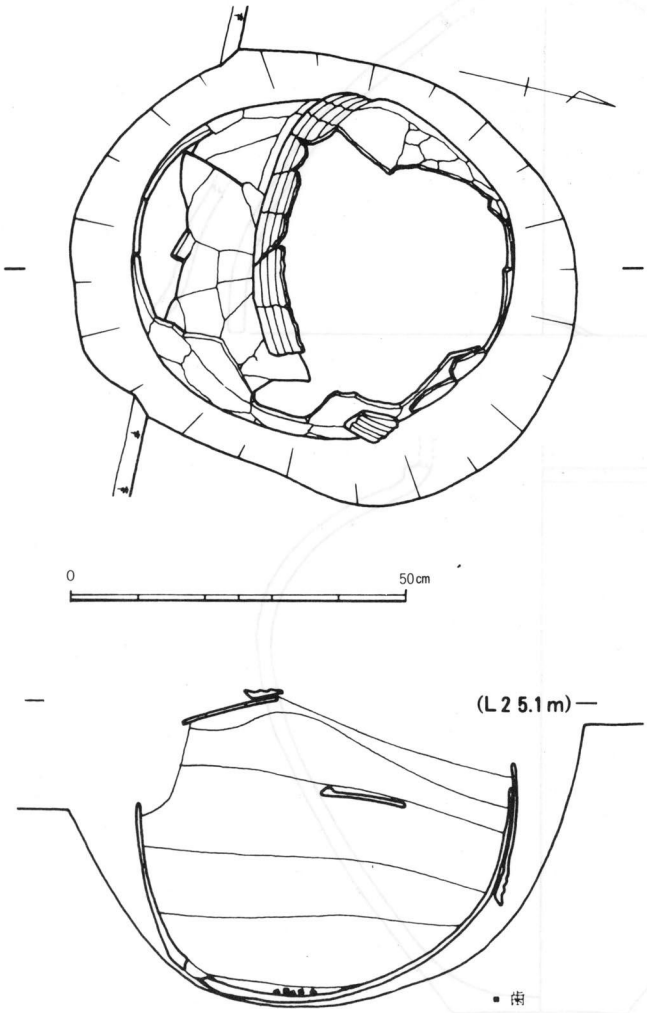


第158図　ＳＸ－02壺棺実測図

ＳＸ－02

ＳＸ－02はＤ－５グリッドの中央から、やや北東寄りで検出された小児壺棺墓であるが、自動車学校建設時に攪乱を受けたらしく、墓坑内部にまで表土が混入していた。また、壺棺は、一度墓坑から取り上げられた後に乱雑に投げ込まれた様な状態で出土しているため、壺棺の埋葬状況等は全く不明であるが、その土器片を接合した結果、蓋は注Ｄを持つ大型の鉢形土器であり、身は他の壺棺からみて比較的小型の壺形土器であることが判明した。

壺形土器はＳＸ－01の壺形土器同様、最大径を体高より上に持つ体形を呈しており、頸部に断面が三角形の突帯がめぐらされているが、これから上部は破片も全く存在しなかったため、棺として用いられる前に既に失われていたことも考えられる。

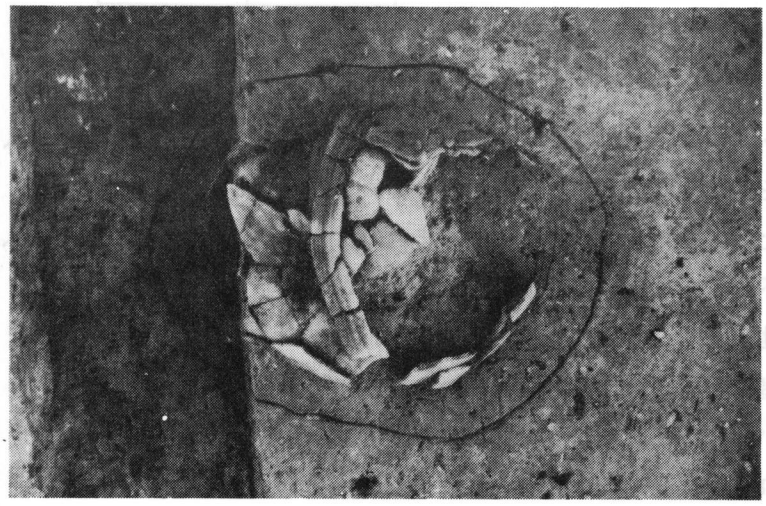


第159図　ＳＸ－03平・断面図

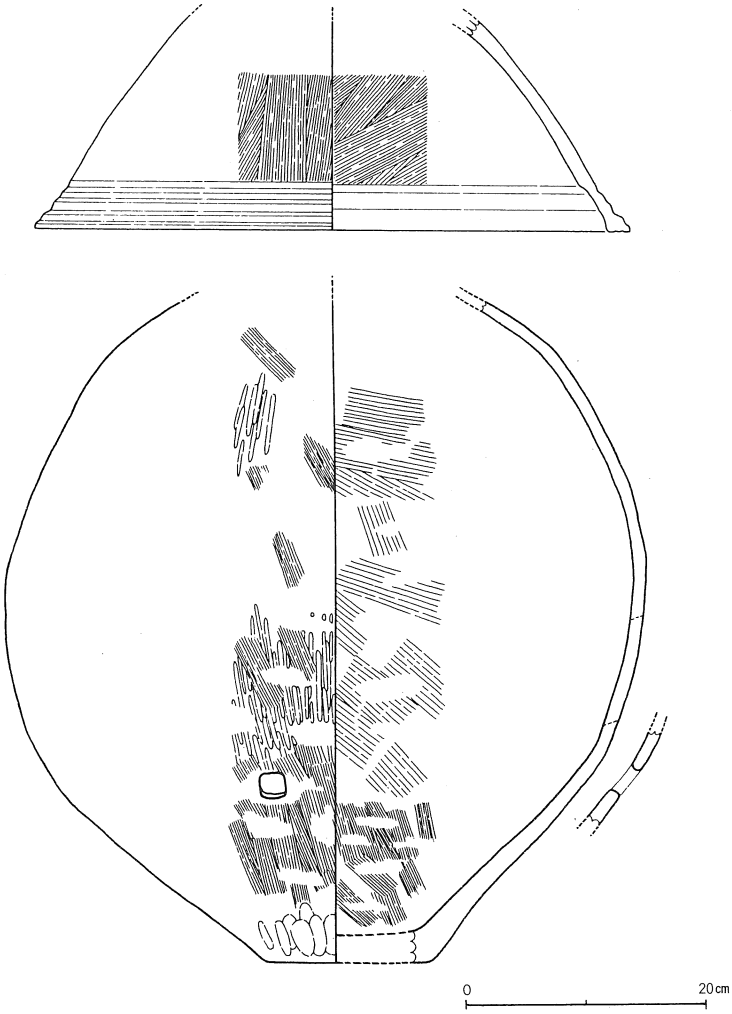
ＳＸ－03

ＳＸ－03はＣ－７グリッドの中央から、やや南西寄りで検出された小児壺棺墓である。墓坑の掘り込みは比較的深く、壺棺及び蓋である鉢形土器の遺存状況は良好であり、壺棺の中心軸は35°、Ｎ－13°－Ｗ方位に傾いているのが確認できた。

壺棺内に堆積していた土層は六種類に分層できた。まず、最下層は厚さ２cmの暗黒色粘性土で、小児の歯が十数本出土している。これは雨水などと伴に浸入した細かい泥が、徐々に堆積したものである。これに続いて暗灰色土層・暗灰色砂質土層・灰褐色砂質土層となっており、灰褐色砂質土層の上部には壺棺上部の破片が数点含まれていたことから、ここで棺の破損が進行したようではあるが、次に堆



第160図
ＳＸ－03検出状況
（東から）

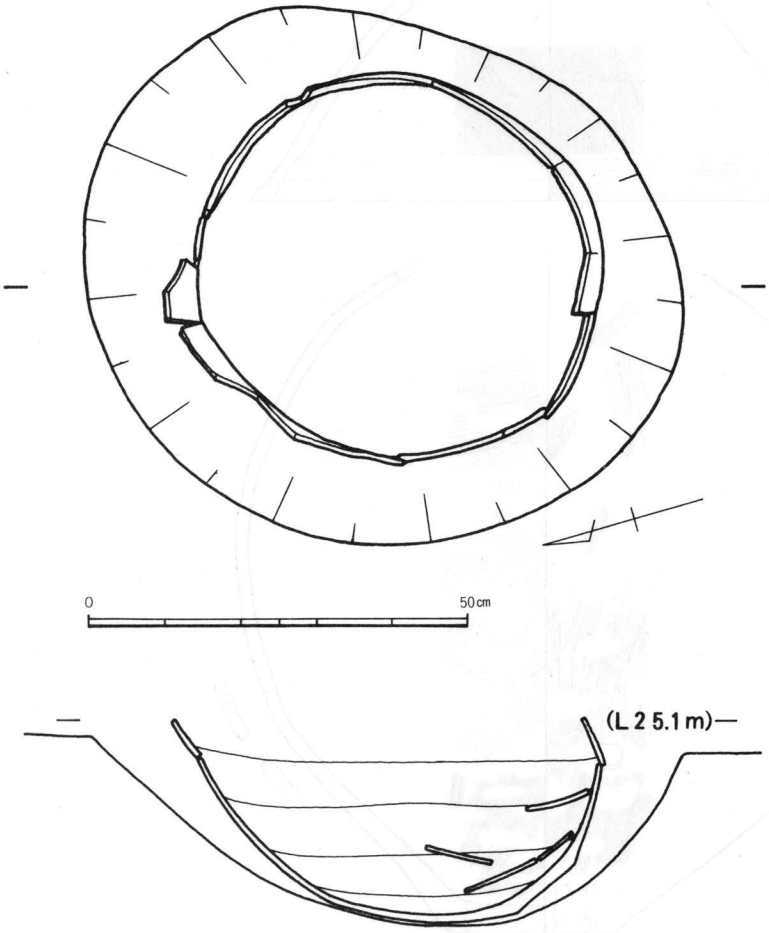


第161図　ＳＸ－03壺棺実測図

積している明灰色砂質土層・明灰色砂層からみて、その破壊は著しいものではなかったようである。

ＳＸ－03は上部を少し削平されてはいたが、蓋と身がしっかりと合わせられた状態で検出されており、その状況などから、この壺形土器は棺として用いられる前に既に頸部から上を欠いていたと判断された。この壺形土器は、最大径を体高中央より上に持つＳＸ－01・02の壺形土器とは異なり、同様に平底ではあるが、最大径を体高のほぼ中央に持つ球形に近い体形を呈している。また、壺形土器の底部は欠損しており、体部下方には焼成後に外側から施された方形の孔が認められた。蓋は擂鉢形を呈した大型の鉢であり、底部を欠いてはいるものの特徴的な形態の土器である。

ＳＸ－03には副葬品は全く認められず、壺棺本体も頸部から上を欠いてはいたが、残る体部の特徴などから、弥生時代後期末頃の所産ではないかと考えられる。



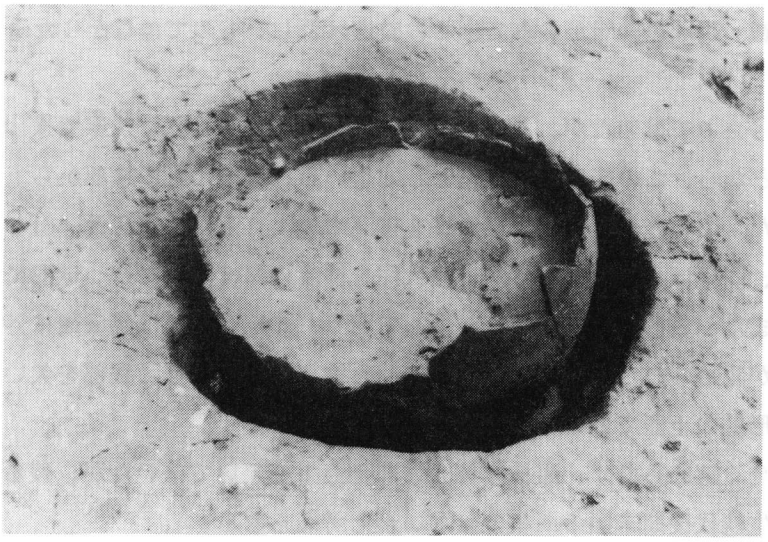
第162図　ＳＸ－04平・断面図

ＳＸ－04

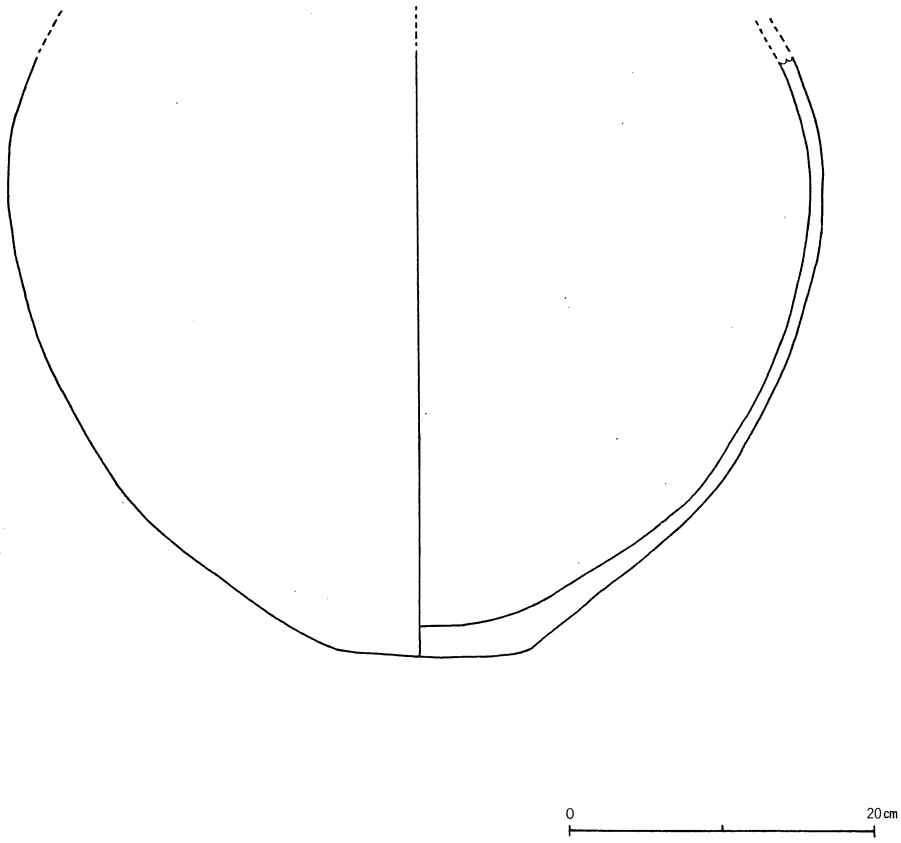
ＳＸ－04はＣ－７グリッドの北端で検出された小児壺棺墓である。壺棺は遺構と伴に上半分を削平されてしまっており、蓋と伴に身も体部上方が失われていた。壺棺の中心軸は40°、Ｎ－６°－Ｅ方位に傾いている。

壺棺内に堆積していた土層は四種類に分層できた。まず最下層は厚さ３cm程の暗黒色粘性土で、この土は壺棺上部が破壊されるより前に、徐々に堆積したものと考えられる。小児の歯などは検出されていない。

続けて暗灰褐色土層・黒褐色砂質土層が堆積し



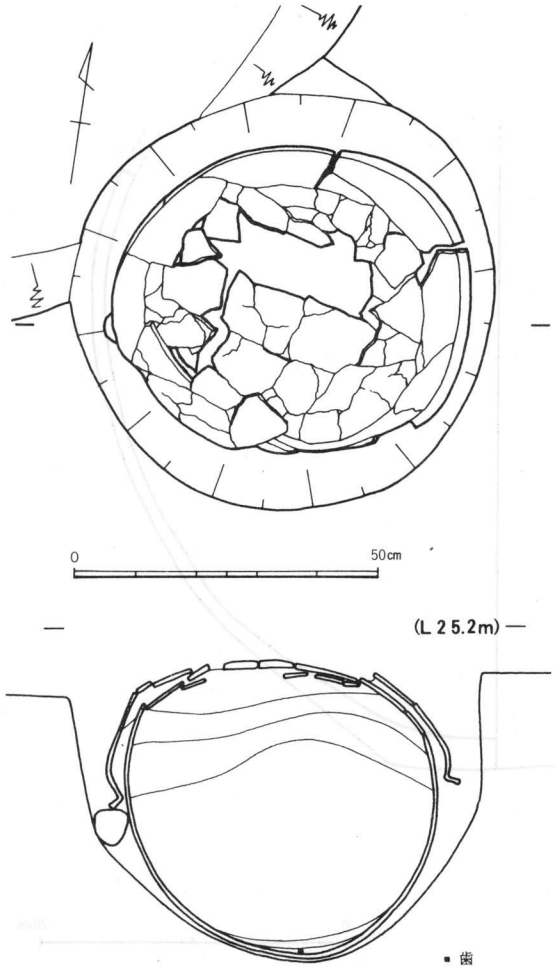
第163図
ＳＸ－04検出状況
（西から）



第164図　ＳＸ－04壺棺実測図

ており、それぞれの土層中には多数の弥生土器片と伴に、壺棺上部の破片が多数含まれていることから、壺棺はこれらの土層が堆積した時に上部が壊れてしまったことがわかる。最上層は、当調査区内で確認された古墳時代の遺構の埋土と同一の黒褐色土層となっている。また、墓坑の掘り方は小礫を少し含む黄褐色砂質土層の地山に、暗灰色砂質土として遺存しており、比較的容易に検出することができた。

棺に使用されている壺形土器は、最大径を体高のほぼ中央に持つＳＸ－03の壺形土器と類似してはいるが、こちらの方がより球形に近く、底部が丸味を帯びて来ている。その特徴から、弥生時代後期末頃の所産ではないかと考えられる。



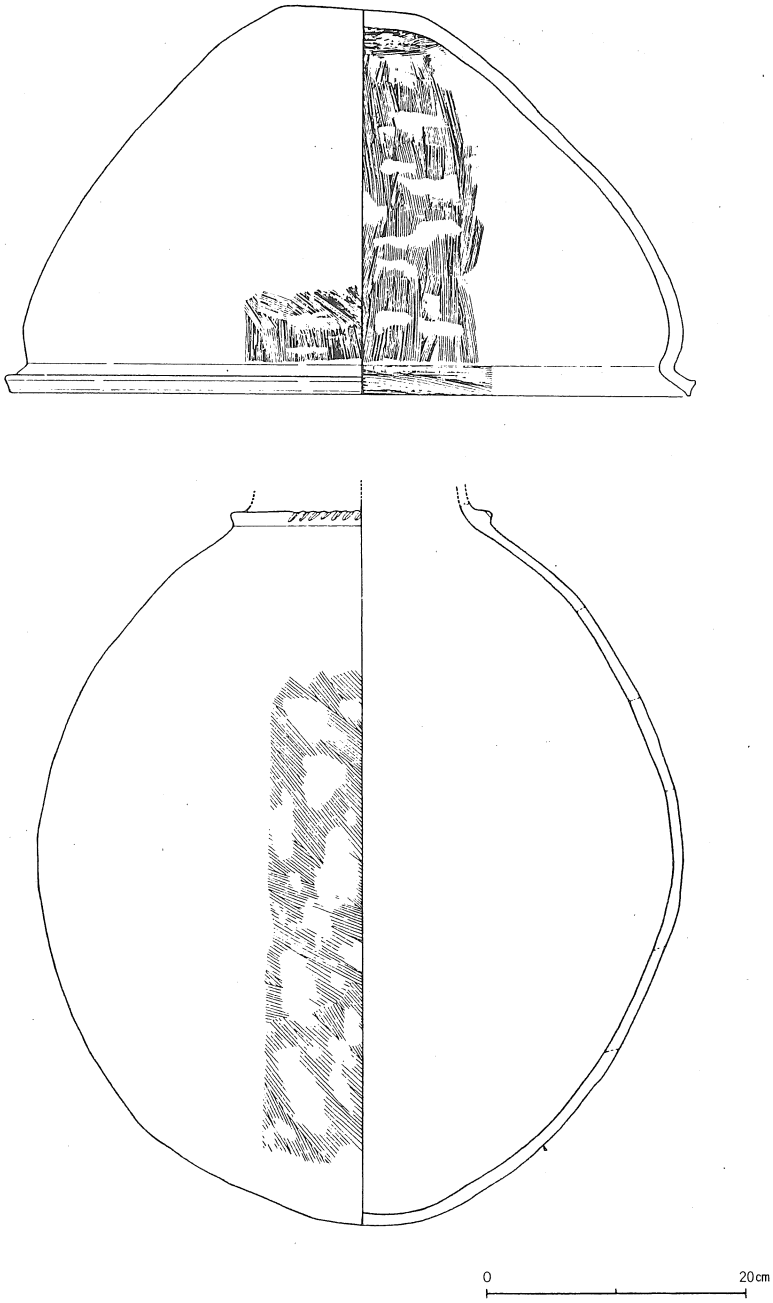
第165図　ＳＸ－05平・断面図

ＳＸ－05

ＳＸ－05はＣ－７グリッドの北東隅で検出された小児壺棺墓である。墓坑の掘り込みは比較的深く、壺棺及び蓋である鉢形土器の遺存状況は極めて良好であり、壺棺の中心軸は12°、Ｓ－80°－Ｗ方位に傾いているのが確認できた。

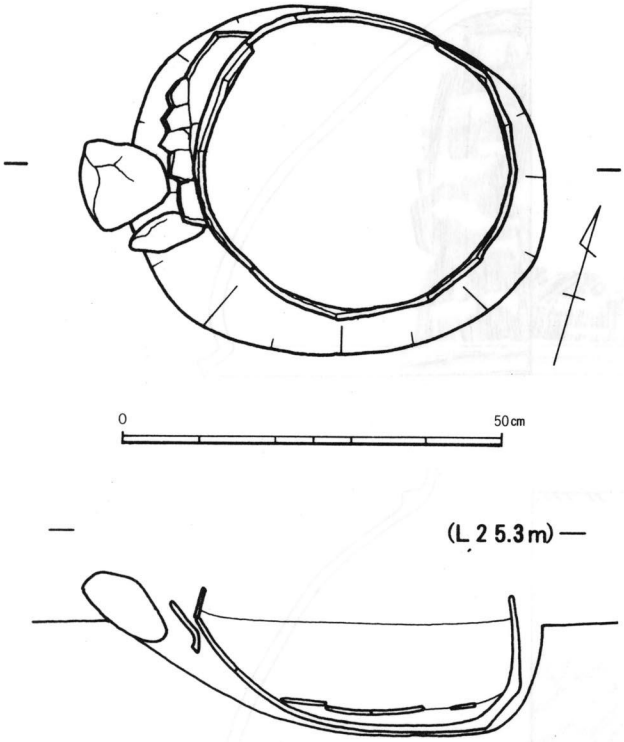
壺棺内に堆積していた土層は六種類に分層できた。まず最下層は厚さ１cm足らずの暗黒色粘性土で、壺棺が壊れる前に雨水と伴に浸入した細かい泥が徐々に堆積したものであり、断面には細い横縞文様が認められた。この中からは、小児の歯が一点だけ出土している。次に同じ状態で暗灰色粘性土が堆積しており、続けて暗褐色砂質粘性土・暗灰色砂質粘性土・灰白色砂質土・明灰色砂質土となっている。壺棺上部に著しい破損は認められず、いずれも徐々に流入し堆積したものであることがわかる。

第166図
ＳＸ－05検出状況
（北西から）



第167図　ＳＸ－05壺棺実測図

ＳＸ－05の壺棺は、余り傾けずに、壺棺の最大径よりもやや大きい円形の墓坑中央にうまく収まるように埋葬されている。また、棺に転用されている壺形土器は、頸部から上を埋葬以前に失っているが、体部の形態が、最大径を体高の中央に持ち丸底であるという特徴から、弥生時代終末期頃の所産ではないかと考えられる。

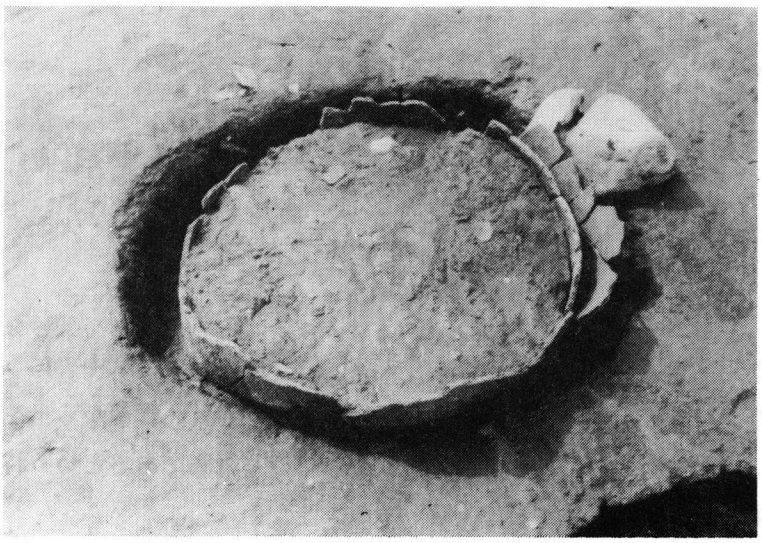


第168図　ＳＸ－06平・断面図

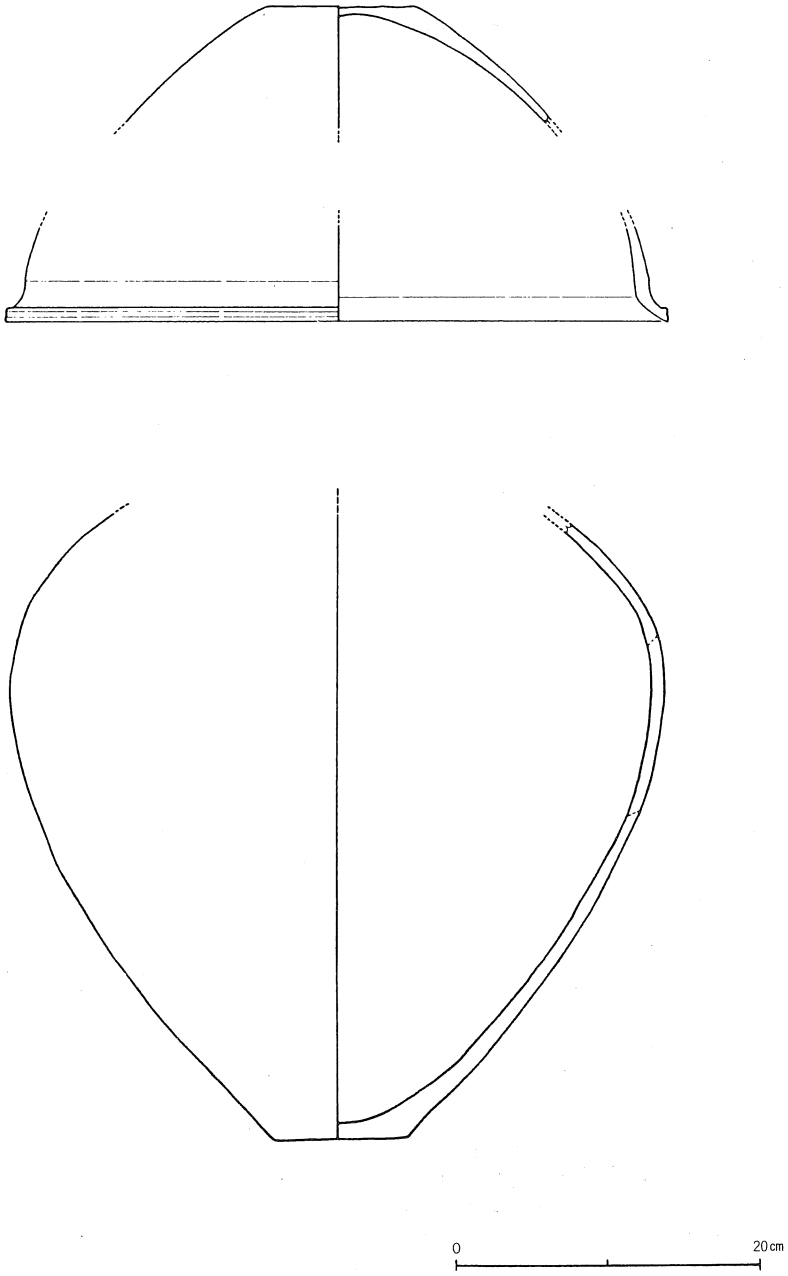
ＳＸ－06

ＳＸ－06はＣ－７グリッドの北東隅で検出された小児壺棺墓である。壺棺は最大径が40cm程の比較的小さなものであり、墓坑も浅かったことから、そのほとんどが遺構と伴に削平されてしまってはいるが、壺棺の中心軸の傾きはＳ－75°－Ｗ方位に49°と、かなり傾斜しているため、蓋の鉢形土器も一部残っていた。また、この傾斜した壺棺に蓋を固定させることが目的と考えられるこぶし大程の河原石が墓坑中に認められた。

壺棺内に堆積していた土層は二種類に分層できた。下層は暗灰色砂質土で、その直上には棺である壺形土器上部の破片と伴に蓋である鉢形土器の底部が落ち込んでおり、その上には弥生時代の土器片を多量に含む黒褐色土が埋土となっていることから、この壺棺墓はかなり早い時期に上部を破壊されていたことがわかる。

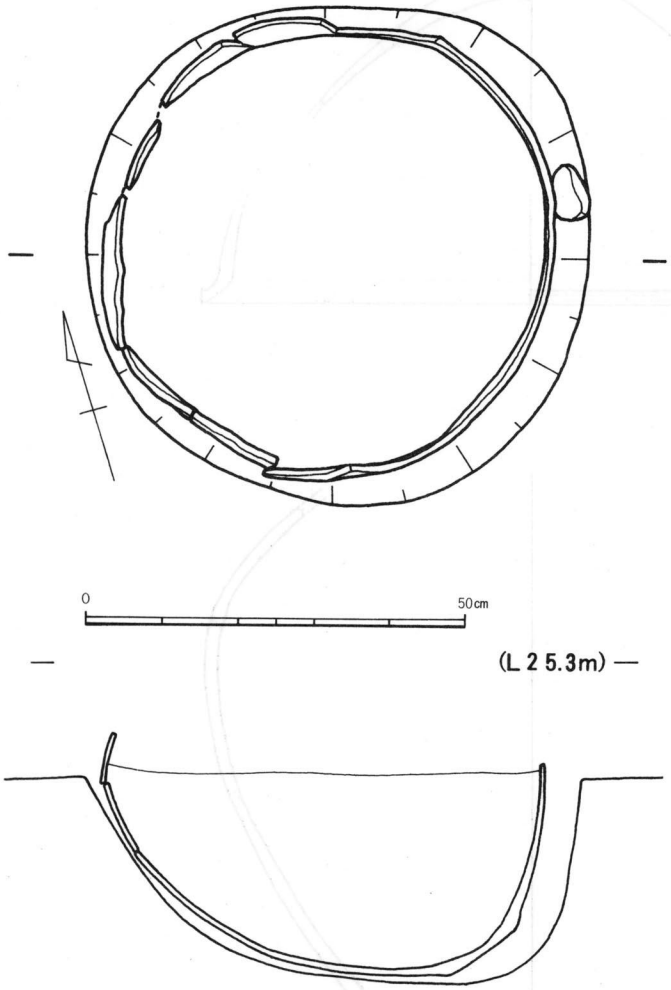


第169図
ＳＸ－06検出状況
（北から）



第170図　ＳＸ－06・壺棺実測図

墓坑の掘り方は、小礫を少し含む黄褐色砂質土層の地山に同じ土層の埋土で存在していたため識別は難しかったが、掘り方内の土には弥生土器の小片が多数含まれていたので、これをもとに検出することができた。掘り方の上部構造については不明であるが、ＳＸ－06の棺に使用されている壺形土器は平底で、最大径を体高の中央より上に持つという特徴などから、弥生時代後期頃の所産ではないかと考えられる。



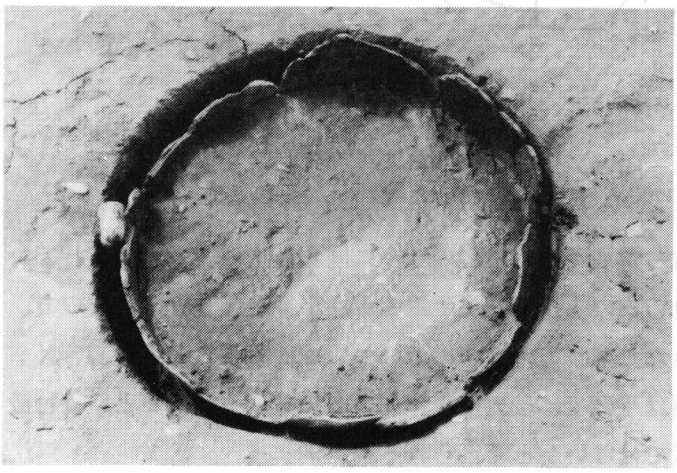
第171図　ＳＸ－07平・断面図

ＳＸ－07

ＳＸ－07はＣ－７グリッドの北東隅で検出された小児壺棺墓である。壺棺は最大径が60cm程のものであるが墓坑はかなり浅く、そのほとんどが遺構と伴に削り取られてしまっており、蓋についても全く不明である。

壺棺の中心軸は38°、Ｎ－73°－Ｗ方位に傾いていることが確認できた。

壺棺内の埋土は、棺上部の破壊に伴い流入した小礫と弥生土器片を多量に含む黒褐色土のみであり、最下部から青色のガラス製小玉片が出土しているが、これは副葬されたものではなく埋土に混入していたもののようである。また、墓坑の掘り方は小礫を少し含む黄褐色砂質土層の地山に灰褐色砂質土の埋土として遺存しており、比較的容易に検出することができた。

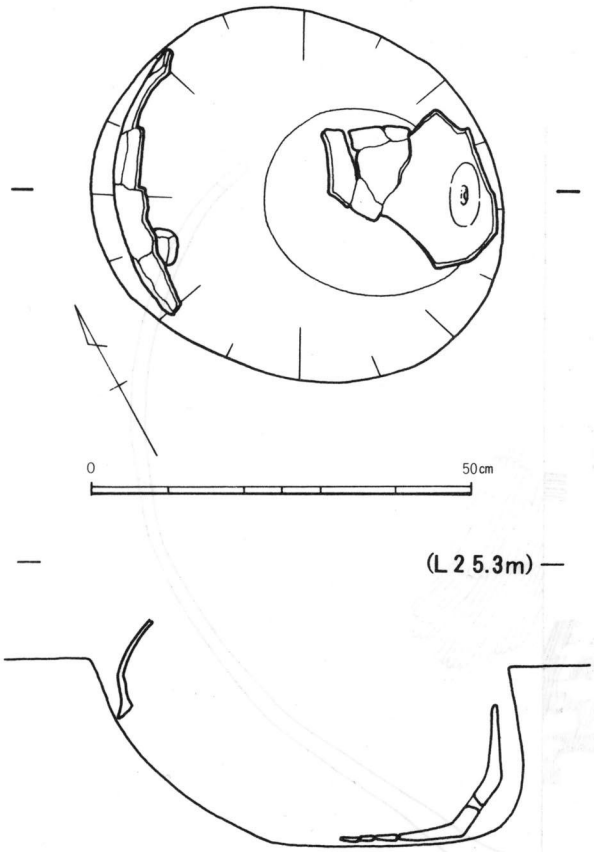


第172図
ＳＸ－07検出状況
（北から）

第173図　ＳＸ－07・壺棺実測図

ＳＸ－07の壺棺はその形態からＳＸ－03・04同様、弥生時代後期末頃の所産ではないかと考えられる。

同一墓地内でも、ここには半径わずか１ｍの円の中にＳＫ－05・06・07の三基が収まる程小児壺棺墓が密集している。そして、ＳＸ－05と06の掘り方の間はわずか12cm・ＳＸ－05と07で33cmしかないにもかかわらず、三基の墓から出土した壺棺には、明らかに時間的な形態の変化が認められた。この変化同様に墓が造られた時期にも幅があるとすれば、その間この集落では、小児の埋葬についての概念が一貫していたものと考えられる。



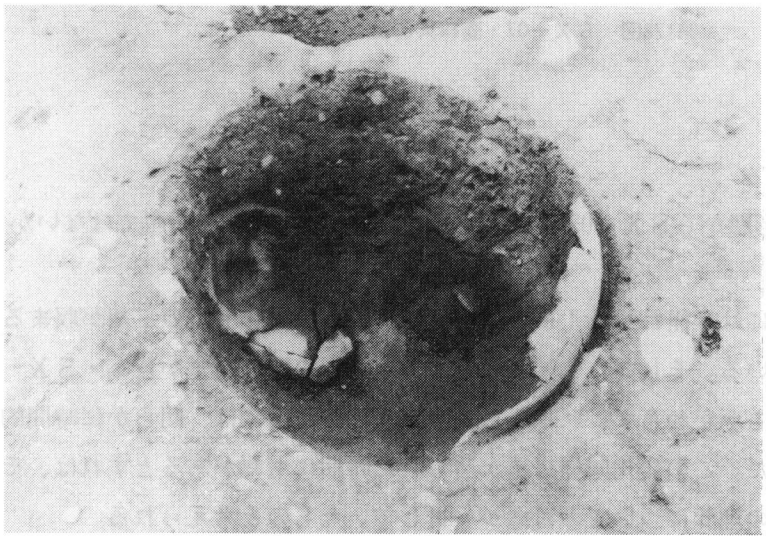
第174図　ＳＸ－08平・断面図

ＳＸ－08

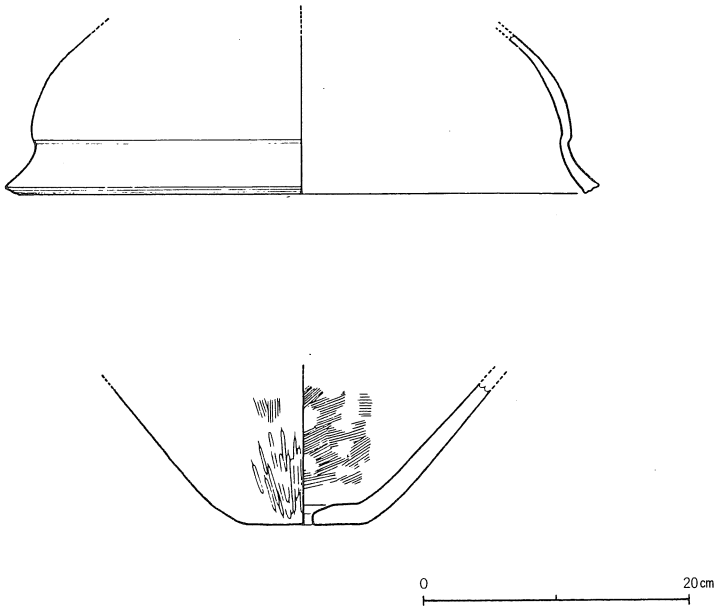
ＳＸ－08はＤ－７グリッドの北西隅で検出された小児壺棺墓である。壺棺はそのほとんど抜き取られてしまっており、墓坑の底に壺形土器の底部が一部分と、掘り方の片側に蓋の鉢形土器の口縁部が一部分残っているだけであった。

壺棺の抜き取り跡の埋土は最近の攪乱土ではなく、弥生土器片をわずかに含む暗灰褐色であり、かなり以前に乱掘されたものであるらしいが、その目的は不明である。荒く掘られた様子で墓坑の埋土もかなり残っており、壺棺の残存部分も埋葬された時のままの状態であり、動かされた形跡は認められなかった。

棺に使用された壺形土器は残存する底部から、最大径を体高の中央より上に持つＳＸ－01・02・06出土の壺形土器と同様の体形を呈していたと考えられる。そして、壺棺の主軸は約50°、Ｎ－



第175図
ＳＸ－08検出状況
（北から）



第176図　ＳＸ－08・壺棺実測図

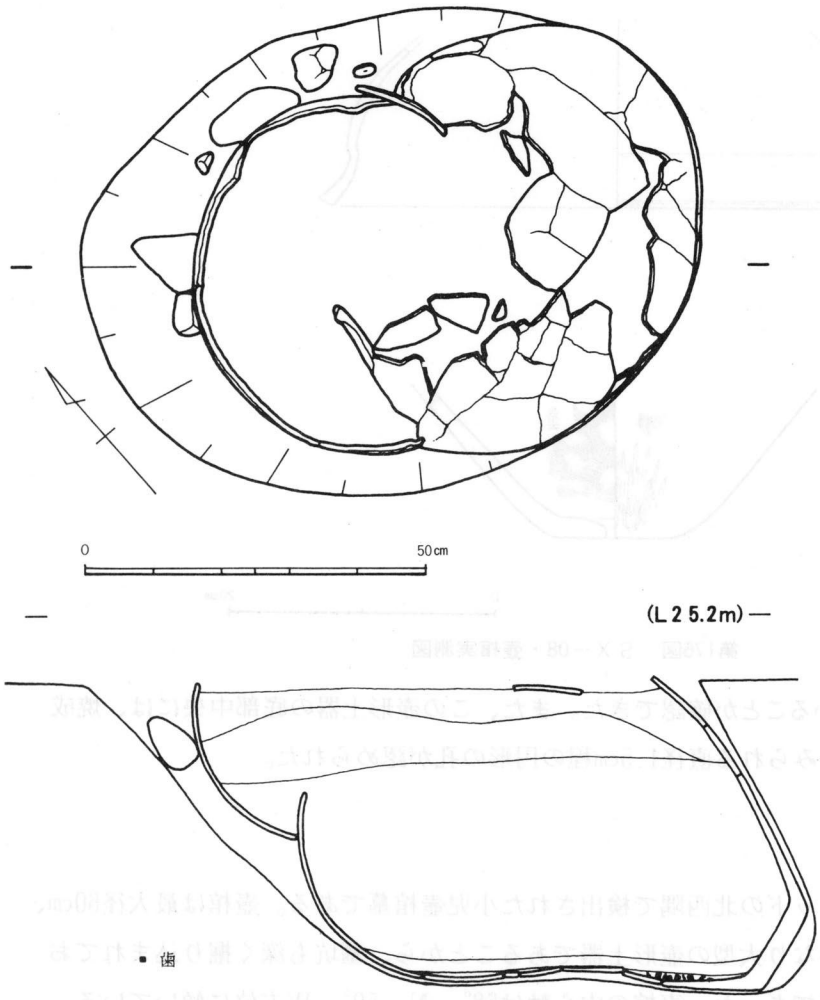
約60°－Ｗ方位に傾いていることが確認できた。また、この壺形土器の底部中央には、焼成後に外部から施されたとみられる直径1.5cm程の円形の孔が認められた。

ＳＸ－09

ＳＸ－09はＤ－７グリッドの北西隅で検出された小児壺棺墓である。壺棺は最大径60cm、体高だけでも75cmと、かなり大型の壺形土器であることから、墓坑も深く掘り込まれており遺存状況は比較的良好であった。壺棺の中心軸は58°、Ｎ－50°－Ｗ方位に傾いている。

壺棺内に堆積していた土層は五種類に分層できた。まず、最下層は厚さ１cm程の暗黒色粘性土で、底部寄りの最深部に堆積したものであり、中から十数本の小児の歯が出土している。次に２～３cmの厚さに暗灰色粘性土が堆積している。続けて認められた褐色砂質土・灰褐色砂質土層には分銅形土製品の破片や、多量の弥生土器片が含まれていることから、壺棺の上部が破損したことによって流入したものであると考えられた。最上層は暗灰色砂質土層で遺物は含まれてはいなかった。

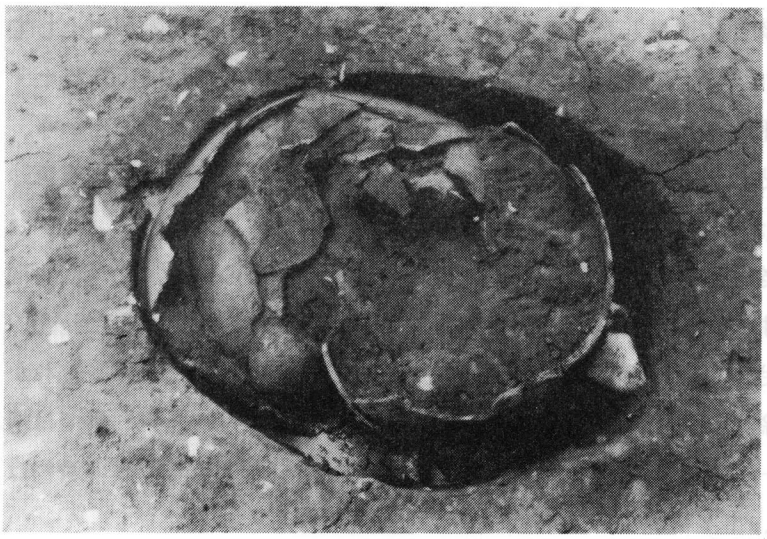
墓坑の掘り方は、小礫を少し含む黄褐色砂質土層の地山に３cm前後の礫を多く含む灰褐色の埋土として遺存しており、容易に判別し検出することができたが、検出された範囲内での墓坑の大きさは、長さが92cm・幅が70cmと、壺棺がやっと納まる程度であり、それがちょうど横たわるように斜めに掘り込まれていた。また、墓坑の掘り方の北東内側では遺構直上から土製紡錘車が一点出土しており、埋土である灰褐色土中には土器片等の遺物はほとんど混入しておらず、出土状況からも供献された可能性が考えられる。



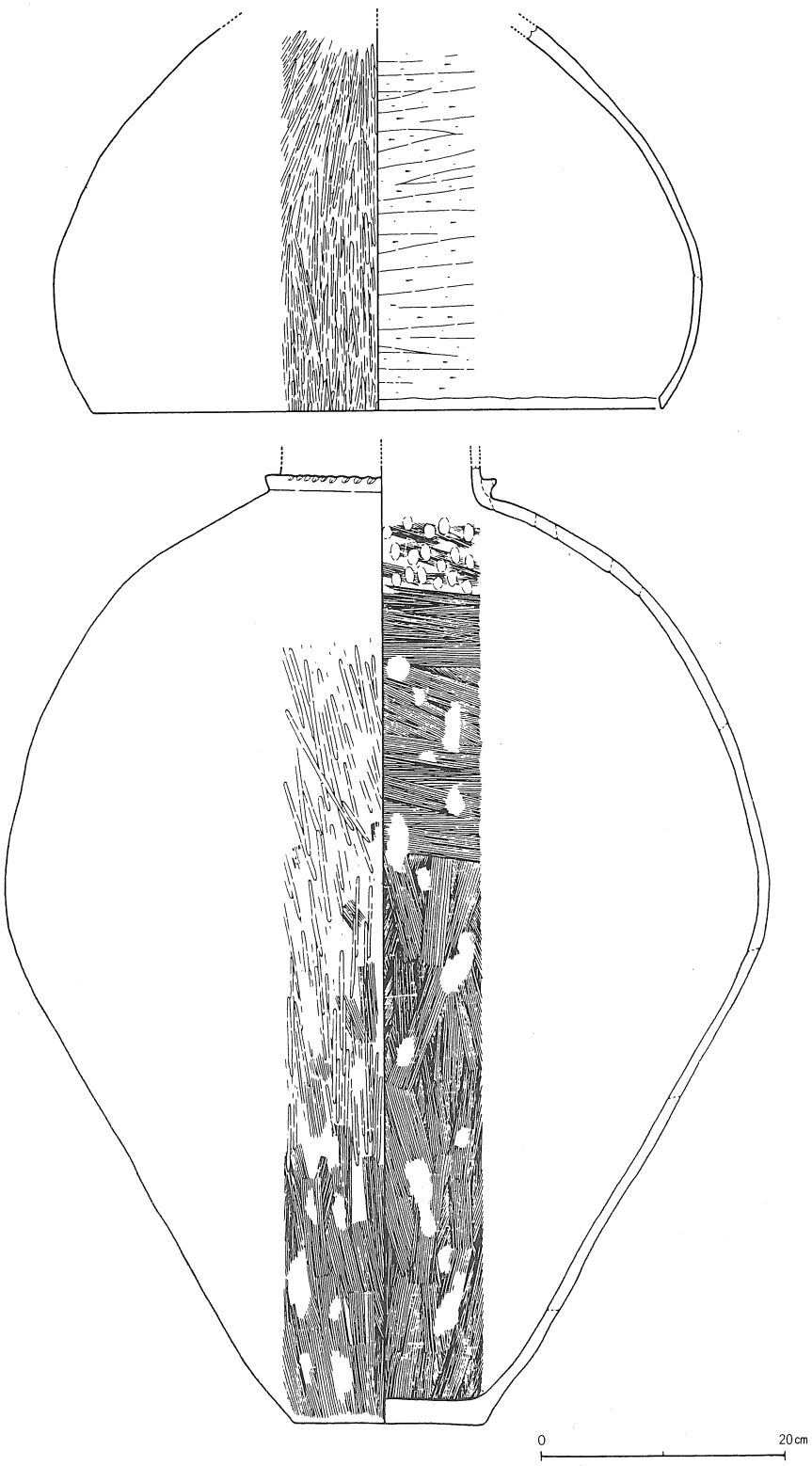
第177図　ＳＸ－09平・断面図

棺に使用されている壺形土器は極めて大きく、その形態に多少の違いは認められるが、ＳＸ－01・02・06・08出土の体高の中央より上に最大径を持つグループに分類され、やはり弥生時代後期頃の所産ではないかと考えられる。また、頸部から上は埋葬以前に失っているようである。

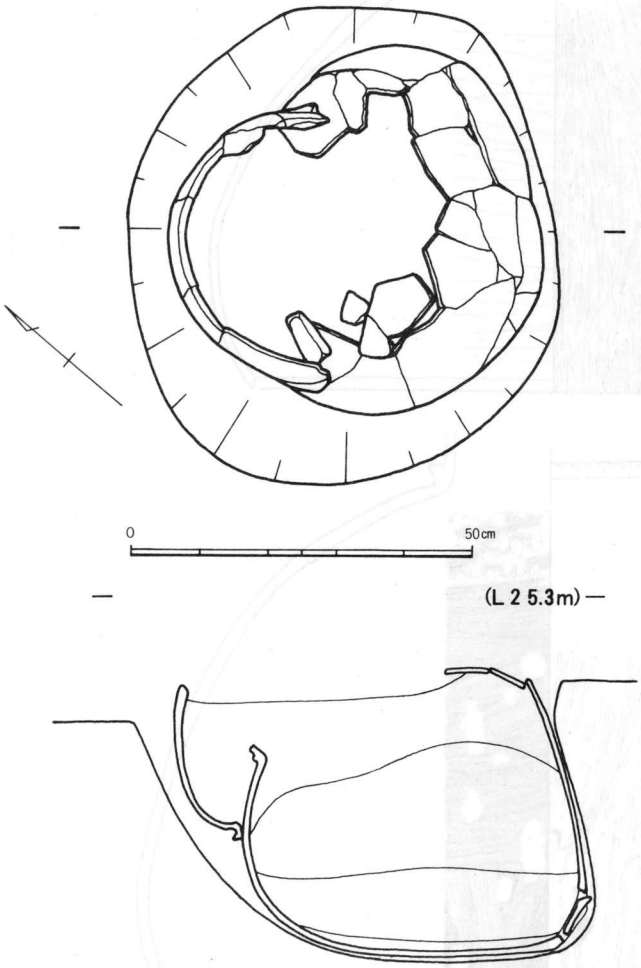
蓋に使われている土器は底部が失われてはいるが、その形態から、壺形土器か大型の鉢の上部を輪積みによる接合部分に添って打ち欠いて加工したものを用いていると考えられる。



第178図
ＳＸ－09検出状況
（北から）



第179図　ＳＸ－09・壺棺実測図



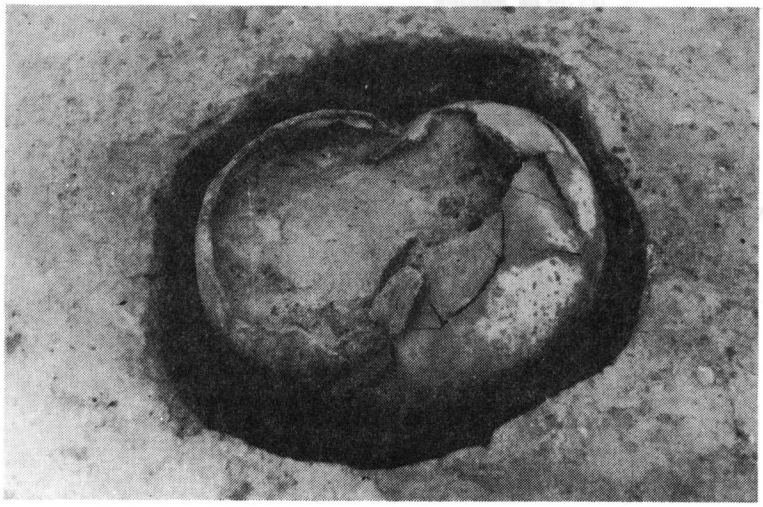
第180図　ＳＸ－10平・断面図

ＳＸ－10

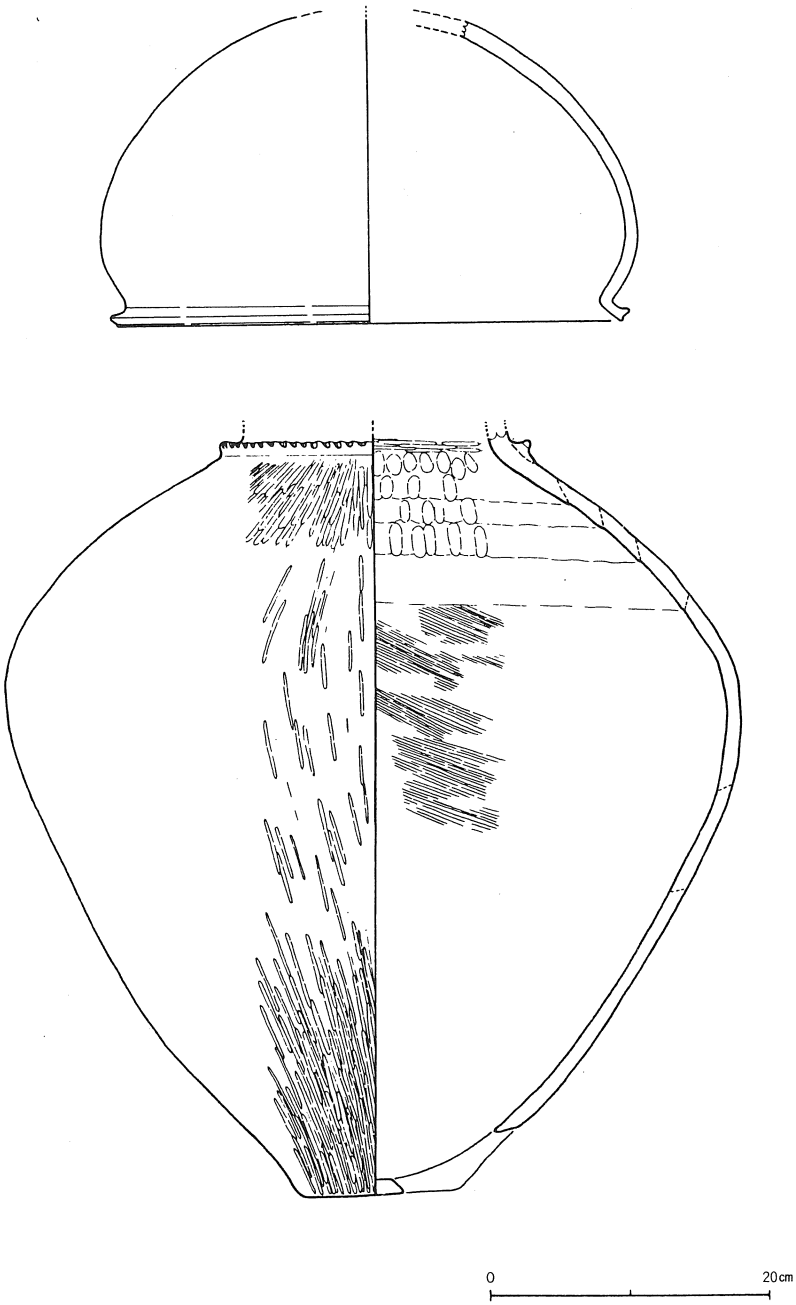
ＳＸ－10はＤ－７グリッドの中央からやや北西寄りで検出された小児壺棺墓である。壺棺の最大径は50cm程であるが、墓坑が比較的深かったらしく、遺存状況は良好であった。壺棺の主軸は53°、Ｎ－30°－Ｗ方位に傾いている。

壺棺内に堆積していた土層は四種類に分層できた。まず、最下層は暗黒色粘性土層で、1.5cm程の厚さに堆積していたが小児の歯等は検出されていない。続けて黒色粘性土・暗黒色砂質土・灰白色砂質土の順に認められたが、いずれの土層にも土器片等の遺物は全く出土してなかった。

棺に使用されている壺形土器は頸部に三角形の断面を呈する突帯がめぐらされ、その上には刺突文が施されている。そして、最大径を体高の中央より上に持つという

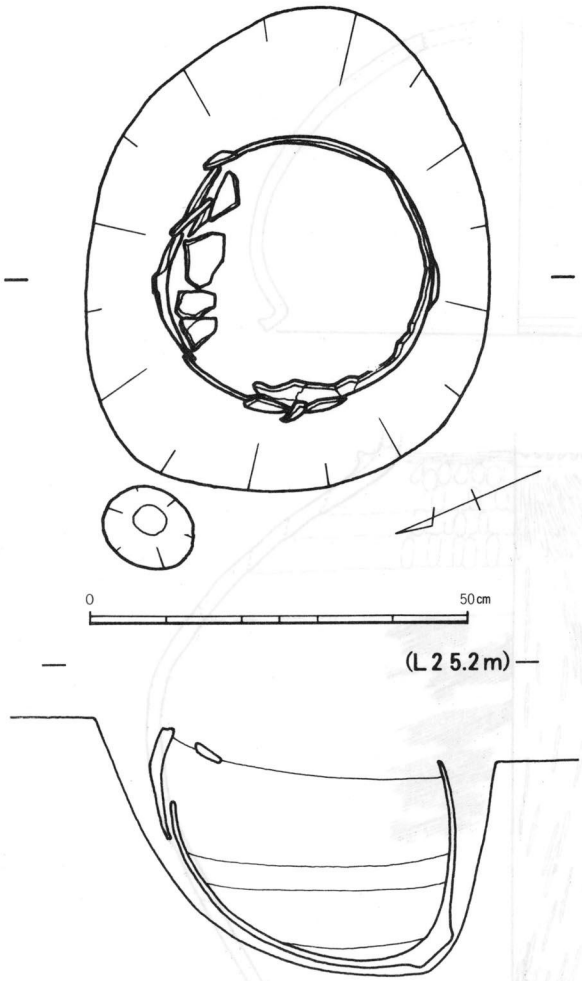


第181図
ＳＸ－10検出状況
（南西から）



第182図　ＳＸ－10・壺棺実測図

点などから、ＳＸ－09出土の壺形土器と同形式であり、ＳＸ－01・02・06・08と同グループに分類できる。また、ＳＸ－10の壺形土器は棺に転用されるより前に底部が欠損し直径10cm程の円形の穴があいており、埋葬時に別の土器片を用いて塞いであった。頸部から上も埋葬された時には失われているが、これについてはＳＸ－02・03・09同様、埋葬時に手を加えたものか、以前から欠損していたものかは不明である。



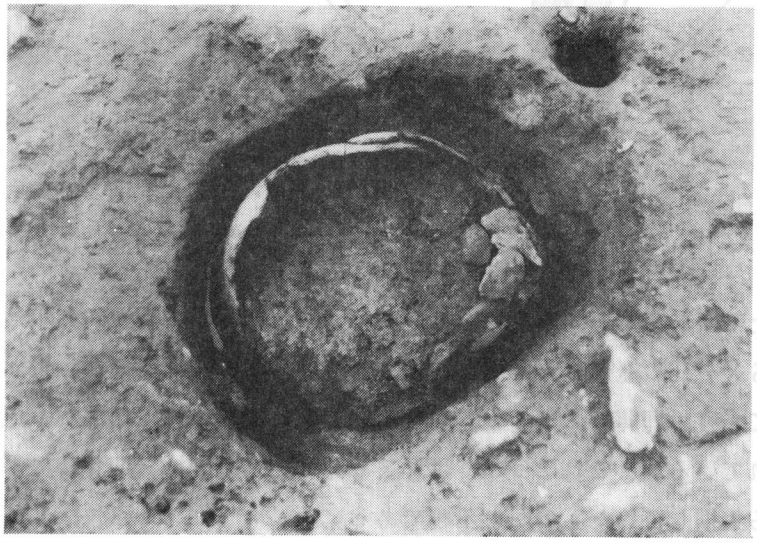
第183図　ＳＸ－11平・断面図

ＳＸ－11

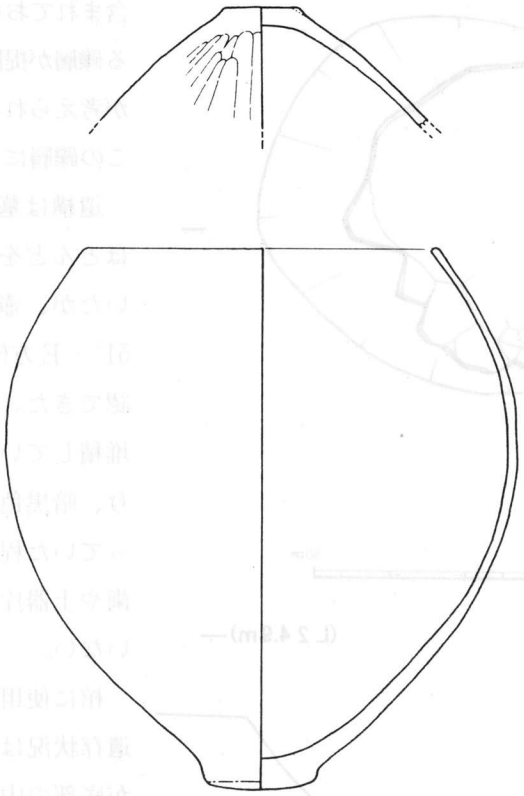
ＳＸ－11はＤ－７グリッドの中央からやや北西寄りで検出された小児壺棺墓であり、今回出土した十五個の壺棺中、最大径が約35cmと、一番小型であるにもかかわらず墓坑は比較的深く遺存状況も良い方であった。壺棺の主軸は41°、Ｎ－23°－Ｅ方位に傾いている。

壺棺内に堆積していた土層は下から、暗褐色砂質土・暗黒色粘性土・黒色粘性土・褐色砂礫土の四種類に分層できた。いずれの土層からも土器片等の遺物は出土していない。

身の壺形土器は体部の上方を、棺に転用されるよりも前に、輪積みの接合部分に添って水平に取られた状態で使用されていたらしく、この部分は摩耗し丸味を帯びている。また、蓋には別な土器の底部が用いられているが、その器種は判別できない。



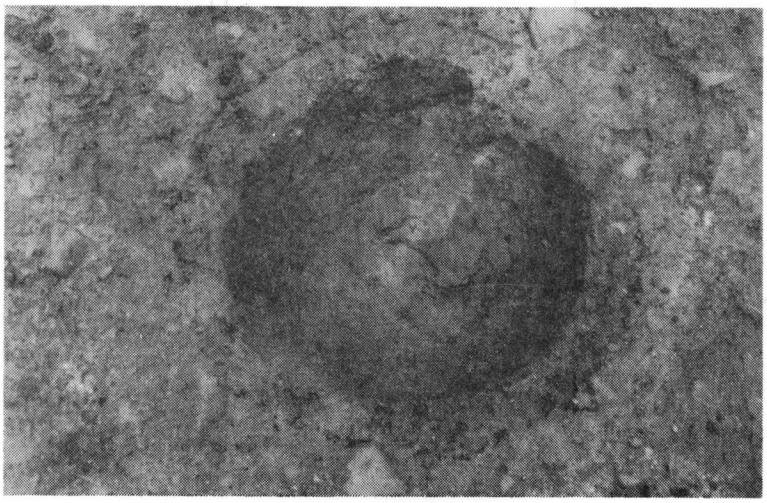
第184図
ＳＸ－11検出状況
（南東から）



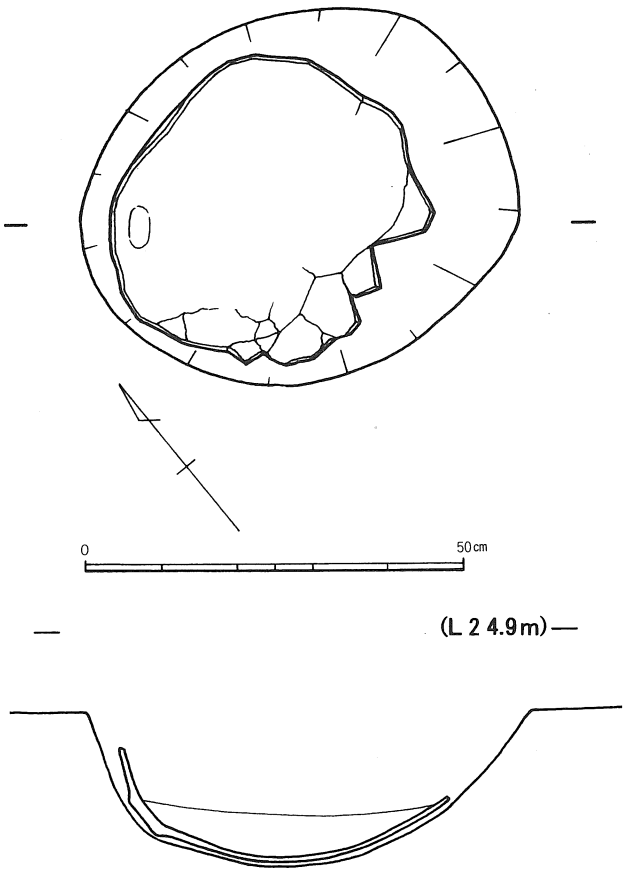
第185図　ＳＸ－11・壺棺実測図　0　20cm

ＳＸ－12

ＳＸ－12はＤ－８グリッドの中央から、やや南寄りで検出された小児壺棺墓である。この周辺を含めた調査区の中央部では、地山である黄褐色砂質土層中に５～10cm程の礫が多量に



第186図
ＳＸ－12検出状況
（南西から）

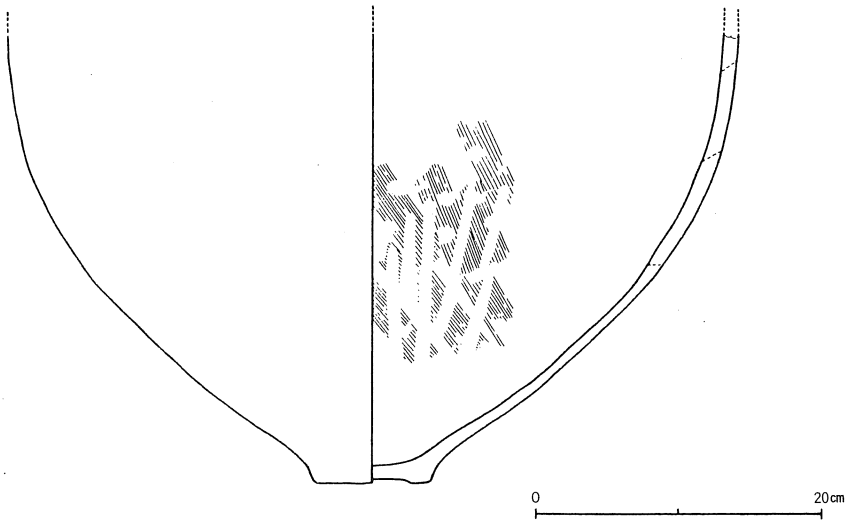


第187図　ＳＸ－12平・断面図

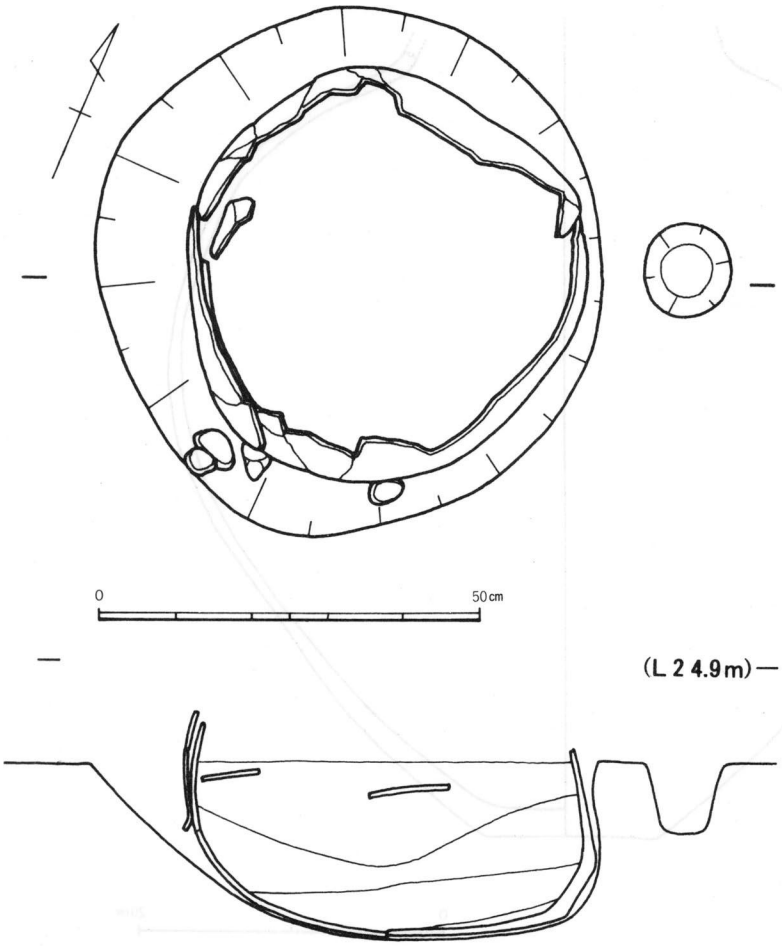
含まれており、下の氾濫原を構成する礫層が提防状に突出していることが考えられる。ＳＸ－12の墓坑は、この礫層にまで掘り込まれていた。

遺構は墓坑の下部を残してそのほとんどを攪乱されてしまってはいたが、壺棺の主軸が49°、Ｓ－51°－Ｅ方位に傾いていることが確認できた。また、攪乱は壺棺内に堆積している土層にまで及んでおり、暗黒色粘性土が厚さ５㎝程残っていた程度である。ここからは歯や土器片等の遺物は検出されていない。

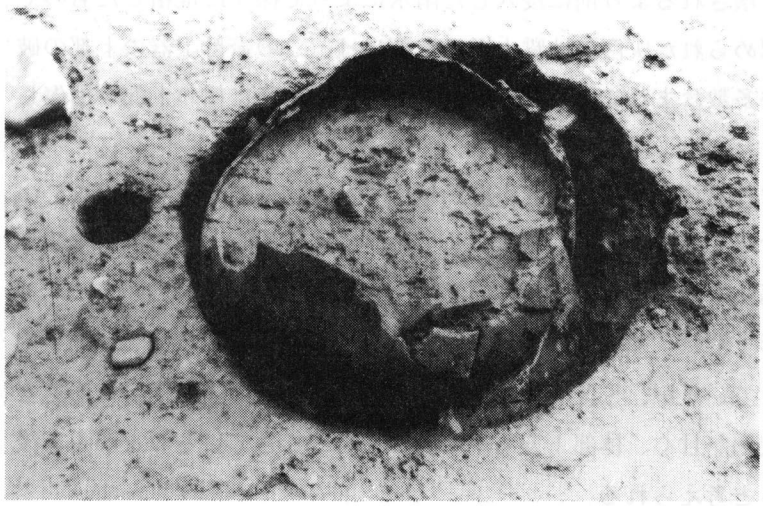
棺に使用されている壺形土器は遺存状況は悪かったが、その形態が底部の中央がややくぼんでいる点を除けばＳＸ－03・07と同じグループに分類できることから、弥生時代後期末頃の所産ではないかと考えられる。



第188図　ＳＸ－12・壺棺実測図



第189図　ＳＸ－13平・断面図



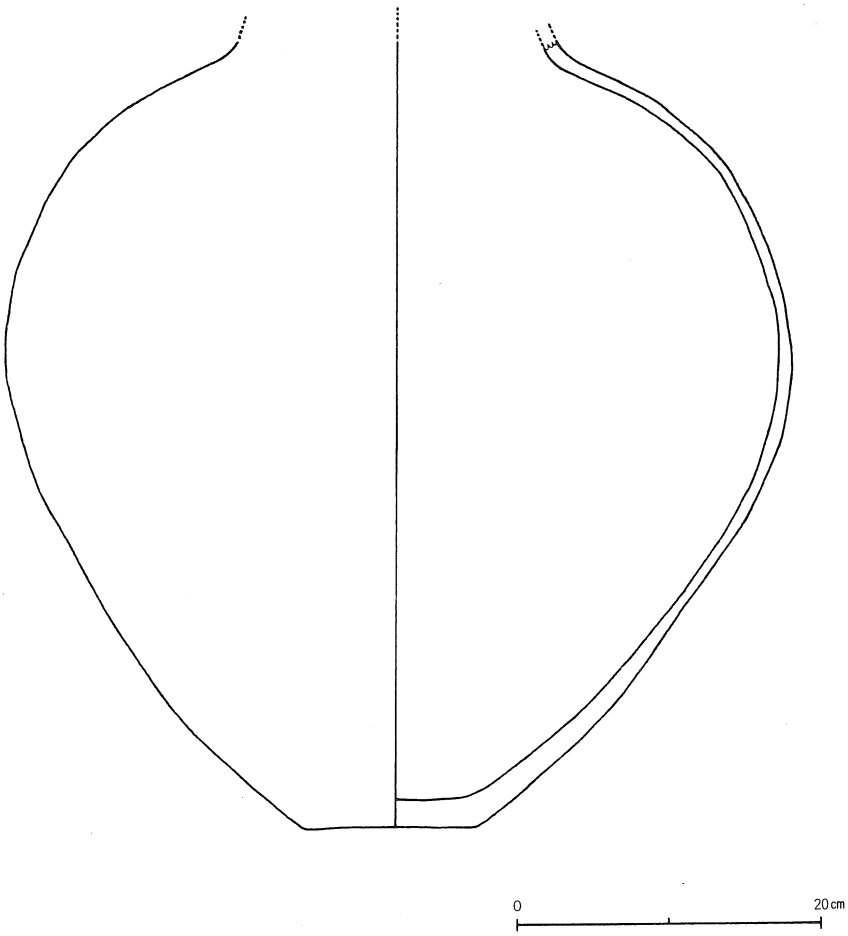
第190図
ＳＸ－13検出状況
（南から）

ＳＸ－13

ＳＸ－13はＣ－10グリッドの中央から西寄りの位置で検出された小児壺棺墓である。壺棺は、その上部を遺構と伴に削平されてしまってはいたが遺存状況はやや良好であり、埋葬状態はよく観察できた。

壺棺の主軸は56°、Ｎ－18°－Ｗ方位に傾いている。

壺棺内に堆積していた土層は四種類に分層できた。まず最下層は厚さ１㎝足らずの暗黒色砂質粘性土で、続けて暗黒色粘性土・暗灰色粘性土となっているが、いずれの土層にも

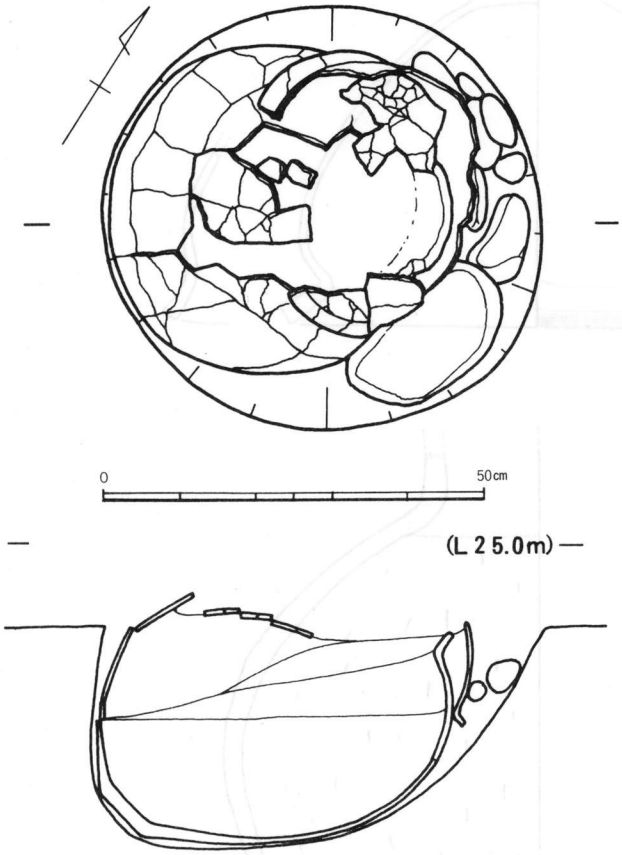


第191図　ＳＸ－13・壺棺実測図

土器片等の遺物は全く含まれてはおらず、各土層の断面に幅数㎜の横縞が無数に認められることから、棺の上部が破壊されるより前に浸入した雨水によって徐々に堆積したものであると考えられる。次に認められた灰白色砂質土層の上部には、この壺形土器の上部の破片と伴に弥生土器の小片が多数含まれており、この土層が堆積した時に棺の上部が損傷したことがわかる。

このグリッドでは大きな礫を含む黄褐色砂質土層が地山であり、墓坑の掘り方はここに弥生土器の小片を多数含む暗灰色砂質土として遺存しており、比較的容易に識別し検出することができた。また、墓坑の下部は完全に砂利層となっている。

棺に使用されている壺形土器は、頸部に突帯等の飾りは認められず、最大径を体高の中央より上に持つ形態を呈しているが、ＳＸ－01・02・06・08・09・10の壺形土器の形態と比べると、最大径部分の突出が甘く、体部下方もやや丸味を帯びてきていることから、後期後葉頃に位置づけられると考えられる。



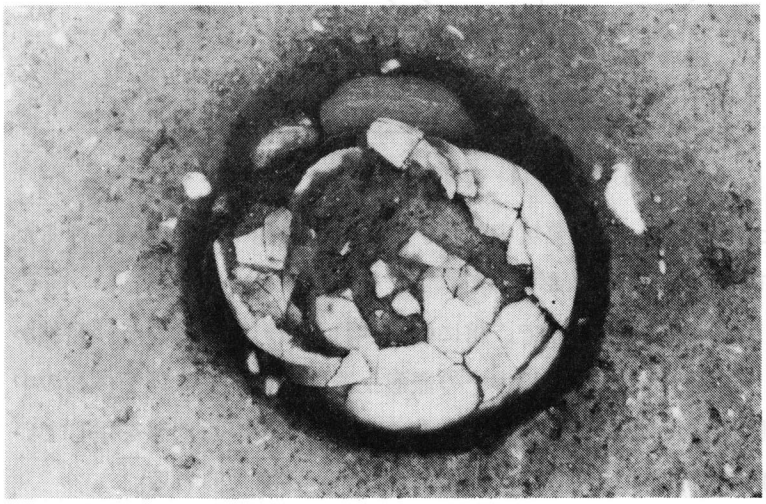
第192図　ＳＸ－14平・断面図

ＳＸ－14

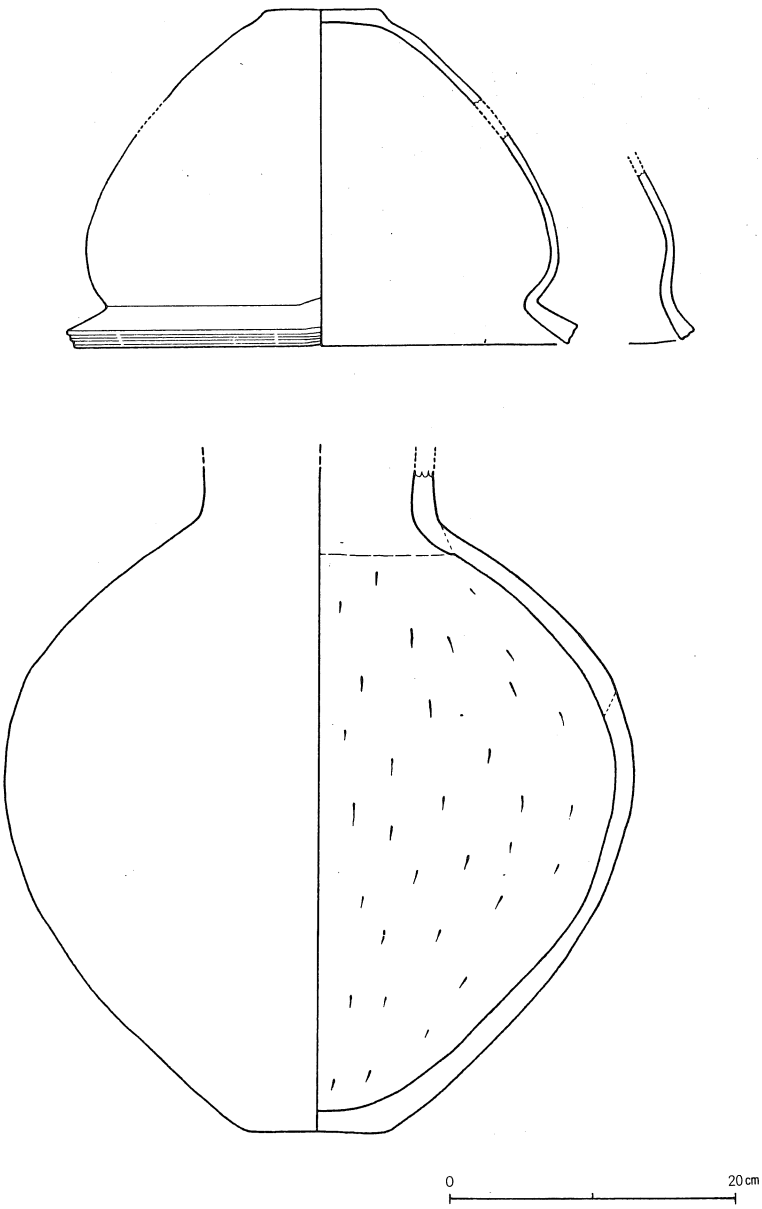
ＳＸ－14はＤ－10グリッドの西端中央部で検出された小児壺棺墓である。墓坑の掘り方は比較的深かったため遺存状況は良好で、壺棺の主軸方位は50°、Ｎ－58°－Ｅ方位に傾いているのが確認できた。

壺棺内に堆積していた土層は四種類に分層できた。まず、暗灰色粘性土が16㎝程の厚さ水平に堆積している。続けて暗灰色砂質土・灰褐色砂質土が壺形土器の口の部分から流入した状態で認められ、さらに灰白色砂質土が壺棺内の残りの空間を埋めるように堆積し、この上に壺棺上部の破片が落ち込んでいるのが認められたが、いずれの土層からも土器片等の遺物は全く出土していない。

このグリッドも大きな礫を含む黄褐色砂質土層が地山で、墓坑の掘り方は、ここに弥生土器片を少量含む灰褐色砂質土として遺存しており、



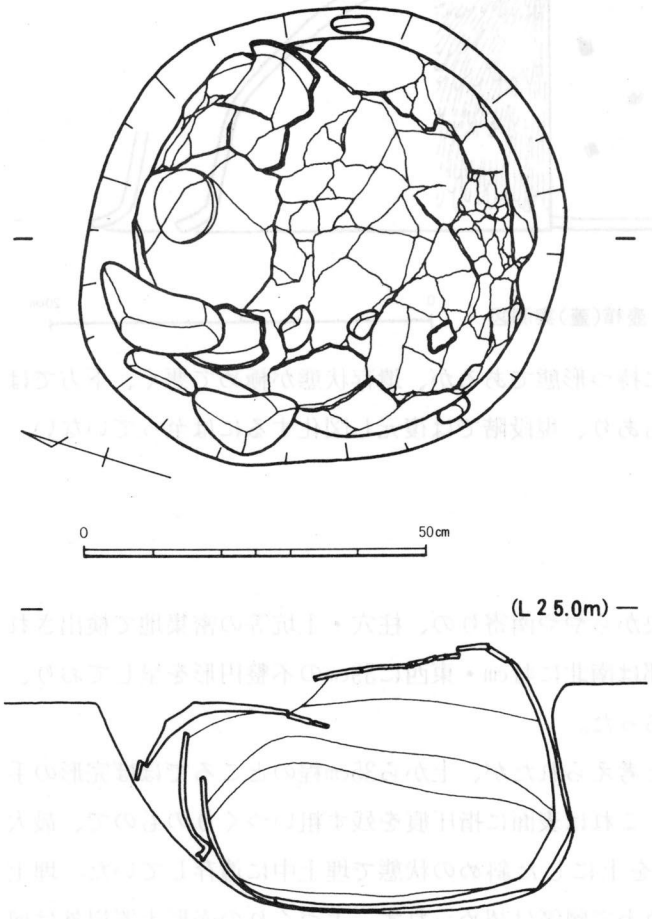
第193図
ＳＸ－14検出状況
（西から）



第194図　ＳＸ－14・壺棺実測図

比較的容易に検出することができた。また墓坑中には、埋葬時に壺棺や蓋を安定させるために挿入されたと考えられる河原石が多数認められた。

蓋に使われた土器は注口を持つ深鉢形土器で、棺に転用された壺形土器は、その頸部から上を埋葬以前に失っている。そしてＳＸ－13出土の壺形土器同様に、最大径を体高の中央より上に持つが最大径部分の突出が甘く、体部下方もやや丸味を帯びた形態を呈していることから、ＳＸ－13同様弥生時代後期後葉頃の所産ではないかと考えられる。



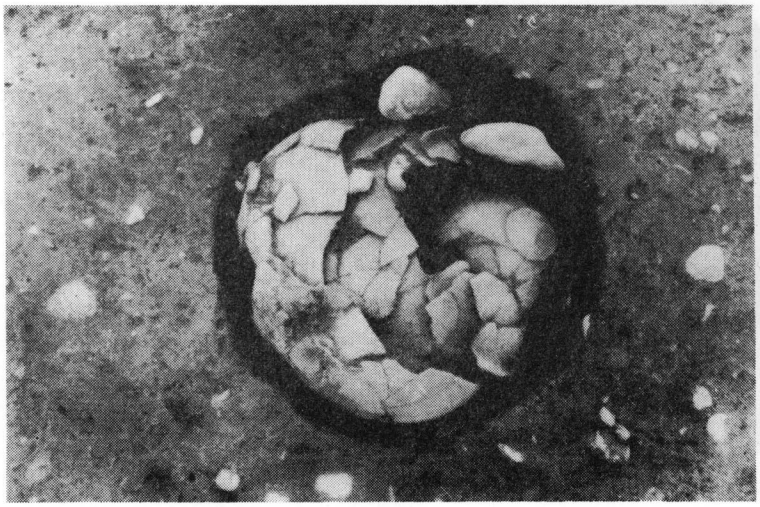
第195図　ＳＸ－15平・断面図

ＳＸ－15

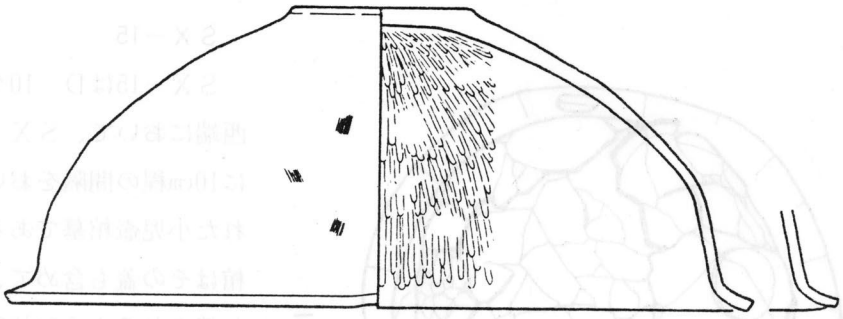
ＳＸ－15はＤ－10グリッドの西端において、ＳＸ－14の東側に10cm程の間隔をおいて検出された小児壺棺墓である。この壺棺はその蓋も含めて、上から押し潰されるような状態で遺存しており、墓坑上部が削平されているにもかかわらず遺存状況は良好であった。壺棺の主軸は50°、Ｎ－58°－Ｗ方位に傾いている。

壺棺内に堆積していた土層は下から暗黒色粘性土・暗灰色粘性土・暗灰色砂質土・灰褐色砂質土・灰白色砂の順に五種類に分層できた。いずれも壺棺が土圧で潰される前に徐々に堆積したもののようであり、土器片等の遺物は全く出土していない。

蓋は注口を持つ鉢形土器である。棺に転用された壺形土器はＳＸ－01・02・06・08・09・10



第196図
ＳＸ－15検出状況
（東から）



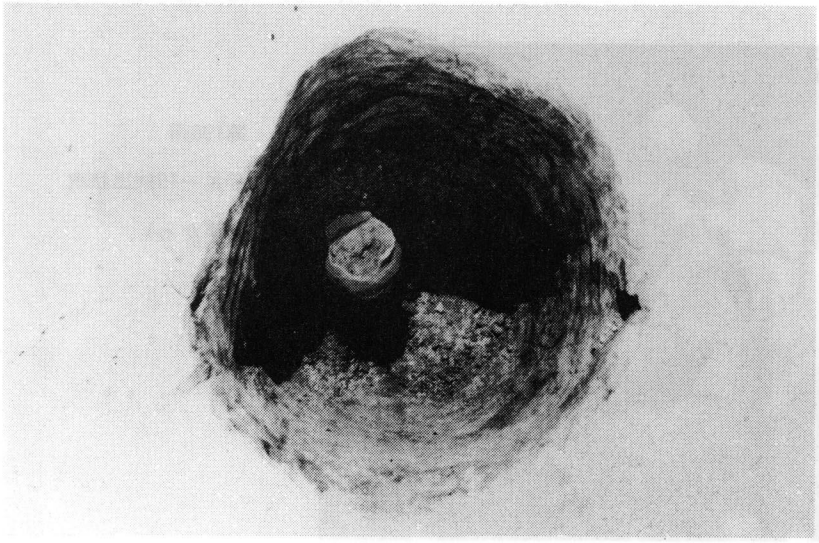
第197図　ＳＸ－15・壺棺(蓋)実測図　0　20cm

同様に最大径を体高の中央より上に持つ形態であるが、遺存状態が極めて悪く、下方では粘土状になってしまっている部分もあり、現段階では復元し図化するには至っていない。

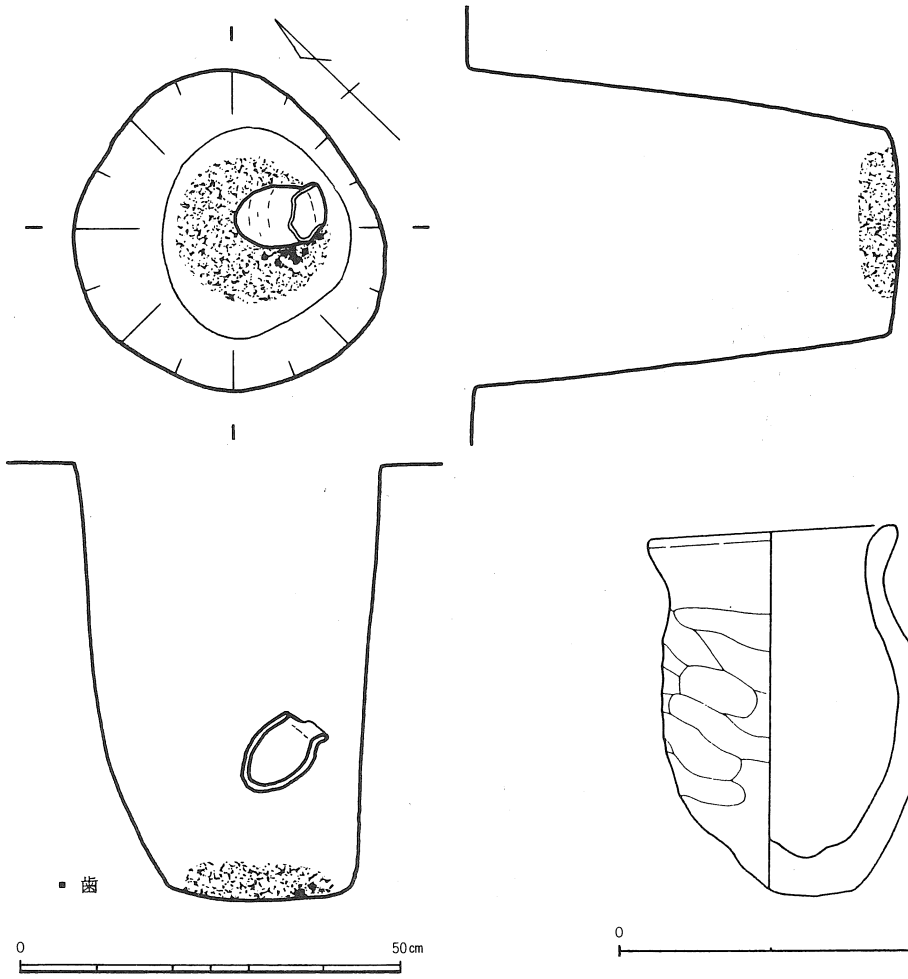
ＳＸ－16（小児土坑墓）

ＳＸ－16はＣ－２グリッドの中央からやや南寄りの、柱穴・土坑等の密集地で検出された柱穴状の遺構である。遺構の上部は南北に41cm・東西に39cmの不整円形を呈しており、検出された範囲内での深さは58cmあった。

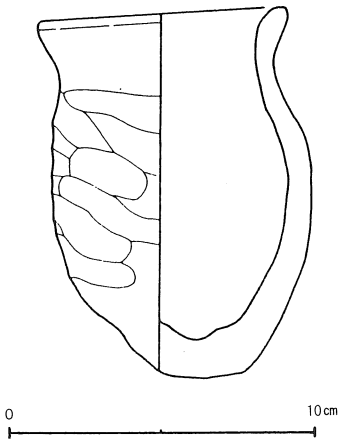
この遺構は当初柱穴ではないかと考えられたが、上から35cm程のところでほぼ完形の手づくねの壺形土器が出土している。これは表面に指圧痕を残す粗いつくりのもので、最大径が8.6cm・器高が12.2cmあり、口を上にした斜めの状態で埋土中に遺存していた。埋土は弥生土器の小片を少量含む黒褐色土で層序は認められず、手づくりの壺形土器以外は何も出土してはいないが、最下部中央で厚さ５cm程の塊状の暗黒色粘性土が認められ、その



第198図
ＳＸ－16検出状況
（北から）



第199図　ＳＸ－16平・断面図

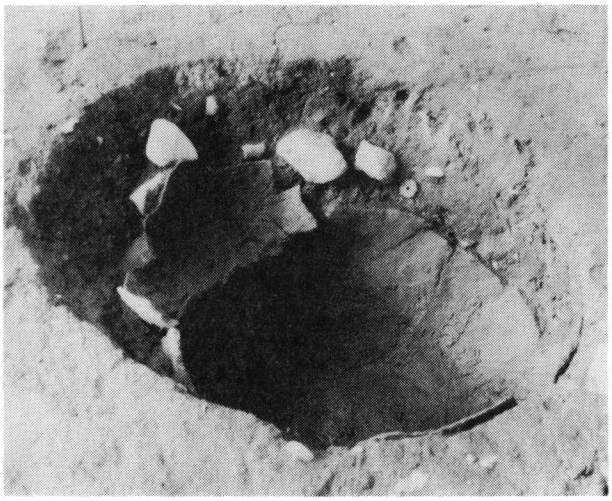


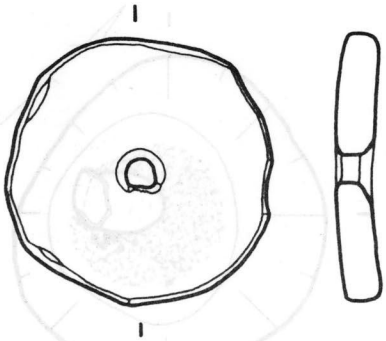
第200図　ＳＸ－16出土土器実測図

中に極めて小さな人間の歯数本と骨片が含まれていたことから、この遺構が小児土坑墓であることが判明した。

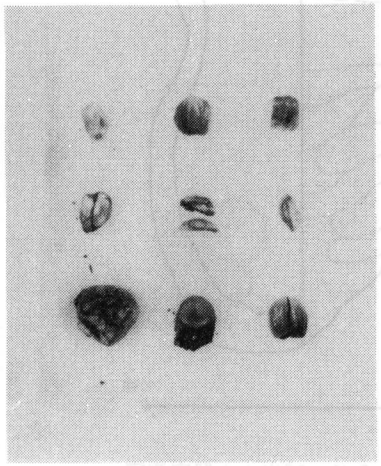
ＳＸ－16は弥生時代の遺構と考えられるが、その周辺の遺構との併行関係や、どの時期のものであるのかということについては明確にできないが、弥生時代後期末頃の遺構と考えられるＳＴ－26から出土した器高が6.5cm程の手づくねの壺形土器と相似形を呈しており、これと近接した時期の所産ではないかと考えられる。

調査区内では、このような柱穴状の掘り方は多数認められた。ＳＸ－16のように遺骨や供献されたと考えられる土器等は出土していないが、他の柱穴との並びが考えられない独立して遺存するものも少なくなく、他にも未確認の小児土坑墓がある可能性も充分に考えられる。

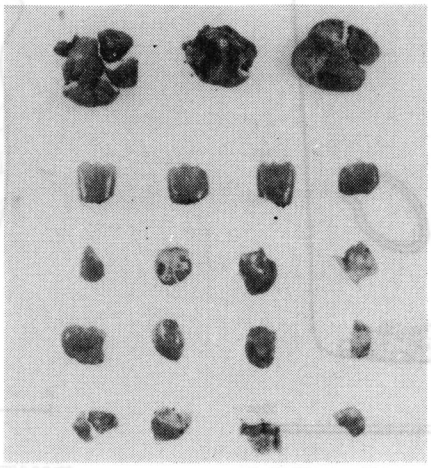




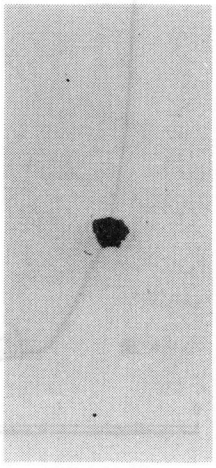
第201図ＳＸ－09墓坑内遺物出土状況と遺物実測図（原寸）



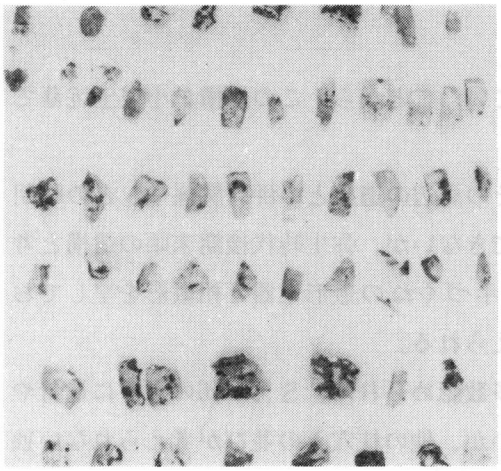
ＳＸ－01



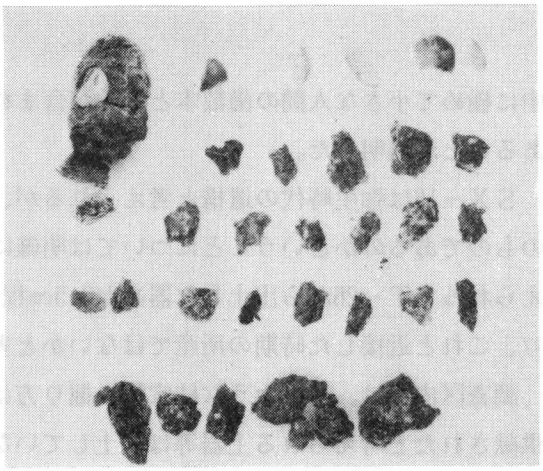
ＳＸ－03



ＳＸ－05

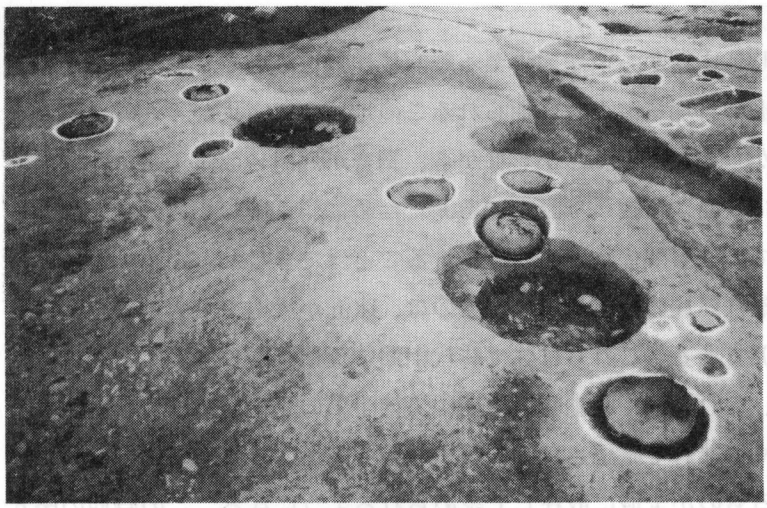


ＳＸ－09

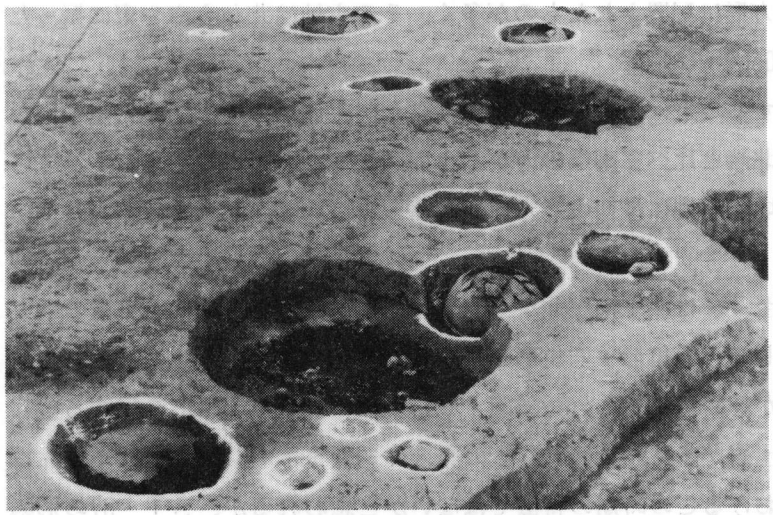


ＳＸ－16

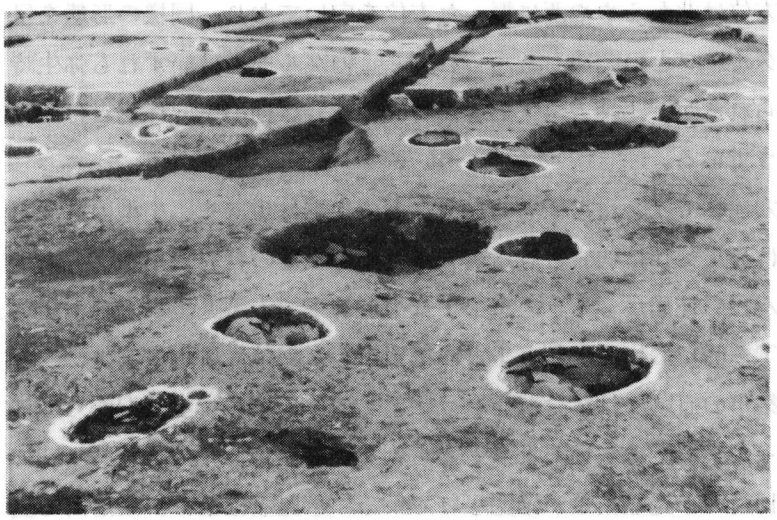
第202図　小児壺棺墓・土坑墓出土の歯（原寸）



第203図
小児壺棺墓検出状況
（C－7グリッド・南西か



第204図
小児壺棺検出状況
（C－7・D－7グリッド
・西から）



第205図
小児壺棺検出状況
（C－7・D－7グリッド
・東から）

2. 小　結

今回の調査では、弥生時代中期から後期末に至る竪穴住居群を中心とした遺構群が検出されたことから、やはり旧練兵場遺跡として知られるこの地域が、古代から連綿たる人々の生活の場であったことがうかがえる。しかしながら、調査が河川の改修工事に伴うもので、発掘区が遺跡を南北に縦断する狭長な設定であったために、正確な集落の範囲や、検出された遺構群の集落内での位置関係などを明確にすることはできなかった。

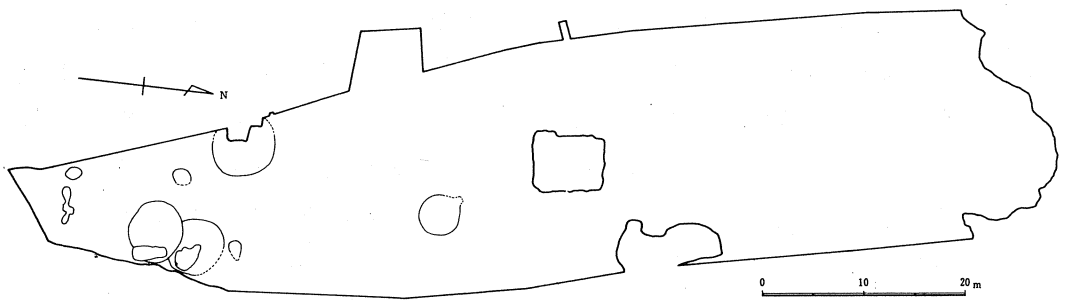
調査区内で検出された竪穴住居の中で最も古いものは、床面が浅くやや大型の不整円形を呈するＳＴ－04・05・08である。これらは弥生時代中期中葉前半頃のもので、調査区南端に片寄っている。また、これに続く弥生時代中期中葉後半頃の、小型で円形を呈するＳＴ－19がここから北側にやや離れて確認されている。（第206図・①）弥生時代後期頃になると、やはり円形を呈するものが全域に散在して認められるようになる。この時期の竪穴住居では、柱穴が床面に方形に配置されたものが多く、その主軸は北からやや東に振った方位に向いている。（第206図・②）

現状から旧地形を復元することは難しいが、検出された竪穴住居の遺存状態と現地形からみて、当時は調査区の北端と比べて南端の方が１ｍ程高かったものと考えられる。この地区では、弥生時代中期頃、南側に最初の竪穴住居が造られ、次第に北一帯に広がっていったようである。

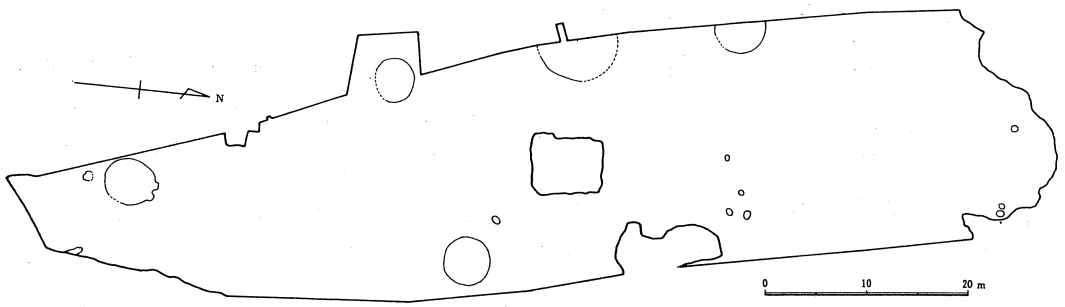
弥生時代の終末期頃に至っては、主軸が北からやや東に振った方位を向いた多数の隅丸方形の竪穴住居を中心として、五角形・六角形を呈するもの、大型で円形を呈するものなど様々な形態の竪穴住居が認められる。（第206図・③）また、大型で不整形を呈する竪穴住居や、西瀬戸内海系の土器が多く出土した唯一の竪穴住居（ＳＴ－37）が、北端に片寄っている点もこの集落におけるこの時期の特徴ではないかと思われるが、ＳＴ－37の形態は円形に近く、その主軸方位は北からやや西に振った方位を向いており、同様の形態を呈するＳＴ－02・21・27のグループとの関連も考えられる。このグループはいずれも弥生時代終末期頃の所産と考えられるが、主軸方位・形態が特異であり、他の竪穴住居とは区別して考える必要がありそうである。

弥生時代終末期頃の竪穴住居では、日常生活的な甕などの土器は少なく、小型の鉢などが極めて多かった。中にはＳＴ－16に代表されるような、小型土器の特異な出土状況も少なくはない。また、ほとんどの住居からガラス小玉・管玉・勾玉・土製丸玉などの玉類が出土しており、中でもＳＴ－09において土製丸玉と伴に出土した銅鏡片については、住居内で行なわれた何等かの祭事の痕跡ではないかという印象が強く、その出土状況から、これが竪穴住居の廃絶に伴った祭祀ではないかとも考えられる。

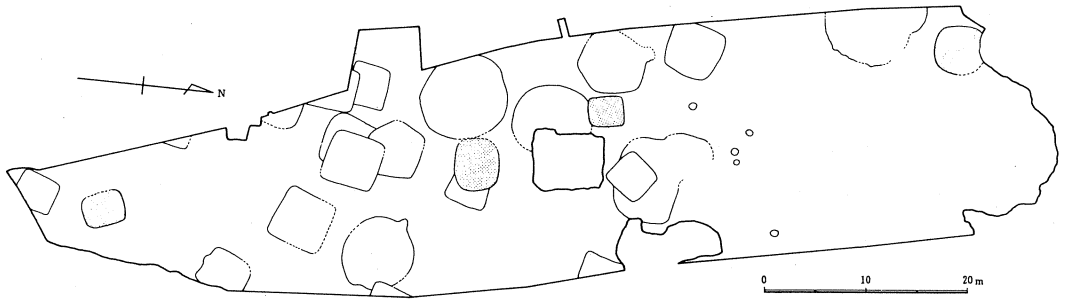
また、今回の調査では15基の小児壺棺墓が確認されている。小児壺棺墓は、集落内で竪



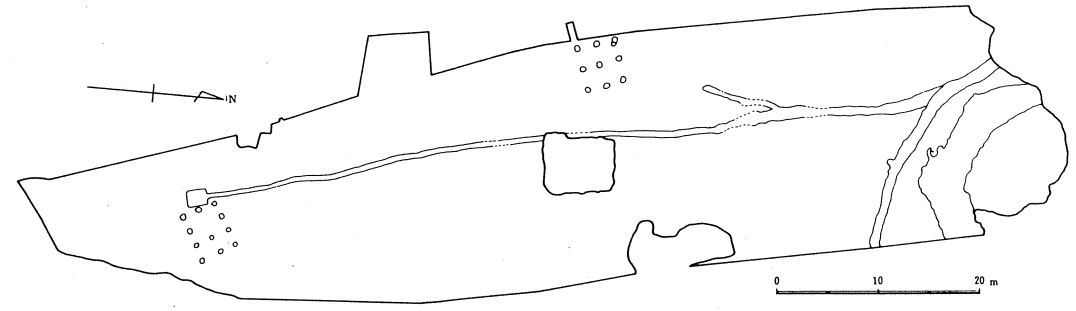
①弥生時代中期の遺構配置図



②弥生時代後期の遺構配置図



③弥生時代終末期の遺構配置図



④古墳時代の遺構配置図（P．142～P．153参照）

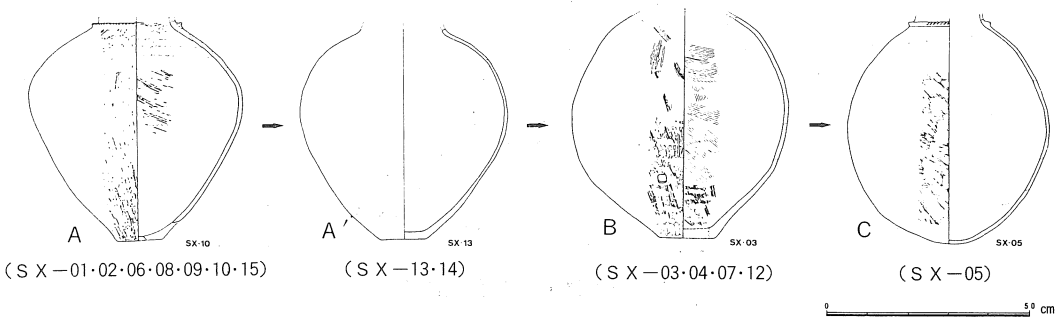
第206図　時代別遺構配置図

穴住居に極めて近い位置で検出されたＳＸ－01・02を徐けば、竪穴住居や柱穴、土坑などの遺構が全く認められなかった調査区の北東部に集中しており、それぞれの棺に転用されている壺形土器にも時期的な形態の変化がみられることから、これらの墓は集落と併行して形成されていったものであり、ここが連続して使用された墓地であると考えられる。

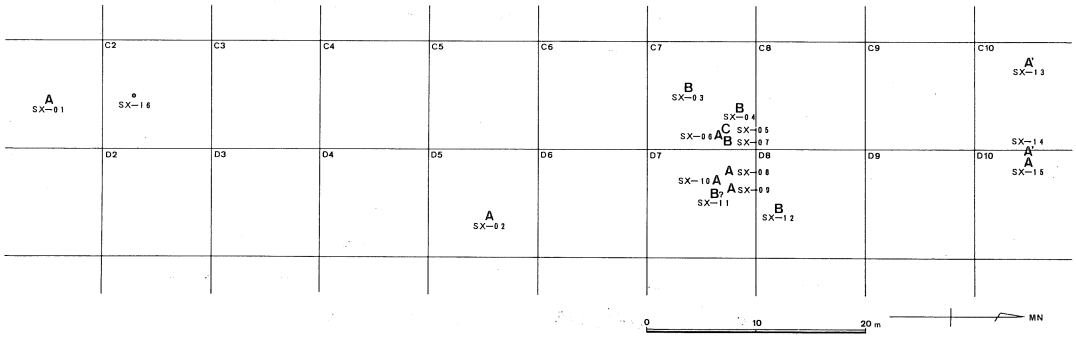
墓地形成の過程は、棺に転用されている壺形土器の形態分類と、その出土位置から考えてみた。（第208・209図）これをみると、壺棺の形態が古いものは散在しているが、新しい形態を呈するものが古い形態のものを含めてＣ－７～Ｄ－７グリッドに集中しており、頭初は個人の墓であったものが、その数の増加に伴い特定の場所に集まるようになり、次第に共同の墓地を形成していった様子がわかる。

壺棺とその蓋は、いずれも日常生活で使用されていたものの転用らしい。壺棺の頸部から上は埋葬時以前に失われているようである。また、壺棺を墓坑内に約45°に傾け、口を北から西にかけての方位に向けて埋葬していることなど、共通性が多く認められる。そして、墓地が集落から非常に近くに位置しており、小児の埋葬に限られていることなどから、この集落を形成した弥生時代の人々が、子供という存在を特別なものとしてとらえていたのではないかと考えられる。

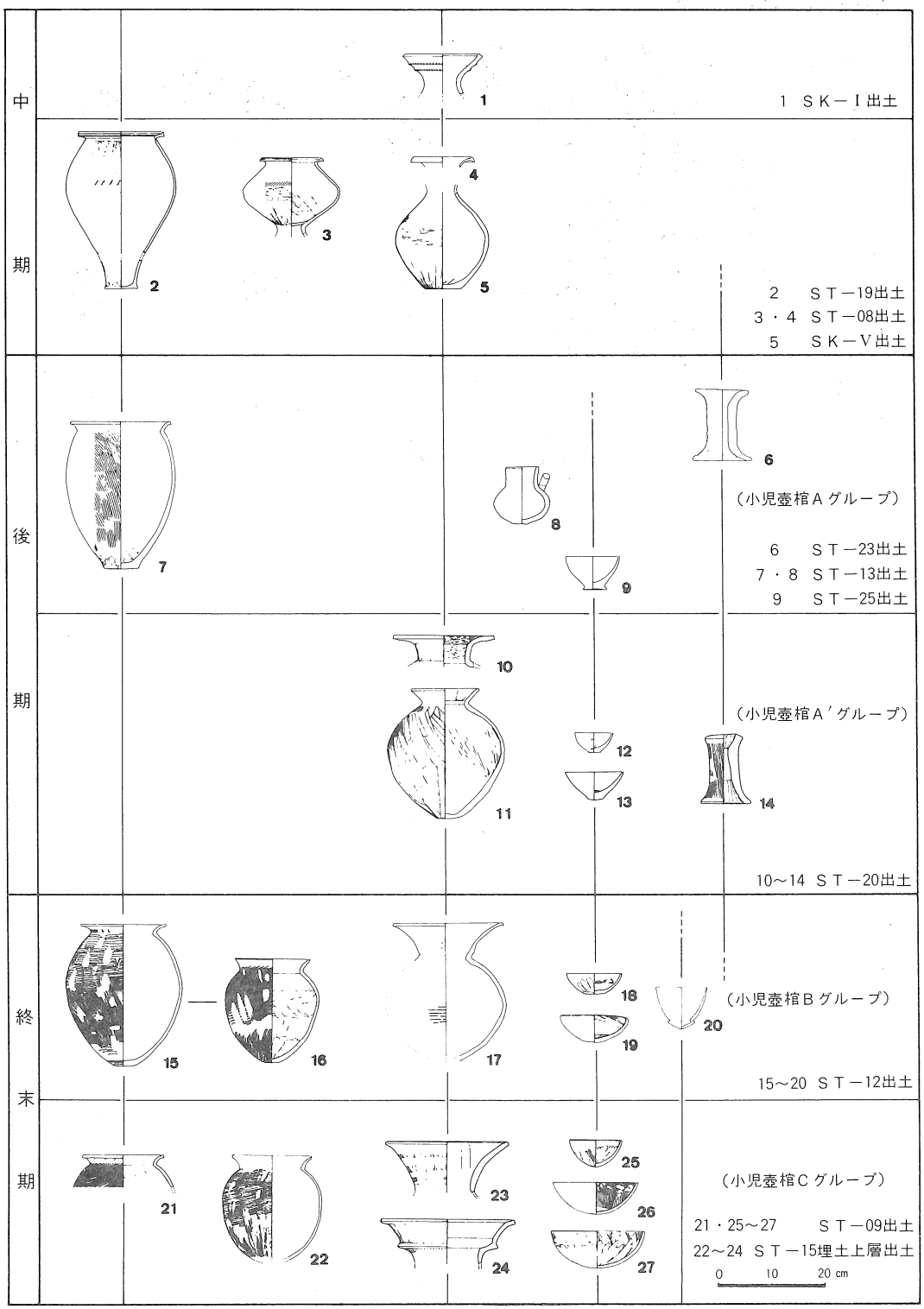
最近も市内において、弥生時代の竪穴住居や小児壺棺墓の発見が相次いでおり、今後それらの資料と比較・検討をしてゆきたい。



第207図　小児壺棺の形態分類

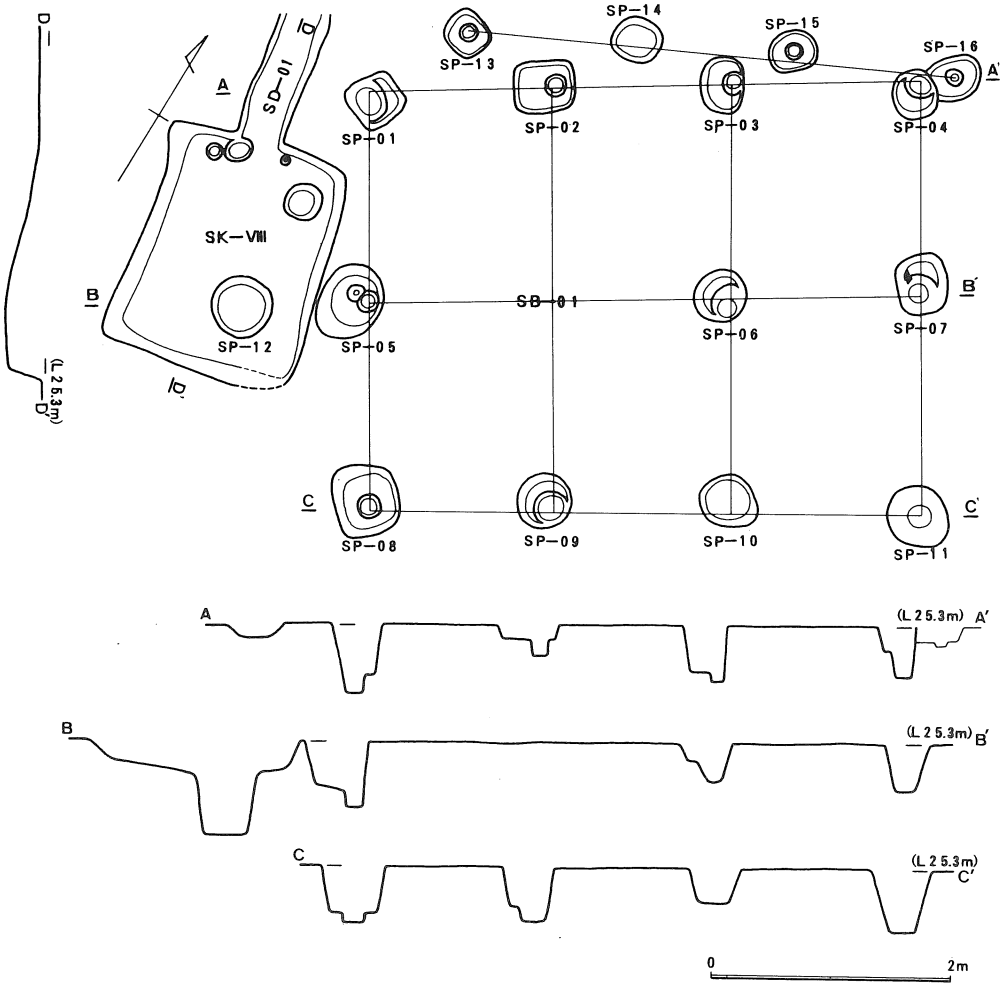


第208図　小児壺棺墓・土坑墓位置図



第209図　彼ノ宗遺跡出土弥生土器編年試案表

③古墳時代の遺構と遺物



第20　第210図　ＳＢ−01・ＳＫ−Ⅷ平・断面図

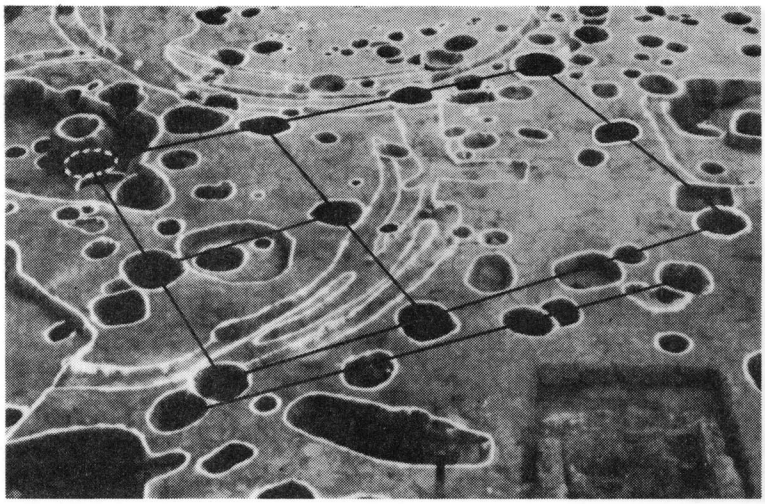
ＳＢ−01はＤ−２グリッドの東端からＥ−２グリッドの西側にかけて検出された、11個の柱穴によって構成される南北に3.6ｍ・東西に4.6ｍの、Ｎ−31.5°−Ｗ方位を向いた掘立柱の建物跡である。いずれの柱穴も掘り方が50〜60cmと比較的大きなもので、埋土はいずれも黒色粘性土であった。柱穴の埋土中には弥生土器片の他に須恵器片も含まれており、古墳時代以降の遺構であると考えられた。この建物は二間・三間であるが、ＳＰ−05と06の間に柱穴をもたない変則的な構造を呈しており、柱穴の深さが一定でないことから、遺構の削平に伴って消滅したとも考えられる。

ＳＢ−01の周辺には、これと同時期のものと考えられる遺構としてＳＫ−Ⅷ・ＳＤ−01・ＳＤ−02が認められる。ＳＫ−ⅧはＳＢ−01のすぐ西側で検出された、南北に２ｍ・東西に1.7ｍの長方形を呈する土坑で、主軸方位はＮ−12.5°−Ｗを向いている。深さは北側で４〜５cmと浅

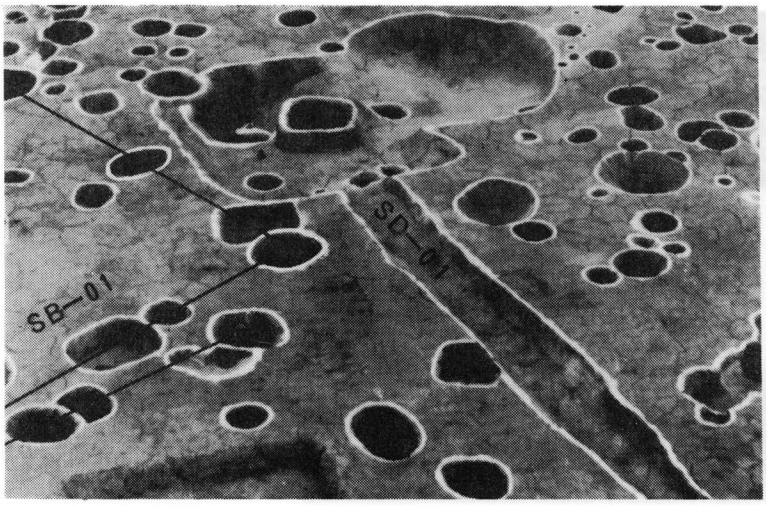
いが南に向かって傾斜し、南側では13cmを計る。この土坑の中央から南寄りにはＳＰ－12が認められる。ＳＫ－Ⅷ とＳＰ－12には切り合いが認められず、同一時期のものと考えられるが、ＳＰ－12がＳＢ－01の柱穴に伴うものなのか否かは不明である。ＳＫ－Ⅷの埋土は小礫や弥生土器小片を含む黒色粘性土で、古墳時代後期頃の須恵器片が出土している。

ＳＫ－Ⅷの北端からはＮ－約13°－Ｗ方位に向かって、Ｕ字形の断面を呈するＳＤ－01が延びている。ＳＤ－01は全長が約75ｍあり、北に向かってゆるやかに下っている。南端では幅40cm・深さ13cm、北端では幅135cm・深さ20cmとなっており、その遺存状況からみてＳＫ－ⅧがＳＤ－01の起点であり、いずれもＳＢ－01に伴う施設であると考えられる。ＳＤ－01の埋土もやはり小礫や弥生土器片を多量に含む黒色粘性土であり、古墳時代後期頃の須恵器・土師器などが出土している。

ＳＤ－02はＳＢ－01の東側で検出された逆台形の断面を呈する溝で、上部幅が1.2～1.3ｍ・



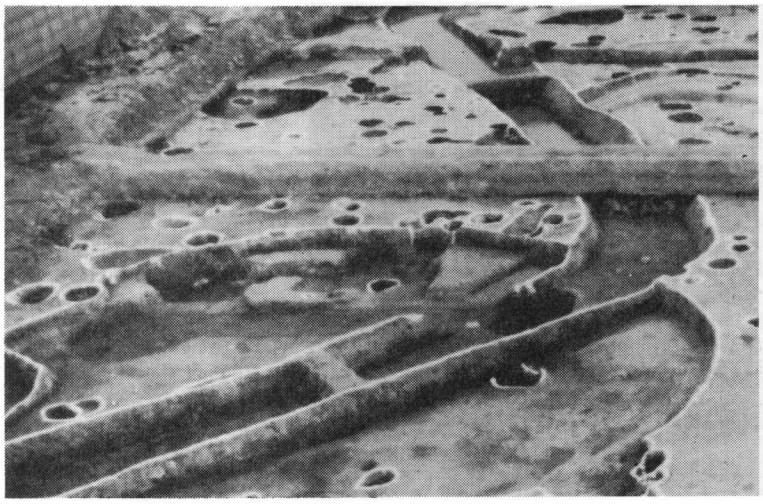
第211図　ＳＢ－01（北から）



第212図
ＳＫ－ⅧとＳＤ・01
（北から）

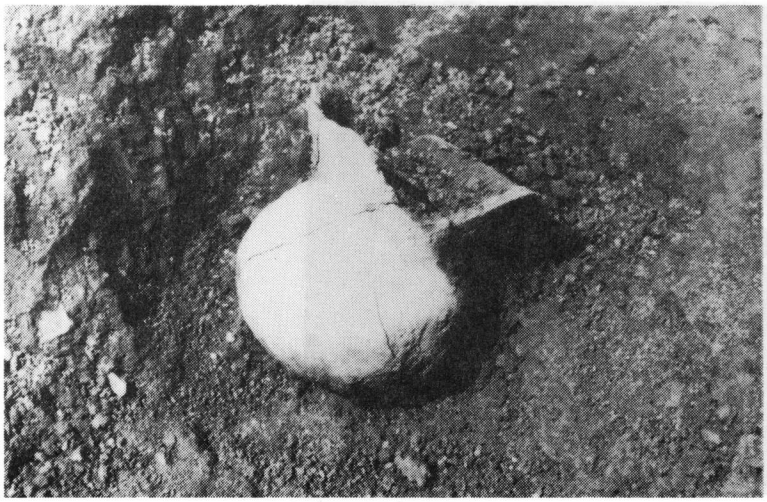
底部幅が60～80cmある。検出された範囲での溝の深さは35～40cmあったが底部は比較的平坦であり、一定方向への傾斜は認められなかった。この溝はＥ－２グリッドからＤ－４グリッドまではＮ－34°－Ｗ方向に直線的に延びており、Ｄ－４グリッドでＮ－45°－Ｅ方向に向きを変え、やはり直線的にＥ－４グリッドに延びている。その遺存状況などからみて、水路というよりも、何らかの施設に伴う地割りの溝ではないかと考えられる。

ＳＤ－02の埋土はＳＤ－01の埋土と同様に、礫や弥生土器片を多量に含む黒色粘性土のみで層序は認められず、やはり古墳時代後期頃の須恵器・土師器などが出土している。特にＳＢ－01のすぐ南側のＳＴ－06をＳＤ－02が切っている部分では、甕・横瓶・坏などの須恵器の他に土師器の壺やミニチュアの坏形土器が出土している。土師器の壺とミニチュアの坏形土器は二点づつ出土しており、それぞれが同様の形態で同一の胎土・調整・焼成であり、明らかに対をなしている。また、壺はいずれにも体部中央に、焼成後に外部から施された直



第213図

ＳＤ－02（北から）



第214図

ＳＤ－02遺物出土状況